松本市文化財調査報告No.207

長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡

―第15次発掘調査報告書―

信州大学附属図書館
定期刊行物

2011.3

松本市教育委員会

長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡

―第15次発掘調査報告書―

2011.3

松本市教育委員会

例言

1　本書は、平成21年8月27日～平成22年1月28日に実施された、長野県松本市芳野179番126、179番127、179番128に所在する出川南遺跡第15次調査の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は、長野県による県営住宅南松本団地建設事業（12号棟）に伴う緊急発掘調査であり、長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会で発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。

3　本書の執筆は、第Ⅲ章第３節１：直井、第Ⅲ章第３節２：石井、その他：福沢が行った。

4　本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記　中澤温子、百瀬二三子、山口明子

遺物保存処理・接合復元　佐々木正子、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、山口明子

遺物実測・トレース・版組み　（土器）竹内直美、竹平悦子、八板千佳
（金属製品）洞沢文江
（石製品）石井佑樹

遺構図整理・トレース・版組み　村山牧枝

写真撮影　（遺構）石井佑樹、福沢佳典
（遺物）宮嶋洋一

編集・総括：福沢佳典

5　竪穴住居址については出川南遺跡第１次調査から通して番号を付し、その他の遺構については本次調査で１号から番号を付している。

6　本書で用いた略記は次のとおりである。
第○号住居址→○住、第○号土抗→○土、ピット○→Ｐ○
また、単独のものは「Ｐ１」、住居址付属のものについては「P1」のように記し区別した。

7　図中で用いた方位記号は真北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。また、標高・水平基準は東京湾平均海水面水準（Ｔ.Ｐ.）である。

8　土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。

9　本書では以下のものをスクリーントーンで表した。
遺構：焼土・被熱範囲
遺物：黒色処理

10　遺構図はＳ＝1／80、詳細図はＳ＝1／40 で掲載した。遺物図は、土器：Ｓ＝1／4、石製品および鉄製品：Ｓ＝1／2またはＳ＝3／4で掲載した。

11　遺構・遺物の記述で用いた古代の土器の種別・器種・時期区分等は、次の文献による。
（財）長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－総論編』

12　土器実測図において、断面白抜きは土師器・黒色土器、断面黒塗りは須恵器とした。

13　本調査における出土遺物および測量図・写真等の諸記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒399-0823 長野県松本市中山3738-1　TEL 0263-86-4710　FAX 0263-86-9189）に保管・収蔵されている。

目次

例言
目次
第Ⅰ章　調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第１節　調査経過
　第２節　調査体制
第Ⅱ章　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第１節　地理的環境
　　１　出川南遺跡付近の地形・地質の概観
　　２　発掘調査地点の地形・地質
　第２節　歴史的環境
　第３節　過去の調査
第Ⅲ章　調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第１節　調査の方法
　第２節　遺構
　　１　概要
　　２　竪穴住居址
　　３　土坑
　　４　溝
　　５　石積遺構１
　第３節　遺物
　　１　土器
　　２　石製品
　　３　鉄製品
第Ⅳ章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　第 15 次調査区壁面の土層断面図（Ｓ＝1／80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第２図　調査地の位置と周辺遺跡（Ｓ＝1／25,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第３図　過去の調査地点（Ｓ＝1／10,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第４図　15 次周辺の調査区（Ｓ＝1／2,500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第５図　調査区の位置（Ｓ＝1／1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第６図　遺構配置図（Ｓ＝1／400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第７図　遺構（１）・・・20
第８図　遺構（２）・・・21
第９図　遺構（３）・・・22
第 10 図　遺構（４）・・23
第 11 図　遺構（５）・・24
第 12 図　遺構（６）・・25
第 13 図　遺構（７）・・26
第 14 図　遺構（８）・・27
第 15 図　遺物（１）・・40
第 16 図　遺物（２）・・41
第 17 図　遺物（３）・・42
第 18 図　遺物（４）・・43
第 19 図　遺物（５）・・44
第 20 図　遺物（６）・・45
第 21 図　遺物（７）・・46
第 22 図　遺物（８）・・47
第 23 図　遺構分布図（古墳時代後期）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第 24 図　遺構分布図（奈良時代）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第 25 図　遺構分布図（平安時代前期）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

表目次

第１表　過去の調査一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第２表　竪穴住居址一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第３表　土坑・ピット一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第４表　溝一覧・・19
第５表　土器観察表・・35
第６表　石製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第７表　鉄製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査経過

出川南遺跡は松本市街地の南、双葉から芳野地区に広がる遺跡である。昭和61年に第1次発掘調査が行われて以来、これまで14次にわたる調査が実施されている。今回報告する第15次調査は、長野県住宅課による県営住宅南松本団地建設事業（12号棟）に伴う緊急発掘調査である。平成21年4月27日付で、文化財保護法第94条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が長野県教育員会に提出された。今回の事業地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である出川南遺跡に該当しており、事業地周辺においても緊急発掘調査が行われていることから、埋蔵文化財を包蔵していることが予想された。松本市教育委員会では、建設工事の際に遺跡が破壊される恐れがあるため、5月1日に出川南遺跡に関わる保護意見書を長野県教育委員会教育長に提出し、5月18日付で埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査実施の通知を受けた。その後、事業者である長野県住宅課と協議を行い、発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、長野県と松本市の間に平成21年8月4日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は平成21年8月27日～平成22年1月28日に実施した。調査終了後、平成22年2月3日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日、埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成22年2月17日付で長野県教育委員会教育長より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け、10月6日に出土文化財譲与申請書を長野県教育委員会教育長に提出し、10月15日出土文化財の譲与についての通知を受け、10月21日付で出土文化財の受け入れを行った。

出土遺物及び測量図・写真等の調査記録の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行い、本書の刊行に至る。

第２節　調査体制

調査団長：伊藤　光（松本市教育長）

平成21年度（発掘調査）
調査担当者：福沢佳典、石井佑樹
発掘協力者：朝倉秀明、石川一男、今井太成、加藤朝夫、金井秀雄、猿楽あい子、清水陽子、曽根原裕、
高山知行、茅野信彦、中嶋　健、中村　明、三谷久美子、宮澤昭敬、百瀬二三子、山田　茂

平成22年度（報告書刊行）
報告書作成：直井雅尚、福沢佳典、石井佑樹
調査員：宮嶋洋一
整理協力者：荒井留美子、柏原佳子、久根下三枝子、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、白鳥文彦、
洞沢文江、前沢里江、百瀬二三子、村山牧枝、八板千佳、山口明子

事務局：松本市教育委員会文化財課
小穴定利（課長　～平成22年3月）、塩原明彦（同　平成22年4月～）
大竹永明（課長補佐 埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（主査）、
小山高志（主任　～平成22年3月、主査　平成22年4月～）、柳澤希歩（嘱託）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

１　出川南遺跡付近の地形・地質の概観

出川南遺跡が立地する付近一帯は、古くは広い畑地で小麦・桑が栽培されていた。第２次世界大戦末の工場疎開による工業団地造成、南松本駅新設により、土地の削平、平坦化、客土が行われ、その様相を一変させた。戦後、食糧不足・食料増産のため土地造成が行われ広く水田化したが、1963 年の国道 19 号線の開通に伴い商業地及び宅地として市街地化が著しい。そのため現在、原地形の確認は困難である。

遺跡周辺の標高は 593～598mで、東方約 500mに田川、西方約 2200mに奈良井川が北流するため、南から北に向かってわずかに低くなっていく。地形的には奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する合流扇状地の末端に位置しており、調査地の北東ないし北西方約 500mには多くの湧水がみられ、特に北方の穴田川・頭無川沿いは沼沢性の沖積地である。調査地周辺でも地下水位は 2.2～6.9mが報告されている。

過去の調査成果からは、基底礫層は奈良井川系統（古生層系統）で共通しており、調査地点によって上層の堆積層が田川・牛伏川系統と奈良井川系統に分けられる。これらの氾濫や乱流により複雑な堆積状況を呈し、砂礫層の間には雨水・小流により洗い出された砂質土・粘質土の間層が形成され、遺跡が立地する面となる。出川南遺跡第１・６・８次調査地点では弥生時代後期～古墳時代中期、古墳時代後期～平安時代の上下２面の遺構面が確認されている。

２　発掘調査地点の地形・地質

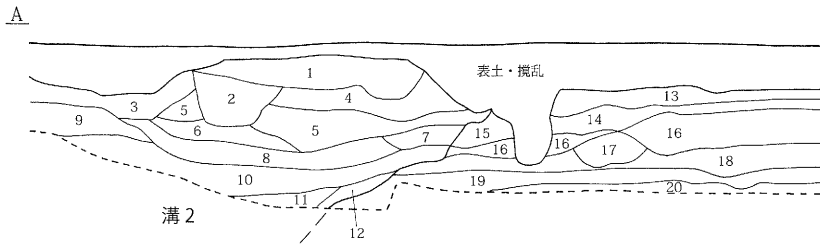
今回の発掘調査地点は松本市芳野 179 番 126 ほかにあり、県営住宅南松本団地の敷地内である。第 14 次調査地点の北に位置する。付近の標高は 596.8m前後である。調査開始時は、旧県営住宅Ｂ４～Ｂ７棟解体後の更地となっており、現地表面では微地形は確認できない。上述のように、調査区周辺は複雑な堆積状況であるが、調査区壁面の土層断面図（第１図）および遺構断面図の観察から調査区の土層堆積状況は述べる。

全ての地区において撹乱が激しく、東区は概ね現地表面から約 0.5mまで現代の表土・撹乱層である。深いところでは約1.4mまで達し遺構を破壊している。調査当初、東区北壁の東端付近を基本土層として土層の観察を行っていたが、石積遺構１検出後、その他の地点とは土層が異なることが判明した。撹乱の下、地表面から約 1.2mまでは１～10 ㎝大の礫が混入する黄褐色～暗灰黄色砂質土層が堆積する。これらは遺物を含まないが、同じく石積１の内側の堆積を表す東壁中央（第 13 図）では確認できず、溝２より西側でも確認できないため石積１に関連する土層の可能性がある。18 層より下は自然堆積層と考えられる。

東区は概ね地表面から約 0.7～0.8m下の暗オリーブ褐色砂質土層を遺構検出面とした。それより下層は粘質土層をはさんで細砂層となる。遺構断面土層などの観察によると、わずかに西に向かってこれらの層は高くなっていくようである。そのため、東区の検出面の土相は溝３付近から東西で様相が異なり、西側では黒褐色弱粘質土層（溝３付近断面図の２層）または、暗灰黄色弱粘質土層（同 5 層）が遺構面となっている。鉄分を多く含むためか東側の 19 層に比べて暗くなる。

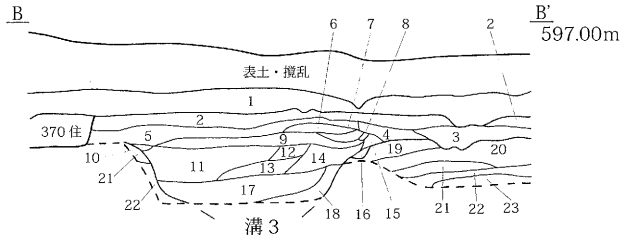
西区も現地表面から約 0.5mまで表土・撹乱層である。東区同様に深いところでは約 1.4mまで達している。撹乱層の下に灰～灰オリーブ色弱粘質土層をはさみ、褐色鉄分が多量混入する黄灰～暗灰黄色弱粘質土層（5 層）が堆積する。5 層の上面を遺構検出面とした。地表面から約 0.7mである。約 0.9m下から砂質土層（12 層）が堆積し、約 1.0mから下は砂礫層（15 層）に変わるようである。また、奈良・平安時代遺構面の一層下の暗灰黄色弱粘質土層（7 層）の上面で 372 住および 27 土といった古墳時代後期の遺構が検出されたため、古墳時代の遺構面とした。なお、3 層から掘り込まれる遺構もあるが、近世陶磁器が出土している。

東区 北壁東端 土層断面図



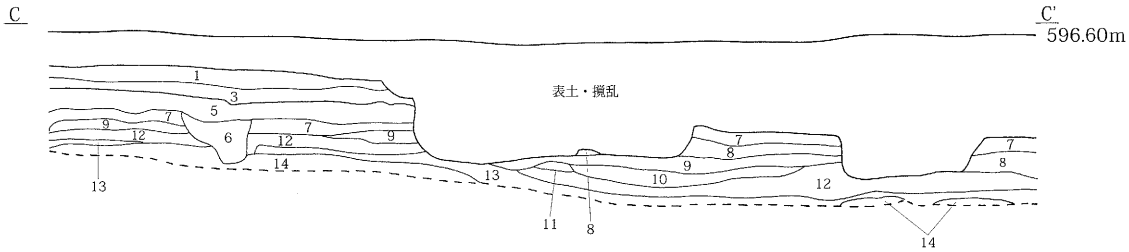
〔東区 北壁東端 土層断面図〕
1　溝 2 砂礫層（2 ～ 3 ㎝大の礫主体）
2　溝 2 砂礫層（4 ～ 5 ㎝大の礫主体＋粗砂 下層との境に鉄分沈着）
3　溝 2 砂礫層（10 ㎝大の礫主体＋粗砂 下層との境に鉄分沈着）
4　溝 2 砂礫層（6 ㎝大の礫主体）
5　溝 2 砂礫層（10 ㎝大の礫主体＋粗砂）
6　溝 2 砂礫層（4 ㎝大の礫主体＋細砂）
7　溝 2 砂礫層（5 ㎝大の礫主体＋細砂）
8　溝 2 砂礫層（2 ～ 4 ㎝大の礫主体＋粗砂）
9　溝 2 砂礫層（3 ～ 4 ㎝大の礫主体＋粗砂
10　溝 2 砂礫層（1 ～ 2 ㎝大の礫主体＋粗砂）
11　溝 2 砂礫層（～ 1 ㎝大の礫主体＋粗砂）
12　溝 2 砂礫層（5 ～ 20 ㎝大の礫主体＋細砂多量）
13　黄褐色砂質土（～ 3 ㎝大の礫中量、炭化物微量混入）
14　黄褐色砂質土（～ 2 ㎝大の礫少量混入）
15　オリーブ黒～灰オリーブ色弱粘質土（ ～ 10 ㎝大の礫少量混入）
16　暗灰黄色砂質土（1 ～ 3 ㎝大の礫中量、炭化物微量混入）
17　遺構覆土か　オリーブ褐色砂質土（2 ～ 3 ㎝大の礫少量混入）
18　暗オリーブ褐色砂質土（1 ～ 2 ㎝大の礫微量混入）
19　暗灰黄色粘質土（炭化物微量混入）
20　灰オリーブ色細砂層

東区 北壁溝 3 付近 土層断面図

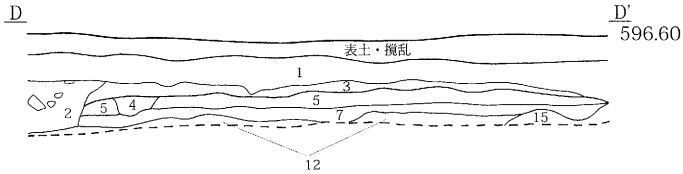


〔東区 北壁溝 3 付近 土層断面図〕
1　暗オリーブ褐色砂質土（～ 1 ㎝大の礫中量、鉄分多量混入）
2　黒褐色弱粘質土（鉄分多量混入）
3　黒褐～暗オリーブ褐色砂質（鉄分少量混入）
4　暗灰黄色砂質土（～ 1 ㎝大の礫微量）
5　暗灰黄色弱粘質（灰色粘土粒混入）
6　溝 3　砂礫層（～ 4 ㎝大の礫主体）
7　溝 3　砂層
8　溝 3　暗灰黄色砂質土
9　溝 3　砂礫層（～ 3 ㎝大の礫主体）
10　溝 3　砂礫層（～ 2 ㎝大の礫主体）
11　溝 3　砂礫層（～ 5 ㎝大の礫主体）
12　溝 3 砂礫層（～ 2 ㎝大の礫主体）
13　溝 3 砂礫層（～ 1.5 ㎝大の礫主体）
14　溝 3 砂礫層（～ 8 ㎝大の礫主体）
15　溝 3 暗灰黄色砂質土
16　溝 3 砂層（高杯出土層）
17　溝 3 砂礫層（～ 4 ㎝大の礫主体）
18　溝 3 砂礫層（～ 1 ㎝大の礫主体　砂混入多量）
19　灰オリーブ色砂質土（灰色粘土粒少量混入）
20　暗灰黄色砂質土（灰色粘土粒少量混入）
21　暗灰黄色弱粘質土（灰色粘土粒少量混入）
22　暗オリーブ色砂質土（灰色粘土粒少量混入）
23　暗灰黄色弱粘質土（灰色粘土粒少量混入）

西区 西壁南端 土層断面図

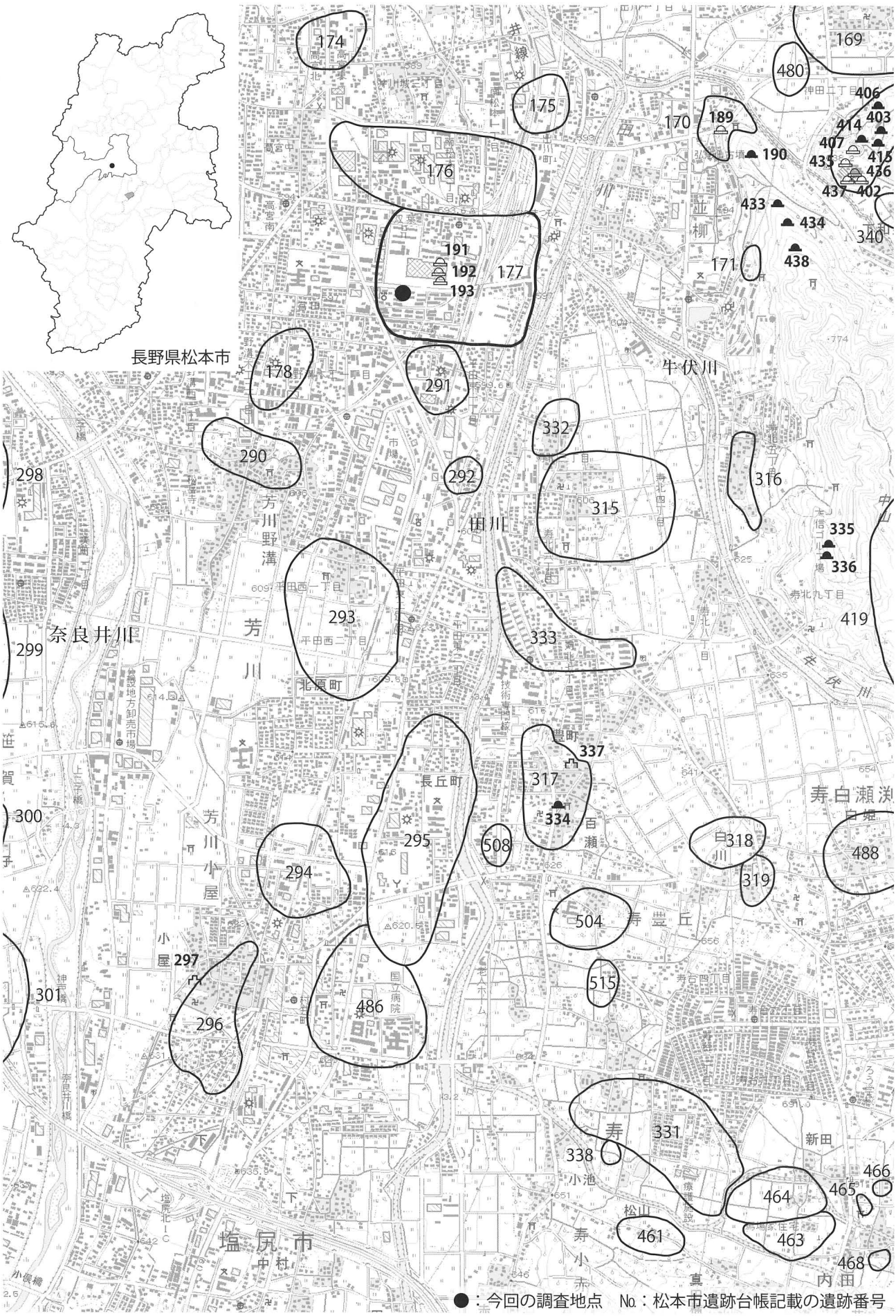


西区 南壁東端 土層断面図



〔西区 壁面土層断面図〕
1　灰～灰オリーブ色弱粘質土（～ 2cm 大の礫少量、炭化物微量混入）
2　遺構覆土　灰～灰オリーブ色弱粘質土（鉄分少量、炭化物微量混入）
3　黄灰～暗灰黄色粘質土（鉄分多量混入）
4　遺構覆土　暗灰黄色砂質土（灰色粘土粒少量混入）
5　黄灰～暗灰黄弱粘質土（鉄分多量混入　上層との境が遺構検出面）
6　遺構覆土 暗灰黄色弱粘質土（1 ～ 5cm 大の礫微量、灰色粘土粒中量混入）
7　暗灰黄色弱粘質土（灰色粘土粒中量混入）
8　暗灰黄色砂質土（灰色粘土粒中量混入）
9　灰色砂質土
10　灰～灰オリーブ色砂質土（～ 1 ㎝大の礫中量、灰色粘土粒中量、鉄分少量混入）
11　灰色砂質土（～ 1 ㎝大の礫中量混入）
12　灰～灰オリーブ色砂質土（灰色粘土粒少量混入）
13　灰～灰オリーブ色砂質土
14　砂礫層（粗砂多量混入）
15　砂礫層（細砂多量混入）

第 1 図　第 15 次調査区壁面の土層断面図（S ＝1 ／ 80）



第２図　調査地の位置と周辺遺跡（Ｓ＝1／25,000）

遺跡地図掲載遺跡

遺跡名：**169** 神田　**170** 平畑　**171** 山行法師　**174** 高宮　**175** 出川　**176** 出川西　**177** 出川南　**178** 五輪　**290** 291 平田北　**292** 平田　**293** 平田本郷　**294** 小原　**295** 高畑　**296** 小屋　**298** 下二子　**299** 中二子　**300** 上二子　**301** 神戸　**315** 竹渕　**316** 瀬黒　**317** 百瀬　**318** 白川　**319** 野田　**331** 小池　**332** 竹渕南原　**333** 向原　**340** 生妻　**461** 松山　**463** エリ穴　**464** 一ツ家　**465** くねの内　**466** 八幡原　**468** 長泉寺　**480** 神田西　**486** 村井　**488** 白姫　**508** 寿南久保　**504** 百瀬南　**515** 北起こし

古墳名：**189** 平畑1号　**191** 平田里1号　**192** 平田里2号　**193** 平田里3号　**419** 中山古墳群　**190** 弘法山(中山48号)　**402** 中山31号　**403** 中山32号　**406** 中山35号　**407** 中山36号（仁能田山）　**414** 中山58号　**415** 中山59号　**433** 中山北尾根1号　**434** 中山北尾根2号　**435** 棺護山1号　**436** 棺護山2号　**437** 棺護山3号　**438** 中山北尾根3号　**334** 耳塚　**335** 長峰下1号　**336** 長峰下2号

城館址：**297** 小屋城址　**337** 百瀬の陣屋　**338** 小池砦址

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺には数多くの遺跡が立地し、田川右岸、田川と奈良井川に挟まれた地域、奈良井川左岸の大きく３つの遺跡群に分けられる。

縄紋時代は、田川・奈良井川間の地域では現在、遺構・遺物は確認されておらず、田川右岸および奈良井川西岸では遺跡が確認されている。特に田川右岸の山寄りの地域では、**百瀬遺跡**第２次調査で早期の押型紋土器と若干の土坑が確認されている。その後、**小池**、**一ツ家遺跡**は中期、**エリ穴遺跡**は晩期に多量の耳飾りが出土する大規模集落が営まれている。

弥生時代中期以降になると、**百瀬**、**竹渕**、**竹渕南原遺跡**で規模の大きな集落が営まれる。中でも**百瀬遺跡**は、弥生時代中期末の百瀬式の標識遺跡として重要である。田川・奈良井川間の地域においても中期前葉～中葉に**出川**、**出川西**、**平田北遺跡**で遺物・遺構が確認されており、この地域の開発の初源といえる。後半になると、**出川南遺跡**でも住居址や遺物が確認され始め、墓域が形成されていた可能性もある。

古墳時代前期には、**高宮遺跡**で弥生時代後期後葉の箱清水式の名残を残すような甕や、東海系のパレス壺が出土しており、**出川南遺跡**でも東海系の古墳前期の土器や住居址が確認されている。東方約1.5㎞の中山丘陵突端には前期の前方後方墳である**弘法山古墳**が築かれており、この地域一帯が造営集団の主力と考えられるが、いまだまとまった集落は発見できていない。

中期になると、**出川西遺跡**で住居址２軒、配石遺構が７基、土器集中地点が19カ所確認されている。北東に位置する**高宮遺跡**でも土器集中地点が15カ所確認されている。ミニチュア土器や玉類、模造石製品、鉄鏃・鉄剣などが出土しており、これらはほとんど掘り込みを持たないような浅い凹地状地形の縁や底面に置かれている。また、土器群によっては高杯のみで構成されており、廃棄跡ではなく祭祀遺構と考えられる。該期の住居址も３軒確認されているが、この一帯が祭域として使用されていた段階があるようである。また、**出川南遺跡**第４次調査地点では**平田里古墳群**（**１～３号古墳**）の円墳３基が調査されている。**１号古墳**は５世紀後半～６世紀初頭と考えられ、周溝から出土した多量の円筒埴輪・形象埴輪と馬具類は県内でも貴重な資料である。後期は、**出川南遺跡**で大規模な集落が営まれ、松本市内でも最大規模の集落跡である。

奈良時代になると、**出川南遺跡**の南側から**平田北遺跡**にかけて集落が展開する。古墳時代後期に比べると規模が縮小しているようであり、平安時代前期以降になると、**出川南**、**平田本郷遺跡**、さらに南では**小原**、**吉田川西遺跡**など拠点的な集落が拡散・立地し始める。これらは交通の要衝に位置するようになったためと考えられ、中世に続く集落も存在する。

第３節　過去の調査

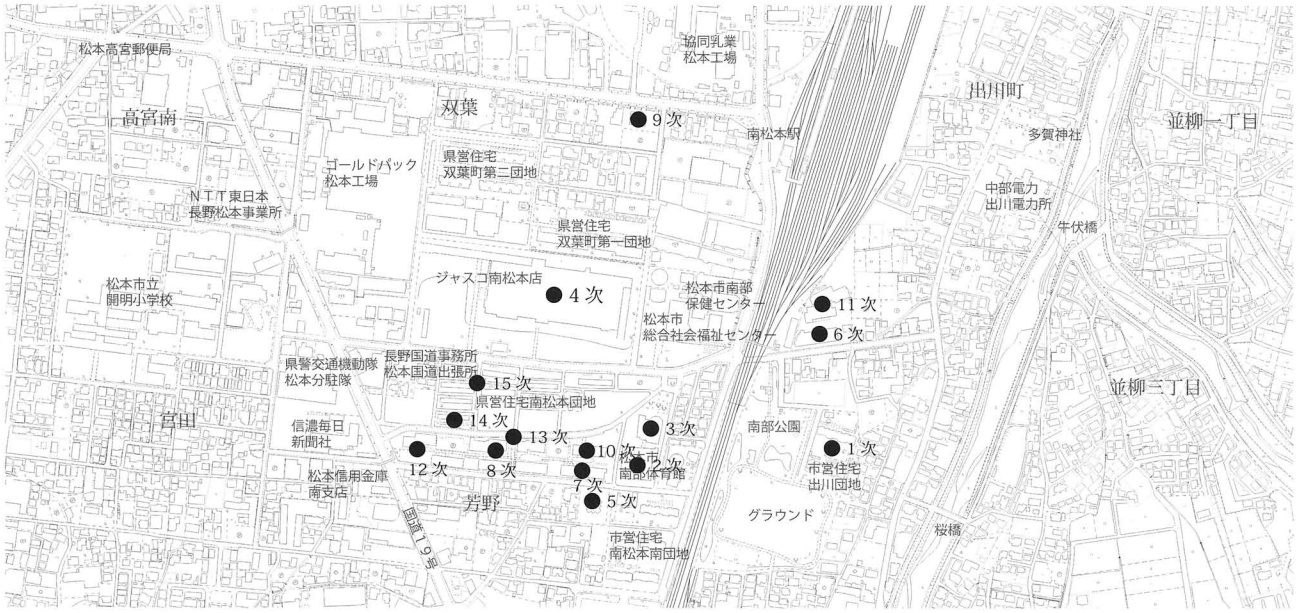
本遺跡はこれまでに 14 次の発掘調査が実施されている。各調査地点の位置を第３・４図に、調査成果の概要を第１表に示した。

第１次調査は昭和 61 年に行われ、南北２地区で弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址が２軒、平安時代の竪穴住居址が３軒確認されている。弥生時代後期前半に属する第４号住居址では、磨製石鏃３点、未製品８点および砥石などが出土しており、壁際に拳大の礫が多く出土していることからも、小工房的な性格も推測されている。また、竪穴状遺構３は溝を伴う土坑であり、溝中から遺物が集中して出土した。遺物は土師器の器台、壺の他に赤色塗彩された高杯、壺、甕などがあり、方形周溝墓の可能性もある。平安時代後期に属する第３号住居址では浮岩製の浮子が１点出土している。出川西遺跡でも平安時代の住居址から土錘が約 20 点出土しており、田川を漁場としていたとも推測できる。

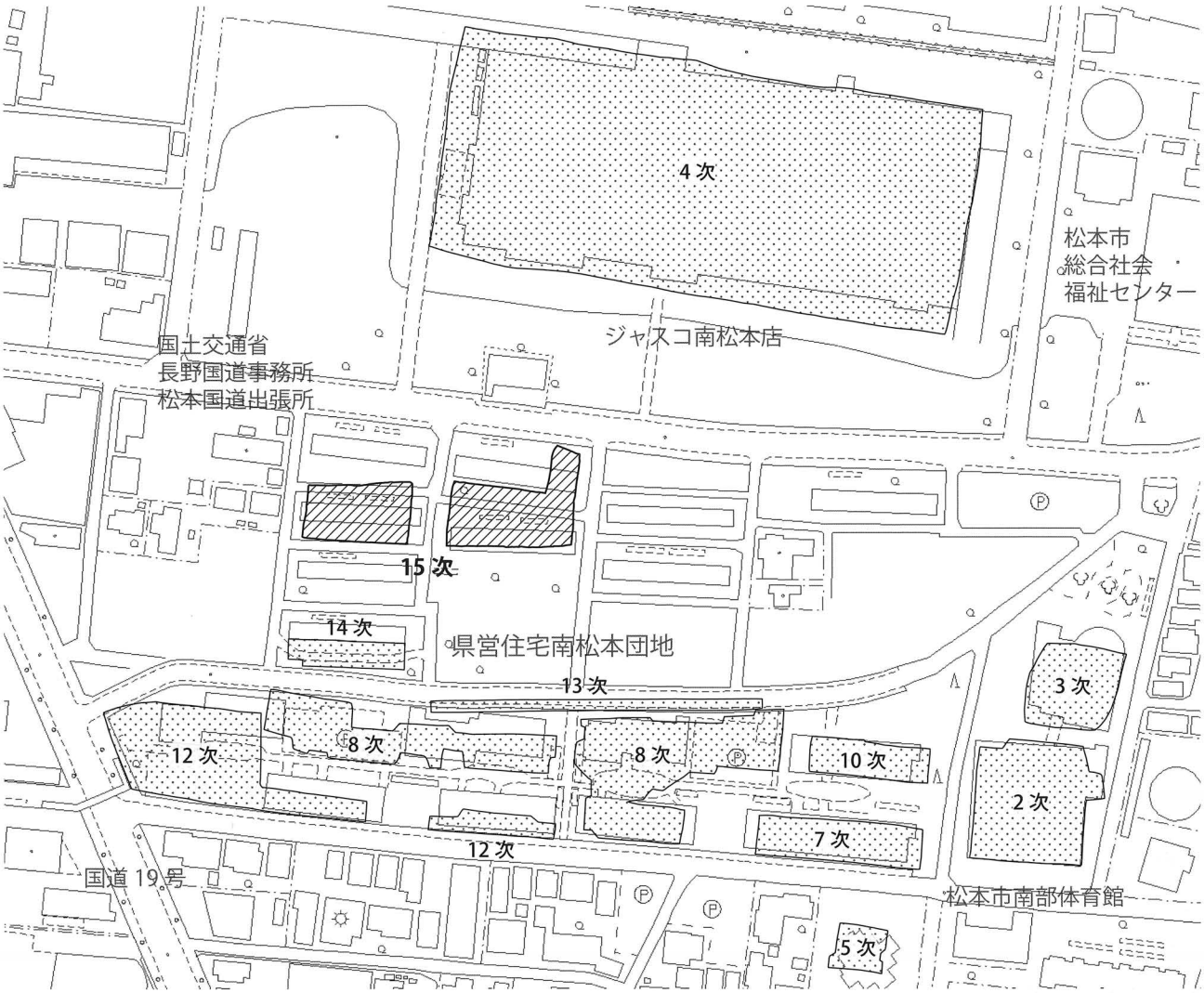
平成３年に行われた第４次調査では、古墳時代後半から平安時代後半にかけて 116 軒の竪穴住居址が確認されている。古墳時代後期の住居址は 113 軒で、６世紀後半～７世紀後半まで４段階の変遷を追うことができる。付近一帯に比較的規模の大きな集落が展開していることが明らかになっている。掘立柱建物址 21 棟も古墳時代後期に属するもので、数軒の竪穴住居址とセットになりひとつの単位を構成していると考えられる。

また、調査区東端では平田里１～３号古墳（第２図 191～193）が確認された。これらは中期後半～末に築造されたものと考えられ、周溝からは埴輪をはじめ周溝内祭祀に使用された遺物が多数出土している。特に１号古墳は平地に築造された松本平の古墳の中では最大規模のものである。５世紀後半以降の首長墓の展開を考えていく上で重要な資料と位置づけられる。

今回の 15 次調査地点周辺では、第４次調査を含め 10 次にわたる発掘調査が行われている。古墳時代後期～平安時代後期までの竪穴住居址 253 軒、掘立柱建物址 25 棟、土坑 401 基、自然流路を含む溝 24 条などが確認されている。また、第８・12 次調査では緑釉陶器の生地、第５次調査でも美濃須衛窯、尾北窯産など東海系の須恵器蓋・杯や、畿内系暗文杯などの搬入品も一定量見られる。古墳時代中期の平田里古墳群と同時期の住居址はまだ確認できていないが、古墳時代後半の大規模な集落から平安時代後期にかけて存続した集落として、松本市域でも重要な遺跡であることが明らかになっている。



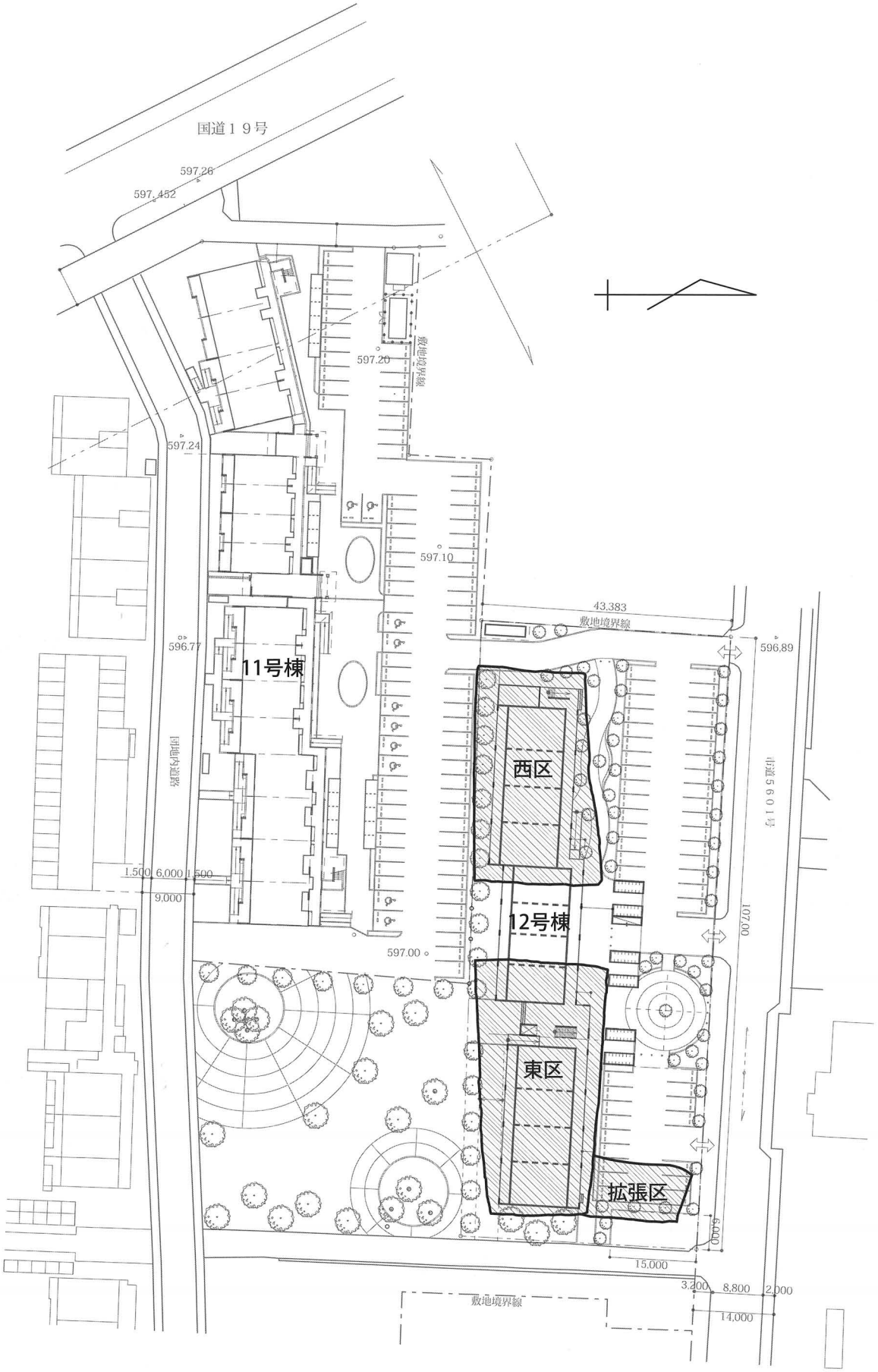
第３図　過去の調査地点（S＝1／10,000）



第４図　15 次周辺の調査区（S＝1／2,500）

第１表 過去の調査一覧

調査次	実施年度	面積	調査成果	備考
1	昭和61年（1986）	1325㎡	住居址5（弥生後期1、古墳前期１、平安前期1、平安後期2） 竪穴状遺構3、掘立柱建物址1、土坑1、溝4	遺構面2面。上が平安、下が弥生後期～古墳前期。
2	昭和63年（1988）	1715㎡	住居址1（古墳後期） 土坑26、ピット61、溝1	
3	平成元年（1989）	900㎡	住居址6（古墳後期～平安前期）	
4	平成3年（1991）	14688㎡	住居址116（古墳後期113、平安前期2、平安後期1） 掘立柱建物址21、柱列2、土坑7、ピット多数、溝11	平田里1～3号古墳（中期古墳）も調査。
5	平成10年（1998）	281㎡	住居址11（古墳後期2、平安前期5） 土坑6、ピット11	
6	平成10年（1998）	1486㎡	住居址4（弥生後期前半3、古墳後期1） 竪穴状遺構2、掘立柱建物址3、土坑3、ピット55、溝6	遺構検出面2面。上が古墳後期以降、下が弥生後期。
7	平成10年（1998）	867㎡	住居址50（古墳後期～奈良11、平安前期39）、掘立柱建物址1土坑175、ピット13、溝2、遺物集中2(古墳前期)	
8	平成11年（1999）	3293㎡	住居址48（古墳後期7、奈良8、平安前期14）、掘立柱建物址1、土坑144、溝1、遺物集中2（古墳中期）、自然流路2	遺構検出面2面。上が古墳後期以降、下が古墳時代中期。
9	平成11年（1999）	240㎡	住居址2（古墳後期） 土坑4、ピット7、遺物集中2（古墳前期）	
10	平成11年（1999）	560㎡	住居址4（平安前期） ピット5、溝1	
11	平成13年（2001）	188㎡	住居址3（弥生後期1、平安中～後期2） 土坑7（火葬施設1）、ピット232、溝1、自然流路2	遺構検出面3面。上が平安後期～中世、中が古墳時代中期、下が弥生時代後期。
12	平成13年（2001）	2197㎡	住居址13（古墳後期2、奈良8、平安前期2）、土坑34、ピット70、溝1	
13	平成14年（2002）	25㎡	住居址2（時期不明2）	トレンチ調査。
14	平成19年（2007）	383㎡	住居址2（古墳後期2）、掘立柱建物址2、土坑9 ピット11、溝状遺構5	



※ 県営住宅南松本団地12号棟新築工事 配置計画図に調査区を重ね合わせた

0　50m

第５図　調査区の位置（Ｓ＝1／1,000）

第Ⅲ章　調査成果

第１節　調査の方法

調査区の設定　調査開始時に、調査地の南側隣接地において県営住宅南松本団地11号棟建設工事が行われていたため、調査予定地のほぼ中央に機材搬入路が設けられていた。そのため、搬入路の東西で２地区の調査区を設定し、東区から調査を開始した。掘削範囲は県営住宅12号棟建設工事により掘削される範囲より約２m広く設定した。

また、東区の北東隅で検出された石積遺構が調査区外に続くと予想されたため、範囲・規模を確認するために、県営住宅12号棟の範囲外であるが拡張区を設定、確認調査を行った。

調査面積は、東区904.4㎡、西区768.6㎡、拡張区165.8㎡の合計1838.8㎡である。

各区の発掘調査期間は以下のとおりである。

東区：平成21年8月27日～平成21年11月28日

西区：平成21年12月2日～平成22年1月26日

拡張区：平成22年1月8日～平成22年1月28日

発掘手順　大型建設用機械バックホウにより東区南縁に沿ってトレンチを設定し掘削、土層の堆積状況を確認した。その結果、地表下約0.7～0.8mを遺構検出面とし、面的な掘り下げを行った。その後人力により遺構検出を行い、写真撮影・図面記録後に掘削調査を行った。遺構番号は、調査時には遺構の種別・調査区を問わず通し番号を付し、整理時に遺構の種別ごとに番号を付した。竪穴住居址は出川南遺跡第１次調査からの通し番号を付し、その他の遺構は今回の調査で１号から通し番号を付した。

東区調査終了後、西区も同様に南・西縁に沿ってトレンチを掘削し、地表下約0.7mを遺構検出面とし面的な掘り下げを行った。

各遺構の調査終了後、調査区ごとに完掘状況の全景写真を撮影し、バックホウにより埋め戻し作業を終了した。

測量　調査地に近接する用地・工事測量用に設定された測量用基準鋲から調査地内に世界測地系平面直角座標・標高を移設し、基準点とした。平面図はこれをもとに、簡易遣り方測量により作成し、部分的に光波測距儀を併用した。平面図・断面図は原則S＝1／20で作成し、詳細図が必要なものはS＝1／10で作成した。

出土遺物のうち遺構の覆土上層のものは、住居址のような大きな遺構は４分割した区画ごとなど、出土位置が把握できるように一括で取り上げ、下層および床面直上出土のものは詳細出土状況図を作成し、標高を記録し取り上げた。

写真記録　調査区全景、土層・遺構の状況、遺物出土状況等は、35㎜一眼レフカメラ（リバーサル、白黒フィルム）とデジタルカメラで撮影した。調査区全景については、ローリングタワー６mを使用し撮影を行った。

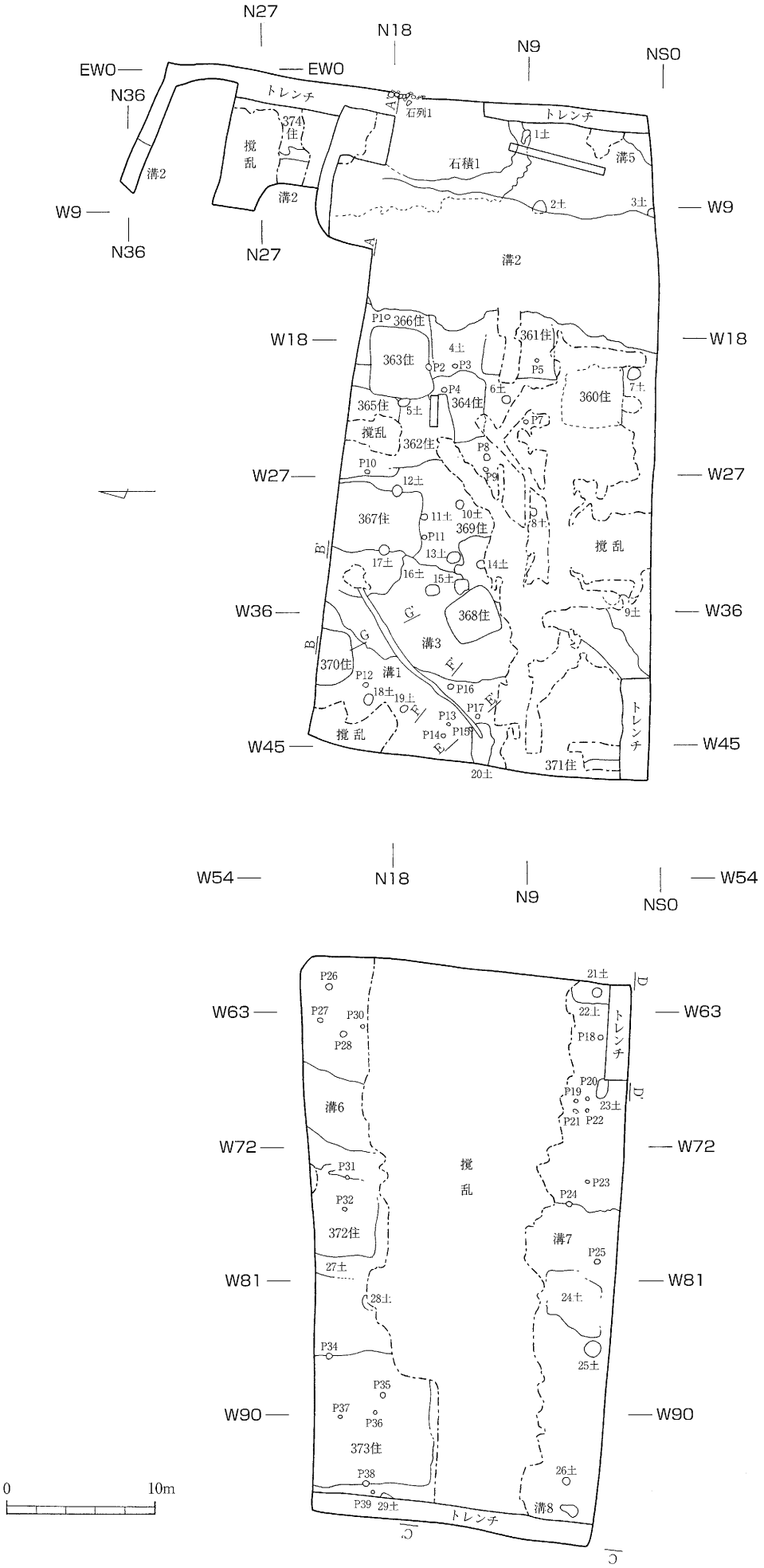
整理作業　発掘作業に並行して写真・図面等の整理を行った。図面類は平面図・土層断面図の点検・照合を行い、報告書に掲載するものについてはトレース作業を行った。遺物は洗浄・クリーニング後、接合作業を行い、遺存度の良好なものと特徴的な遺物について実測・トレースを行った。

調査成果　発掘と整理作業の結果、以下の遺構が確認された。その概要は、第２～４表および巻末の発掘調査報告書抄録に掲載している。

東区：竪穴住居址12軒、土坑20基、ピット17基、溝５条（自然流路４含む）、石積遺構１基

西区：竪穴住居址１軒、土坑９基、ピット22基、溝３条（自然流路１含む）、集石１基

拡張区：竪穴住居址１軒　（東区から続く溝１条、石積遺構１基）



第６図　遺構配置図（S＝1／400）

第２節　遺構

１　概要

今回の調査では、古墳時代後期から平安時代前期の竪穴住居址を15軒確認した。古墳時代後期が２軒（371・372住）、奈良時代が４軒（368～370・373住）、奈良時代末～平安時代前期が９軒（360～367・374住）である。東区に集中し、遺構の重複からも今回の調査地から北東にかけて集落が広がっていたことが明らかである。溝８条のうち、確実に人為的なものは溝１であり、溝６・７も人為の可能性がある。その他は砂礫層主体の覆土であり、自然流路と考えられる。過去の調査においても自然流路が確認されており、付近一帯は氾濫原で洪水時の痕跡が地表下に残っている。土坑・ピットは遺物の出土が少なく、性格を明らかにできるものは少ない。また、掘立柱建物を構成するものもなかった。今回の調査で検出した竪穴住居址は掘り方内部に柱穴を確認できなかったものが多い。土層断面で明確な柱痕を確認できなかったが、住居址に近接するものは住居付属のものであるかもしれない。

２　竪穴住居址

（１）第360号住居址

東区の南東に位置する。旧県営住宅の基礎等で撹乱され、検出面では南辺のプランしか確認できなかった。そのため、撹乱を除去し検出面より約0.2m下で北・西辺のプランを確認した。

カマドは西壁中央に位置する。掘削中も被熱礫はほとんど出土しなかったが、左袖部に元位置を保った状態の被熱礫が出土しており、石組カマドと推測される。また、東壁中央にも被熱面が検出されたが、360住の覆土中にあることから、別の住居址のカマドの可能性が高い（焼土１）。住居内ピット、貼床は確認できない。

出土遺物の総量は1,826gである。全体的に遺物の出土はまばらであるが、カマドが位置する西半の覆土から最も多く出土している。床面およびカマド内からの出土は少ない。

（２）第361号住居址

東区の南東、360住の北東に位置する。旧県営住宅に撹乱され、Ｐ５に切られる。また、東側は溝２に切られ、壁は残っていない。

カマドは東側、溝２の堆積層の下より検出した。被熱面を中心に被熱礫が散在し、周囲には焼土・炭化物粒が集中分布する。石組カマドと考えられる。また、カマド脇からは完形の須恵器杯Ａ（第15図11）が伏せた状態で出土している。住居内ピットはなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は2,642gである。カマドの周辺に集中して出土し、北西隅の覆土上層から完形の黒色土器杯Ａ（第15図6）が出土している。

（３）第362号住居址

東区の中央北寄りに位置する。本址は５軒重複する中のひとつである。平面プランが不明瞭であったため、３×３ｍのグリッドを設定しベルトを残して検出面を下げた。また、部分的にトレンチを入れ、土層断面の検討を行い、切り合い関係を判断した。そのため、住居址の軸を通る断面図を作成することはできなかった。また、北辺・東辺は掘削手順の誤りもあり平面プランを掴むことができなかった。

土層断面の検討の結果、363･364住を切る。北に位置する365住も本址と重複すると考えられ、出土遺物から本址が新しい。

カマドは北壁中央のやや西寄りに位置する。構築礫が組まれた状態で検出され、遺存状態は良い。カマド左袖部は扁平な亜鉛礫を３段積み、その他は長楕円形の礫を用いている。また、奥壁寄りには扁平な石を用いて天井部を構築している。奥壁は撹乱されているが、構築材の残存長で長さ0.95m、幅0.75mである。カマド内の焼土面からは完形の土師器小型甕（第16図49）が伏せた状態で出土している。

住居内遺構はＰ１、Ｐ２があるが、いずれも深さ0.05～0.10mと浅く、柱穴とは考えにくい。カマド脇の付属ピ

ットと考えられる。北東隅は、床面より0.16～0.25m高く、テラス状になっていた可能性が高い。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は11,812gである。カマドから南西部に集中し、中～下層から遺存状態の良い土器片が多量出土した。これらの出土遺物から古代土器編年の７期、９世紀第３四半期に帰属するものと考えられる。また、西端から須恵器杯Ａ（第15図46）が出土している。４～５期に属するもので、混入品と考えられる。

（４）第363号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362住、５土、Ｐ２に切られ、364～366住を切る。

カマドは東壁中央に位置する。カマド脇のＰ３から被熱礫が多量に出土しているため、石組カマドであろう。

住居内遺構は３基のピットが南西隅を除く三隅に位置する。Ｐ１は深さ0.30m、Ｐ３は深さ0.23mであるが、Ｐ２は深さ0.05mほどの浅いくぼみである。上述のとおりＰ３にはカマド構築礫が廃棄されている。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は3,476gである。床面近くの遺物は少なく、カマド周辺に集中する。

（５）第364号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362・363住、４土、Ｐ４に切られる。

カマドは東西２ヶ所で確認された。西側のカマドは石組カマドである。西壁の中央やや北寄りに位置し、多量の被熱礫が検出され、当初は元位置を保っているものと考えられた。しかし、調査の結果、被熱面より浮いた状態であったため、破棄された痕跡である。0.12×0.11m、深さ0.08mの浅いくぼみで、底面の奥壁側に被熱面を確認した。東側のカマドは、東壁の中央やや南寄りに位置する。西カマド同様に、0.75×0.95m、深さ0.10mほど掘りくぼめ、焚口側の底面に被熱面を確認した。また、奥壁に向かって浅い溝がのび、礫が据えられている。また、右袖部に構築礫が１点残存している。ともに同一面での検出であるが、遺存状況から東壁のカマドが古く、西壁のカマドに作り替えたものと考えられる。

住居内遺構はピットが３基ある。Ｐ１・２は位置関係から柱穴の可能性があるが、いずれも0.10～0.17mと浅い。Ｐ３はカマド付属のピットである。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は3,855ｇである。西側の新カマド周辺が多い。特筆すべきものでは、南西隅から墨書された黒色土器杯Ａ（第16図71）が出土している。

（６）第365号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362・363住、Ｐ10に切られる。

カマドは確認できなかったが、コンクリート撹乱の西側で10～30㎝大の礫が集中して検出された。被熱は確認できなかったが、住居廃絶時に廃棄されたものであろう。住居内遺構はＰ１がある。0.5×0.45m、深さは0.18mである。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は2,074ｇである。コンクリート撹乱の周囲や礫集中に混じって、須恵器甕や土師器甕の大きめの破片が多量出土している。食膳具の出土は少ない。

（７）第366号住居址

東区の中央北寄りに位置し、調査区外の北に続く。363住、Ｐ１・２、溝２に切られる。363住のプラン確認のため、調査区北壁にトレンチを掘削し本址の立ち上がりを確認した。時間的制約から完掘することができなかったため、住居の全容および出土遺物について不明な点が多い。検出プランであるが、規模は残存4.8×推定4.4m、深さは0.65mで、方形を呈すると考えられる。

362住の南壁面に焼土層が広がるため、トレンチを掘削したところ南側に被熱面を確認した。位置関係から本址のカマドの可能性がある。被熱礫は検出されなかった。

遺物は調査区北壁トレンチと焼土確認トレンチからのみであるが、総量418ｇである。

（8）第367号住居址

調査区中央北寄りに位置し、調査区外の北に続く。12・17土に切られる。北半は0.5㎝ほどの小礫が少量混入するが、カマドがある南半は礫の混入がほとんどない。貼床は確認できないが、南半は暗灰黄砂質土を床面とし、硬化面が確認された。中央部分は浅いくぼみ状になっており、周囲より約0.20m低い。その結果、西と南部分はテラス状に一段高くなっている。また、東壁の北半にもテラスがあり、上面には厚さ約0.10mの焼土層が堆積していた。

カマドは南西隅に位置し、周囲から被熱礫の出土はなかった。住居内遺構はピットが7基確認された。P1・2・5は深さ0.30～0.35mで柱穴の可能性がある。P3・4・6は中央のくぼみに位置する。また、P6の近くにも焼土の堆積が確認された。

出土遺物の総量は4,594gである。床面直上の遺物はカマドの周囲が多く、土師器甕が多い。

（9）第368号住居址

東区の西寄り中央に位置し、他の住居址とは軸方向がやや異なる。369住、溝3を切る。

カマドは北東壁の中央に検出された。被熱礫はほとんど検出されず、約0.1mほど浅く掘りくぼめ、壁寄りに被熱面を確認した。住居内遺構は確認できず、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は2,232gである。カマドが位置する北東側が多く、佐波理鋺を模倣したと考えられる黒色土器Aの鉢（第18図108）が出土している。

（10）第369号住居址

東区の西よりの中央で検出された。368住、13・14・15土、溝3に切られ、南半分は旧県営住宅に大きく撹乱されている。南半の撹乱除去後、わずかに残存するプランを検出し、規模は4.9×推定4.1m、深さ0.42mで、平面形は不整方形と推測される。

カマドは北壁中央に位置し、被熱礫がわずかに出土しているため石組カマドと推測される。住居内遺構はなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は3,650gである。カマド周辺から土師器甕が多く出土しており、北東隅より残りの良い須恵器杯B（第18図123・125）が出土している。

（11）第370号住居址

東区の北西に位置する。調査区外の北に続くが、規模は3.8×残存2.4m、深さ0.35mで、平面形は隅丸方形と推測される。

カマドは東壁の南隅寄りに位置する。左袖部に被熱礫が残存しており、石組カマドである。住居内遺構はなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は3,810gである。覆土からの出土は少なく、カマド周辺から須恵器甕・瓶類（第18図137～139）が多量出土している。

（12）第371号住居址

東区の南西隅に位置する。大部分を撹乱され、西辺の一部を残すのみである。規模・平面形ともに不明である。また深さも0.2mと遺存状態が良くない。

カマドは西壁に位置し、周囲に焼土・炭化物粒が散る。被熱礫は確認できなかった。住居内遺構は不明で、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は1,502gである。カマド周辺から土師器甕と須恵器甕が出土している。

（13）第372号住居址

西区の中央北に位置する。平安時代検出面の一層下の灰黄色弱粘質土層で検出した。P32に切られ、27土を切る。調査区外北に続くが、規模5.3×残存4.2m、深さ0.55mで、平面形は方形と推測される。

カマドは東壁のやや北寄りに位置する。東壁から離れて被熱面があり、そこから壁外に向かって幅0.30m、残存長1.6mの煙道が良好に残存する。煙道の奥側には10㎝大前後の礫を詰めた状態で出土した。住居内遺構はなく、貼床も確認できない。壁際は中央部に比べ約0.30～0.40m高く、幅0.10～0.55mほどのテラス状となっている。

出土遺物の総量は5,108ｇで、カマド周辺が多い。

(14) 第373号住居址

西区北西に位置する。P35～38に切られる。調査区外北に続くが、規模は8.8×残存8.0m、深さは0.52mの大型住居である。

明確なカマドは確認できない。東壁中央に焼土・炭化物粒が散る箇所があるが、被熱礫は確認できなかった。

住居内遺構はピットが11基ある。壁寄りに位置するが配置に規則性はみられず、深さも0.10～0.35mと差がある。また、断面からも明確な柱痕は確認できなかった。貼床も確認できない。

出土遺物の総量は22,574ｇである。覆土中層からも完形に近い遺物が多い。また、床面直上、特に南西部は、炭化物粒を多量混入する弱粘質土層が堆積し、その下から細片の遺物が多量出土した。美濃須衛産の須恵器が多く出土し、特に杯B・蓋が多い。また、床面から刀子２点が出土している。

(15) 第374号住居址

拡張区の中央に検出された。北と南を撹乱され、東側は拡張区南北トレンチにかかるため、西側の一部しか残存していない。また、時間的制約から遺物の取り上げおよびカマド周辺の掘削のみにとどまってしまった。そのため、検出プランからであるが、規模は残存5.2m×残存5.5mで、西壁で深さは0.15mある。平面形は不明である。

カマドは西壁に位置し、周囲に被熱礫が検出されたため石組カマドであろう。住居内遺構は不明である。

遺物は、一部分のみの調査であるため全体を表すものではないが、総量2,022ｇを得ている。

３　土坑

土坑は東区で20基、西区で９基の合計29基検出した。撹乱されるものも多く、全容を把握できるものは少ない。また、東区の４・９土、西区の24・27土は明確なプランやカマドを確認できず、住居址とは判断できなかったものである。遺物が一定量出土しており推定規模からも他の土坑とは異なる。以下、特徴的な土坑について記述する。

（１）第４号土坑

東区の中央北寄りに位置する。検出面でプランを確認し、グリッドを設定し掘り下げたが明確なプランは確認できなかった。東側は溝２に切られ、隣接する361住も土層断面観察用のベルトからは本土坑の覆土は確認できず、本遺構を切っている。西に位置する364住を切るものと考えられる。出土遺物の総量894ｇである。黒色土器A杯や須恵器杯Aが出土している。

（２）第９号土坑

東区の中央南に位置する。遺構の大部分を撹乱され、西側の立ち上がりしか確認できない。下層覆土にわずかに焼土粒が混入する。遺物は総量1,456ｇで、西側に集中して出土した。

（３）第24号土坑

西区の中央南に位置する。土坑としたが、平面および断面でも明確な立ち上がりはなく、唯一西側の立ち上がりのみを確認できた。後述する溝６・７と重複するものと考えられ、平面プランも不明確である。覆土は鉄分が多く混入する灰オリーブ砂質土層で、下層になるにつれて砂の混入が多くなる。出土遺物は総量956ｇと少ないが、完形の須恵器杯A（第21図233）が出土している。

（４）第27号土坑

西区の中央北に位置する。372住同様に平安時代検出面の一層下の暗灰黄色弱粘質土で検出した。372住に切られるが、372住の下にわずかに本土坑の覆土が残存している。また、372住の西外側で礫の集中と焼土粒の分布が

確認されたため、住居址である可能性もある。調査区外の北に続くが、5.3m以上×残存2.5mで、深さは0.65m、平面形は不明である。出土遺物は総量2,606gである。土師器鉢・甕（第21図236・237）があり、372住と同時期と考えられる。

4　溝

自然流路を含め溝は8条検出した。溝1は20土・溝3を切る。同じく溝3を切る368住と軸を同じくするため、同時期の区画溝のようなものかもしれない。溝2は石積1および西岸の住居址を切る。覆土は拳～人頭大の礫で構成され、洪水性の自然流路である。壁面の観察では、撹乱直下まで堆積しているため、平安時代以降長く堆積が続いたようである。南に位置する第8次調査でも洪水性の自然流路が確認されているが、位置と方向から推測すると、同一のものではなさそうである。溝3は5cm大までの礫が主体の砂礫層で、369住、7土を切る。溝5は東区南東隅に位置し、溝2と同じく洪水性の自然流路である。溝4・8も砂礫層が堆積するが、流路というほど明確なものではなく洪水堆積層の痕跡である。溝6は西区の南北方向に流れるが、住居址の覆土と同じような暗灰黄～灰オリーブ砂質土で埋没している。底面に一部砂礫層が堆積し、流水痕跡は確認できるが埋土に混じる礫の大きさから考えても洪水のように流れの強いものではない。底面には10～30cm大程度の亜円礫が集中し、被熱したものもみられる。遺物は古墳時代後期の土師器杯（第21図239・240）、奈良時代の土師器・須恵器が出土している。溝の方向から推定すると、撹乱より南側の24土、溝7を包括すると考えられ、一連の溝の可能性もある。さらに南側の第8次調査の溝1もしくは第12次調査の凹地状地形と同一のものと考えられる。出土した土器はあまり摩滅しておらず、被熱痕跡のある礫群が底面にまとまって出土するなど、第12次調査の凹地状地形との共通点も多い。

5　石積遺構1

東区北東隅に位置する。東区調査終了後、北への広がりを確認するために拡張区を設定した。石積1が位置する北東部は撹乱が深く、コークス灰が地表下約1mまで堆積している。重機で検出面をやや掘り下げた高さで検出したものである。石積1を覆うように暗オリーブ褐～暗灰黄粘質土層が堆積しており、検出面は奈良・平安時代の面より0.2～0.3m低い。当初は近世以降の暗渠と考えていたが、ほぼ直角に曲がるためトレンチを掘削し石積遺構と確認した。

西側は溝2に切られるが、一部、砂礫層との間にも暗オリーブ粘質土層が堆積しており、溝2との時期差があると判断した。溝2は北にいくにつれて本遺構に近づくように流れているため、拡張区の中ほどから北は破壊されているものと推測される。

上述のように撹乱・削平を受けているため上部の構造は不明であるが、上端で東西5.6m以上、南北12.0m以上、下端で東西8.8m以上、南北13.0m以上を測る。石積の基底部からの残存高は南辺で約0.15m、西辺東区部分で約0.80m、拡張区部分で約1.50mである。一部石を抜き取り、断ち割り断面を観察したが、15～20cm大の扁平な亜円礫を用いて石を積み上げている。また、石の間にも暗オリーブ褐色粘質土が混入している。

石が積まれる法面は、礫が多く混じる黄褐色～暗灰黄色砂質土層とその下の暗オリーブ褐色砂質土層で構成されている。後者は地山であるが、前者は盛土の可能性もある。基底面は基盤の砂礫層に直接石を積んで構築している。

南側には幅0.6～1.2m、深さ約0.1mの浅い溝状遺構が石積1に沿うようにあるが、西側は溝2に切られるため周溝のようなものかはわからなかった。また、拡張区の東縁に沿って南北トレンチを掘削中に石列1を確認した。調査区外の東に続くものと考えられ全容は不明である。直上まで撹乱されるが、30～40cm大の扁平な石が並ぶ。南側には10cm大程度の礫が集中している。石積1に囲まれた範囲内に位置しており、関連も考えられるが性格の特定までには至らなかった。

石積関連遺物は南側の浅い溝状に堆積した砂礫層から出土した土師器（第22図254）と、石積の下層から出土した土師器甕体部片がある。いずれも細片であるが古墳時代前期の可能性がある。

第２表 竪穴住居址一覧

No.	地区	平面形態 主軸方位	主軸×直交軸×深（m） 床面積（㎡）	カマド形態 位置	新 旧	時期	備考
360	東	方形 N-7-E	(4.1) ×4.1×0.45 (12.4)	石組か 西壁中央	焼土1	4～6期	東壁にもカマドあり（焼土１）。360住の覆土中に被熱面があるため、別住居のカマドの可能性が高い。
361	東	方形か N-3-E	(4.6) ×4.8×0.46 (16.3)	石組か 東壁中央	P5、溝2 4土	6～7期	溝2覆土下よりカマド検出。
362	東	長方形か N-80-E	(3.7) ×（4.5）×0.60 (12.5)	石組 北壁西寄り	5土 363～365住	7期	石組カマドの遺存良好。完形遺物が数多く出土した。
363	東	方形 N-88-W	4.6×3.9×0.65 10.9	石組 東壁中央	362住、5土、P2 364～366住	6～7期	
364	東	長方形 N-81-E	4.6×（3.6）×0.45 (9.3)	石組 旧:東壁中央 新:西壁中央	362･363住、4土、P4	6～7期	東西2ヶ所にカマドあり。遺存状況から西カマドを新カマドと判断した。
365	東	方形か N-17-E	5.8×〈3.6〉×0.75 〈17.3〉	不明	362･363住、5土、P10	3～5期	調査区外に続き、カマドは未検出。大半をコンクリート基礎に撹乱されている。
366	東	方形か	〈4.8〉×〈4.4〉×0.65	焼土面のみ 南壁西寄り	363住、P1、溝2	4～6期	トレンチにより確認。未掘だが、カマドおよびプランを確認した。
367	東	長方形か N-5-E	〈5.7〉×4.7×0.58 〈20.0〉	被熱面のみ 南西隅	12･17土	5期	調査区外に続く。カマド以外に北東隅･中央にも焼土散布が確認された。
368	東	方形 N-60-E	3.2×3.5×0.25 7.6	焼土面のみ 東壁中央	369住、溝3	4期	溝3を切る。床面は砂礫層である。
369	東	方形 N-16-E	4.9×(4.1)×0.42 (12.6)	石組か 北壁中央か	368住、14・15土、溝3	4期	南半は大きく撹乱される。
370	東	隅丸方形 N-79-W	3.4×〈2.4〉×0.35 〈6.4〉	石組 東壁南寄り		3～4期	調査区外に続く。カマド周辺より須恵器甕･瓶類が多量出土した。
371	東	不明	不明×不明×0.2	焼土面のみ 西壁中央か		7世紀後半	大部分を撹乱される。
372	西	方形か N-82-W	5.3×〈4.2〉×0.55 〈17.4〉	石組 東壁	P31･32 27土	7世紀後半	調査区外に続く。平安時代検出面の1層下で検出。煙道が良好に遺存する。
373	西	方形 N-89-E	8.8×〈8.0〉×0.52 〈61.8〉	不明 東壁中央に被熱面あり	P34～38	3期	調査区外に続く。大型住居で、多量の遺物が出土した。美濃須衛産須恵器が多量出土。
374	拡張	不明	不明×不明×0.15	石組か 西壁		6～7期	拡張区掘り下げ中に検出した。トレンチおよび撹乱により全形は不明。

計測値のうち、〈〉は残存値、（）は推定値 である。

主軸方向はカマドの方向として計測した。住居址隅にカマドがある367住と、カマドが検出されなかった365住については長軸を主軸とした。

カマド形態は、ほとんどの住居址で廃棄後の状況を呈していると考えられるが、周囲に被熱礫が出土する場合は石組カマドと推測できる。

遺構の新旧関係はその遺構より新、旧で表示した。

第3表 土坑･ピット一覧

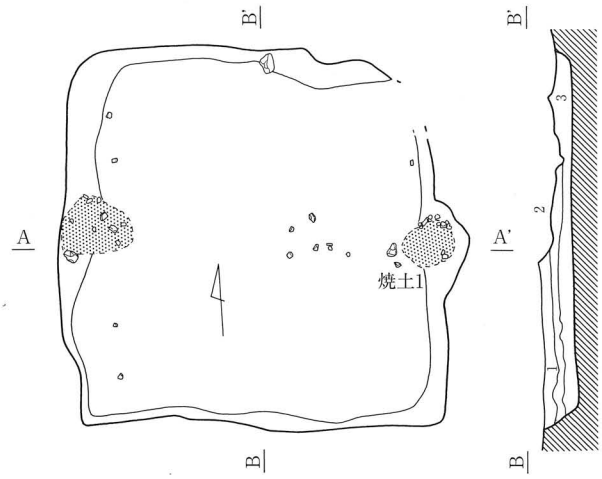
遺構No.	地区	平面形態	長軸×短軸×深（m）	切り合い関係 旧	切り合い関係 新	出土遺物	備考
1土	東	長円形	1.02×0.50×0.40	石積1			
2土	東	円形か	0.90×〈0.80〉×0.38		溝2		
3土	東	円形か	〈0.45〉×〈0.60〉×0.32		溝2		
4土	東	不明	3.50×3.20×〈0.26〉	364住	361住	黒A杯A、土師高杯･甕A･B･小型甕、須恵杯、甕	6～8期。
5土	東	楕円形	0.89×0.60×0.55	362・363・365住			
6土	東	円形	0.66×0.58×0.20			土師小型甕	
7土	東	円形	0.89×0.80×0.22				
8土	東	楕円形か	〈0.50〉×0.51×0.10			黒A杯、土師甕A、須恵杯･壺	
9土	東	不明	4.52×3.45×〈0.24〉		溝3	黒A、土師甕B･小型甕、須恵杯A･B･蓋･甕･壺	5～7期。
10土	東	円形	0.63×0.59×0.6				
11土	東	円形	0.50×0.45×0.14			土師甕	
12土	東	円形	0.74×0.59×0.12	367住			
13土	東	円形？	0.95×0.83×0.19			土師甕、須恵杯	
14土	東	不明	0.58×〈0.30〉×0.17	369住			
15土	東	円形	0.94×0.94×0.20	溝3			
16土	東	円形	1.01×0.85×0.27	溝3		土師甕B	

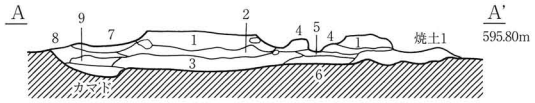
遺構No.	地区	平面形態	長軸×短軸×深（m）	切り合い関係		出土遺物	備考
				旧	新		
17土	東	円形	0.70×0.64×0.14	367住			
18土	東	円形	0.80×0.65×0.31				
19土	東	円形	0.58×0.44×0.21				
20土	東	長円形	〈2.7〉×1.5×0.29		P15・溝1		
21土	西	円形	0.75×0.70×〈0.31〉	22土			
22土	西	長円形か	1.50×1.35×0.38		21土	土師甕、須恵杯	
23土	西	長円形	1.37×0.76×0.08				
24土	西	不明	3.72×3.44×0.34？			土師甕A、須恵杯A・甕、焼粘土塊	8C初頭。
25土	西	円形	1.07×1.06×0.51			土師杯	
26土	西	円形	0.56×0.51×0.09				
27土	西	不明	〈1.24〉×〈1.08〉×0.58		372住	土師甕・B・鉢、須恵蓋・甕	7C後半。
28土	西	不明	0.95×〈0.46〉×0.08				
29土	西	不明	〈1.00〉×〈0.35〉×0.15				
P1	東	円形	0.40×0.35×0.13	366住			
P2	東	円形	0.51×0.44×0.15	363住		土師甕	
P3	東	楕円形	0.39×0.27×0.11				
P4	東	円形	0.40×0.25×0.07	364住		土師甕	
P5	東	円形	0.25×0.25×0.17	361住			
P6	東	円形					未掘。
P7	東	楕円形	0.40×0.30×0.16			土師甕B	
P8	東	円形	0.48×0.42×0.05				
P9	東	円形	0.41×0.30×0.17				
P10	東	楕円形	0.43×0.31×0.10	365住		土師甕B	
P11	東	円形	0.34×0.34×0.13				
P12	東	円形	0.42×0.34×0.19				
P13	東	円形	0.29×0.19×0.16				
P14	東	円形	0.27×0.26×0.08				
P15	東	楕円形	0.36×0.25×0.25	20土			
P16	東	円形	0.44×0.39×0.14				
P17	東	楕円形	0.41×0.33×0.18				
P18	西	円形	0.42×0.39×0.23				
P19	西	円形	0.23×0.20×0.19				
P20	西	円形	0.24×0.21×0.21				
P21	西	円形	0.21×〈0.15〉×0.23				
P22	西	円形	0.26×0.25×0.34				
P23	西	円形	0.25×0.18×0.20				
P24	西	円形	0.45×0.40×0.28				
P25	西	円形	0.47×0.42×0.18				
P26	西	楕円形	0.48×0.47×0.07				
P27	西	円形	0.36×0.35×0.07				
P28	西	不明					未掘。
P29	西	楕円形	0.52×0.44×0.09				
P30	西	円形	0.31×0.30×0.25				
P31	西	円形	0.30×0.28×0.40	372住			
P32	西	円形	0.30×0.24×0.42	372住			
P34	西	円形	0.43×0.42×0.13	373住			
P35	西	円形	0.33×0.30×0.69	373住			
P36	西	円形	0.34×0.34×0.29	373住			
P37	西	円形	0.30×0.30×0.50	373住		土師甕	
P38	西	円形	0.50×0.45×0.27	373住			
P39	西	円形	0.30×0.23×0.40				

第4表 溝一覧

遺構No.	地区	最大幅×深（m）	切り合い関係		出土遺物	備考
			旧	新		
溝1	東	0.55×0.20	20土、溝3		須恵甕	368住と軸が同じ。
溝2	東	9.3×1.65以上	361・366住、2～4土、石積1		土師甕B・C	自然流路。
溝3	東	6.9×0.8以上	369住、9土	368住、15・16土、溝1	土師高杯	自然流路。
溝5	東	1.35以上×不明				自然流路。
溝6	西	4.25×0.67			土師器杯・椀・甕、須恵杯A・B・蓋・高杯・甕・壺	7～8C代。
溝7	西	不明×0.38		24土、P24・25	土師甕・須恵鉢A・甕	溝6と同一遺構か。
溝8	西	0.65×0.03			黒A、土師甕・甕B、須恵杯A・蓋・鉢・壺	自然流路痕跡。

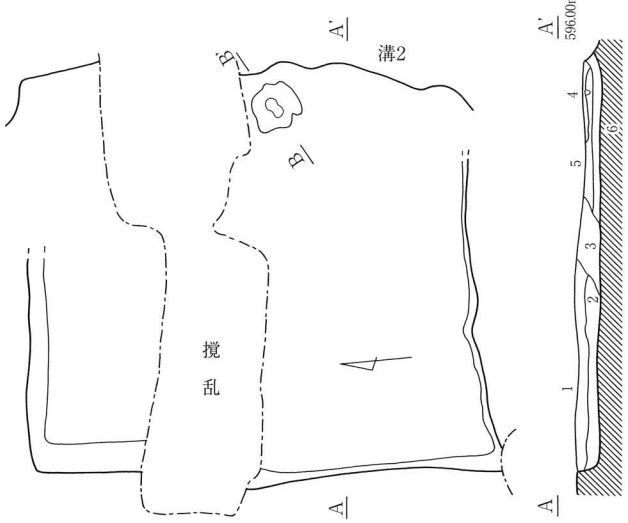
360住

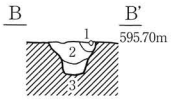




1 暗オリーブ褐色砂質土（1～5cm大礫中量）
2 暗灰黄色砂質土（細砂・1～5cm大礫多量）
3 黒褐～暗オリーブ褐色砂質土（細砂多量　1～5cm大礫中量）
4 暗オリーブ褐色砂質土（1～2cm大礫少量　焼土中量）
5 暗灰黄～オリーブ褐色砂質土（砂多量）
6 オリーブ褐～暗オリーブ褐色砂質土（砂・1～2cm大礫多量　焼土少量）
7 暗オリーブ褐色砂質土（砂多量　焼土少量）
8 黒褐色砂質土（灰白色砂中量　焼土多量）
9 黒褐～暗オリーブ褐色砂質土（～5cm大礫少量　砂多量）

361住



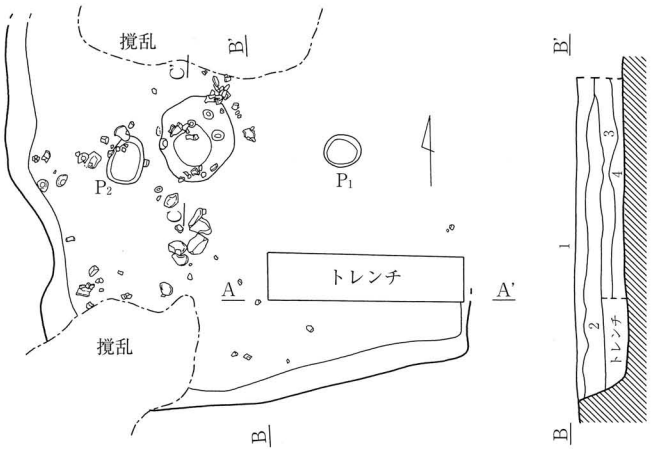


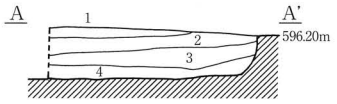
1 暗灰黄色砂質土（0.1～5cm大礫中量）
2 暗灰黄色砂質土（0.1～3cm大礫少量）
3 暗灰黄色砂質土（0.1～10cm大礫中量）
4 暗灰黄色砂質土（0.1～6cm大礫多量　砂混入）
5 黄灰～暗灰黄色砂質土（0.1～4cm大礫中量）
6 砂礫層

1 黄灰～暗灰黄色砂質土
（0.5～5cm大礫中量　焼土微量）
2 暗灰黄～オリーブ褐色砂質土
（0.5～4cm大礫・炭化物少量
焼土多量　灰中量）
3 灰～灰オリーブ色砂質土
（炭化物多量　焼土少量）

カマド出土状況

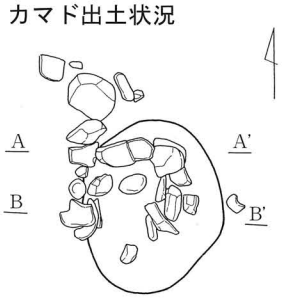
362住

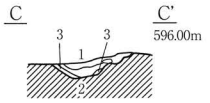




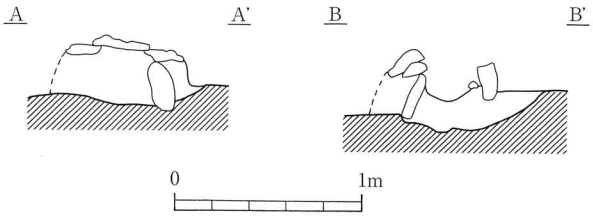
1 暗灰黄～黄褐色砂質土
（0.2～5cm大礫多量　鉄分中量）
2 暗灰黄～黄褐色砂質土
（1～15cm大礫中量　炭化物少量）
3 暗灰黄色砂質土
（0.1～0.3cm大礫中量　灰色土塊少量）
4 暗灰黄色砂質土
（0.1～1cm大礫・灰色土塊・鉄分中量）

カマド出土状況



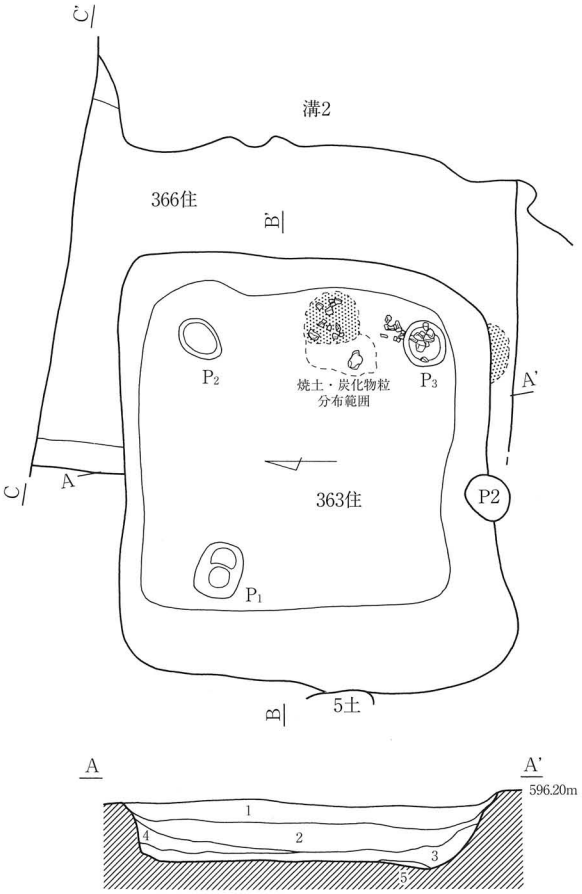


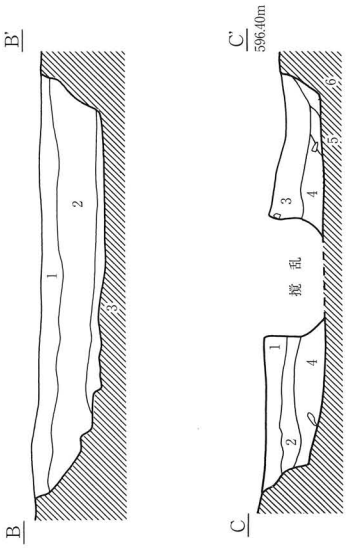
1 黒褐色砂質土（焼土・炭化物中量）
2 黒褐色弱粘質土（炭化物少量）
3 黒褐色砂質土（～1cm大礫多量）



第7図　遺構（1）

363・366住

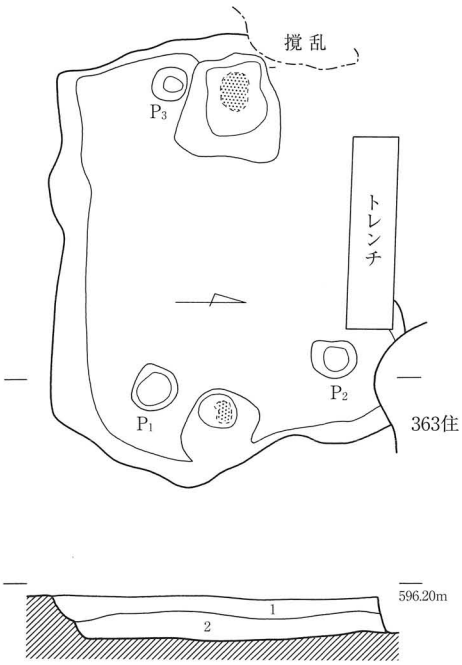




363住［A—A'　B—B'］
1　暗灰黄色砂質土（灰色土塊・0.3～5cm大礫中量）
2　暗灰黄色砂質土（灰色土塊中量・0.3～2cm大礫少量　炭化物微量）
3　黄灰～暗灰黄色砂質土（灰色土塊中量　0.5～4cm大礫少量　焼土微量）
4　灰オリーブ色砂質土（～1cm大礫・灰色土塊少量）
5　黄灰～暗灰黄色粘質土（灰色土塊中量　0.5cm大礫少量）

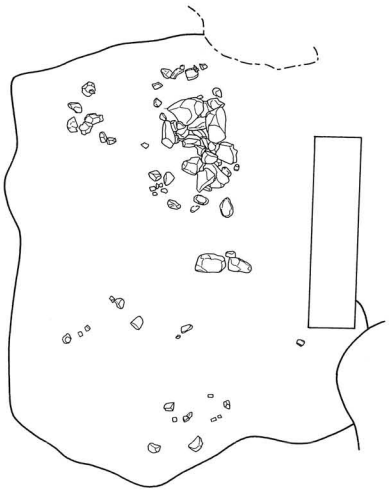
366住［C—C'］
1　黒褐～暗オリーブ褐色土（～3cm大礫中量）
2　暗オリーブ褐色砂質土（砂多量　～5cm大礫中量）
3　暗オリーブ褐色砂質土（砂・～5cm大礫多量）
4　黒褐色砂質土（砂多量　～7cm大礫少量）
5　暗灰黄色砂質土
6　砂礫層（～5cm大礫混入）

364住



1　暗灰黄～オリーブ褐色砂質土（0.2～1cm大礫・灰色土塊少量　炭化物微量）
2　黒褐～暗オリーブ褐色砂質土（灰色土塊中量　1～15cm大礫少量）

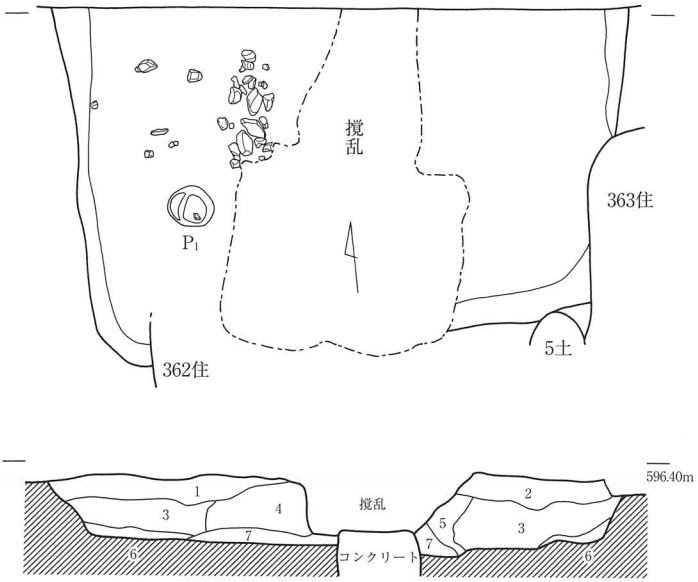
遺物出土状況



0　2m

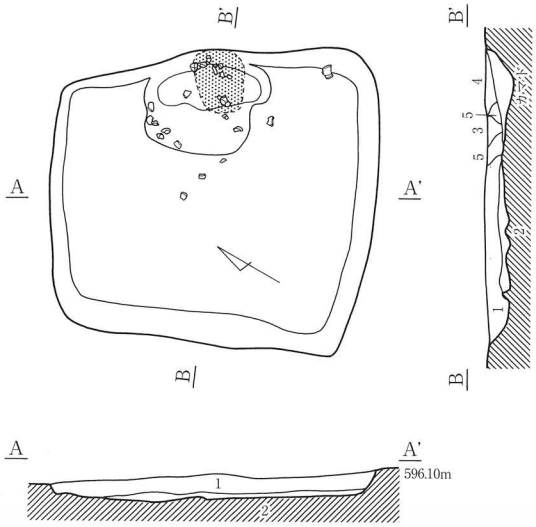
第8図　遺構（2）

365住



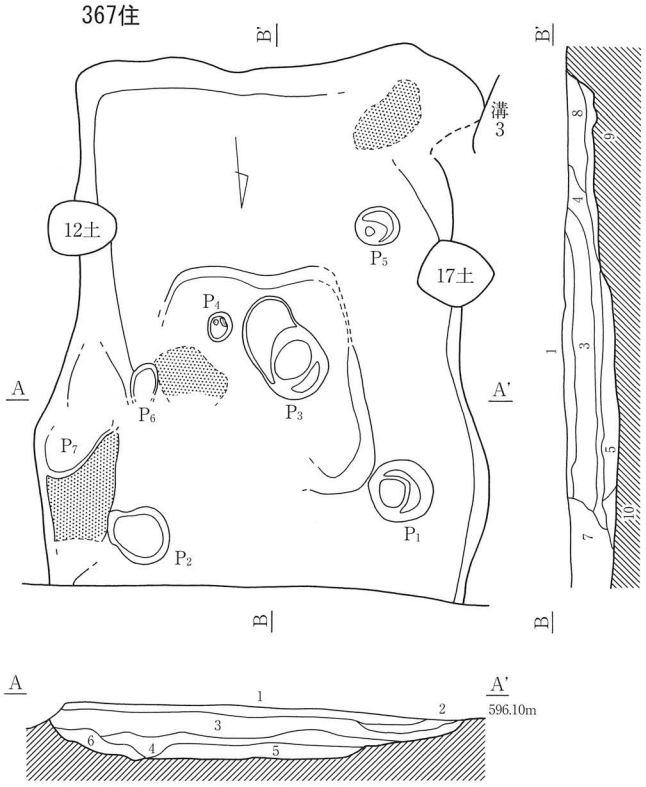
1　暗灰黄～黒褐色砂質土（0.5～3cm大礫中量　灰色土塊少量　炭化物・鉄分微量）
2　灰～灰オリーブ色砂質土（0.5～3cm大礫中量　灰色土塊・鉄分少量）
3　黒褐色粘質土（礫微量）
4　黒褐色粘質土（青味おびる）
5　灰色砂質土（鉄分・褐色土粒中量　～1cm大礫少量）
6　暗灰黄色砂質土（灰色土塊中量　1～4cm大礫少量）
7　灰色粘質土（鉄分中量）

368住



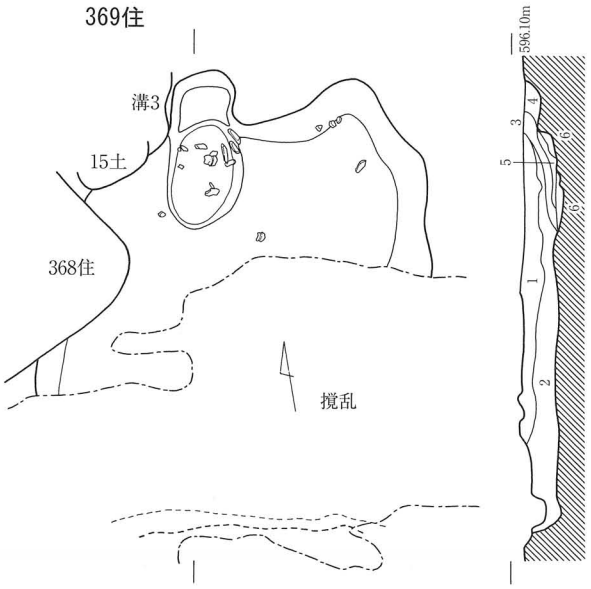
1　黒褐色砂質土（～3cm大礫多量）
2　砂礫層（暗オリーブ褐色砂質土混入）
3　灰黄褐色砂質土（～2cm大礫多量）
4　黒褐色砂質土（～3cm大礫多量）
5　黒褐～暗灰黄色砂質土

367住



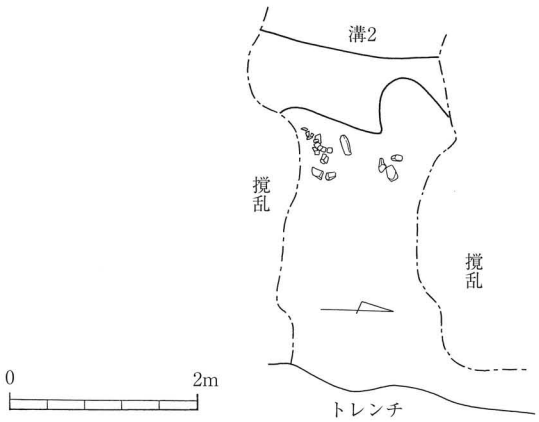
1　オリーブ褐～暗オリーブ褐色砂質土（～0.5cm大礫多量　2～4cm大礫少量）
2　黒褐色砂質土（～0.5cm大礫・粗砂多量　～5cm大礫少量）
3　暗オリーブ褐色砂質土（～0.5cm大礫多量）
4　黒褐色土（鉄分・灰白色粘土少量　～2cm大礫中量）
5　4層より暗い砂質土（～3cm大礫・焼土・炭化物多量）
6　黒褐色砂質土（1～3cm大礫多量　砂少量）
7　黒褐色砂質土（～5cm大礫多量）
8　暗灰黄色砂質土
9　黒褐～暗オリーブ褐色砂質土
10　暗灰黄色砂質土（砂多量　～2cm大礫中量）

369住



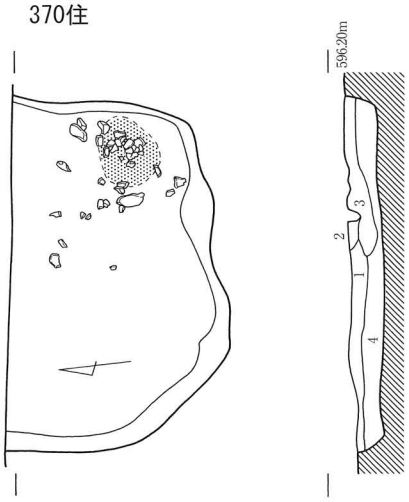
1　暗灰黄色砂質土（0.1～5cm大礫少量）
2　黄灰～暗灰黄色砂質土（0.5～10cm大礫少量　灰色土塊多量）
3　暗灰黄色弱粘質土（焼土中量）
4　暗オリーブ褐色砂質土（1～2cm大礫微量　焼土少量）
5　暗灰黄色砂質土（炭化物微量　被熱層）
6　暗灰黄～オリーブ褐色砂質土（砂多量　焼土少量）

374住



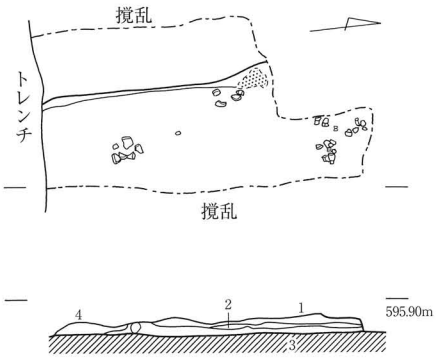
第9図　遺構（3）

370住



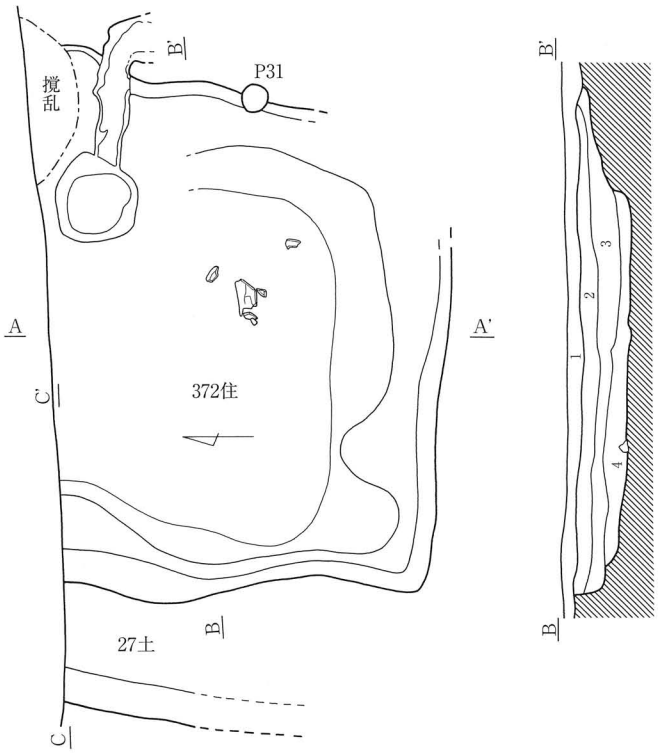
1　暗オリーブ褐色砂質土（～2cm大礫中量　焼土少量）
2　黒褐～暗オリーブ褐色粘質土（鉄分・礫多量）
3　暗灰黄色粘質土（鉄分多量　～2cm大礫微量）
4　黒褐色砂質土（砂・鉄分・灰色砂質土多量）

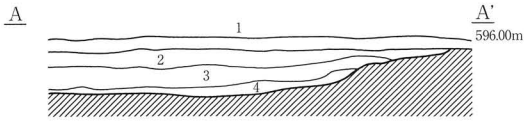
371住

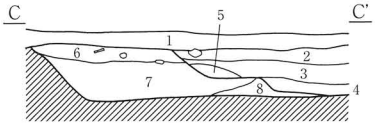


1　褐灰～灰黄褐色砂質土（～3cm大礫中量）
2　オリーブ褐色砂質土（細砂）
3　暗灰黄～オリーブ褐色細砂
4　黒褐～暗灰黄色砂質土（～2cm大礫少量）

372住・27土





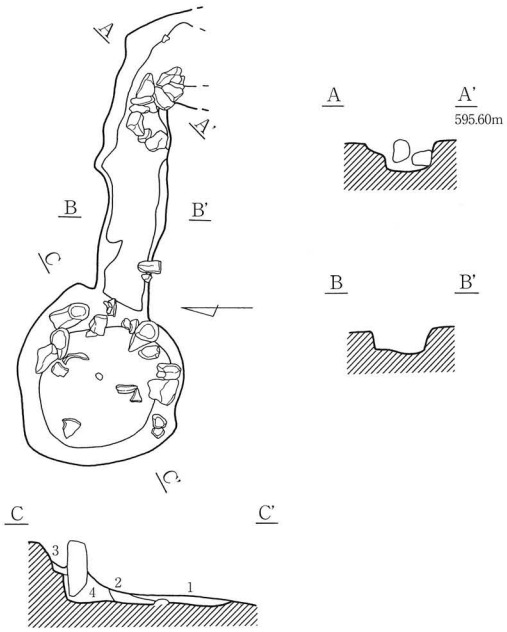


0　2m

372住
1　鉄分層
2　黄灰～暗灰黄色弱粘質土（鉄分中量1～3cm大礫微量　灰色土塊少量）
3　黄灰色弱粘質土（3cm大礫・鉄分・灰色土塊少量）
4　黒褐～暗灰黄色弱粘質土（3～4cm大礫中量　灰色土塊少量）
5　暗灰黄色砂質土（～4cm大礫中量）

27土
6　暗灰黄色砂質土（～5cm大礫・鉄分中量　灰色土塊少量）
7　黄灰～暗灰黄色砂質土（～10cm大礫多量　鉄分・灰色土塊少量）
8　暗灰黄～黒褐色砂質土（1cm大礫中量）

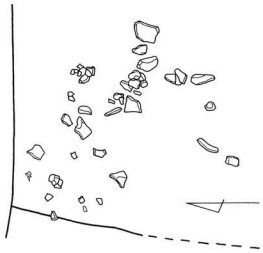
カマド出土状況



1　暗灰黄色弱粘質土（焼土中量）
2　暗灰黄～オリーブ褐色粘質土（焼土多量　小礫中量　炭化物混入）
3　黄褐～オリーブ褐色砂質土（焼土中量）
4　オリーブ褐色弱粘質土（焼土多量）

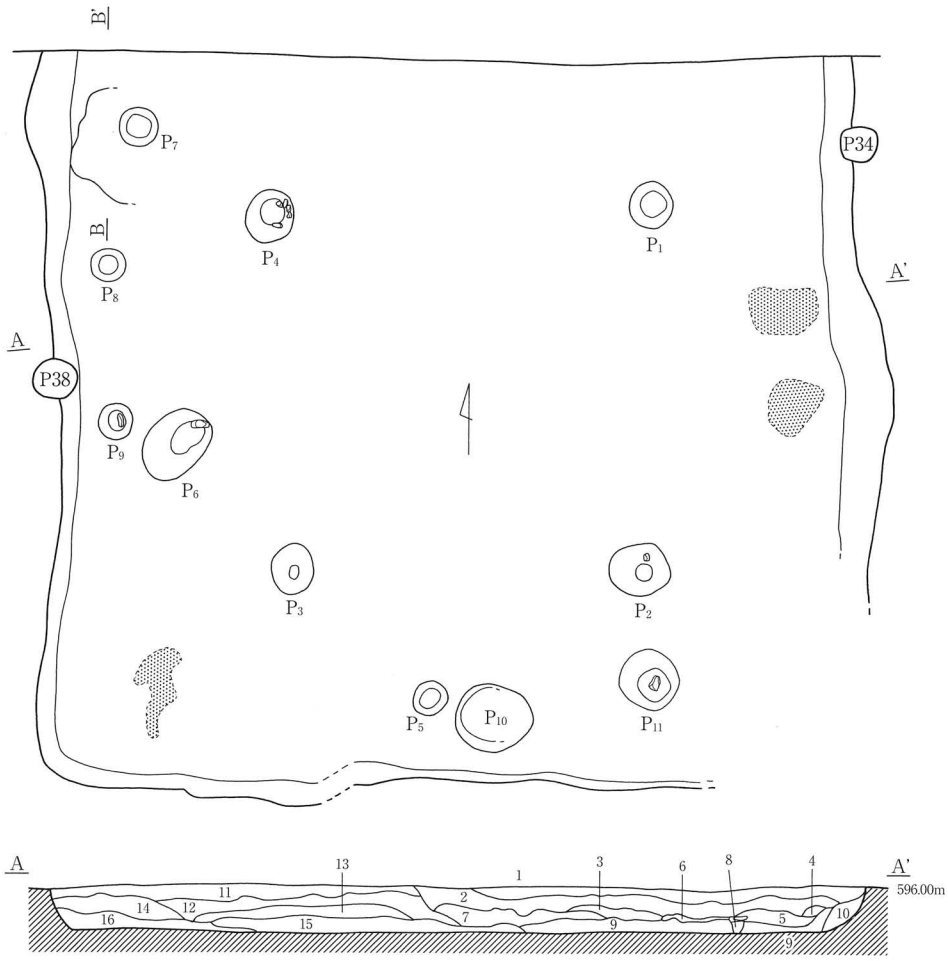
0　1m

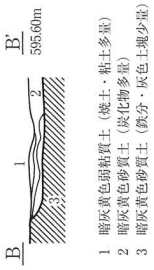
27土遺物出土状況



第10図　遺構（4）

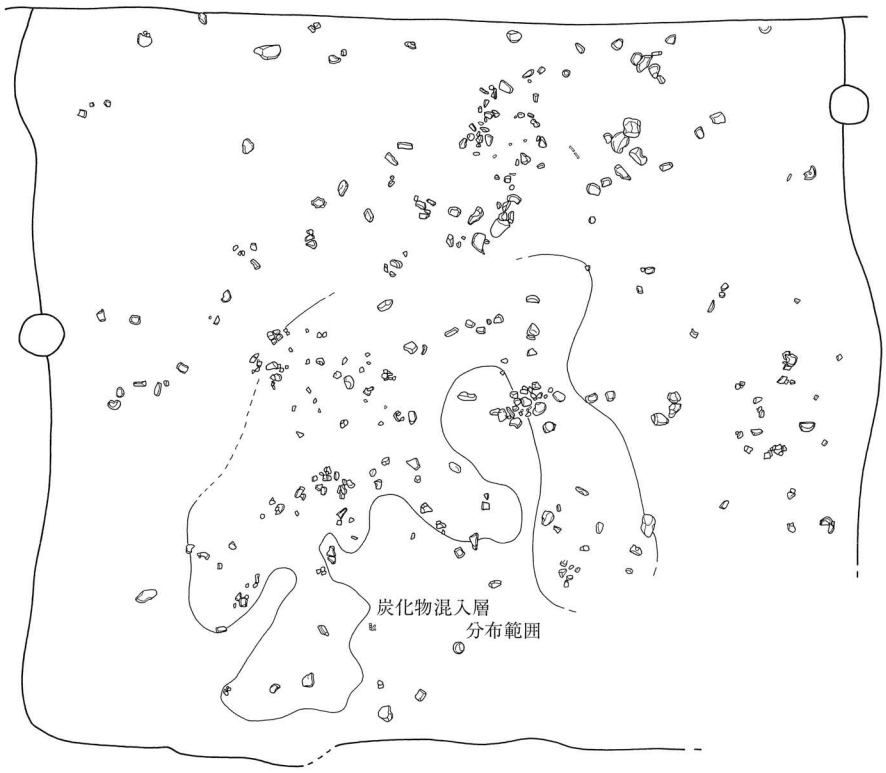
373住





1　黄灰～暗灰黄色砂質土（鉄分・灰色土塊中量）
2　暗灰黄色砂質土（灰色土塊中量　2～6cm大礫少量）
3　黄灰～暗灰黄色砂質土
（鉄分多量　灰色土塊・～3cm大礫少量）
4　黄灰～暗灰黄色弱粘質土（鉄分少量）
5　黄灰～暗灰黄色粘質土
（鉄分・灰色土塊中量　炭化物・1～15cm大礫微量）
6　黄灰～暗灰色砂質土（鉄分・灰色土塊少量　4cm大礫微量）
7　黄灰色砂質土
（鉄分多量　灰色土塊中量　～4cm大礫・炭化物微量）
8　黄灰～暗灰黄色砂質土（鉄分中量　灰色土塊少量）
9　暗灰黄色砂質土（～6cm大礫・鉄分少量　灰色土塊少量）
10　暗灰黄～黄褐色弱粘質土（灰色土塊・鉄分中量）
11　暗灰黄色砂質土（鉄分中量　炭化物・1cm大礫少量）
12　暗灰黄色砂質土
（鉄分多量　炭化物微量　灰色土塊中量）
13　黄灰～暗灰黄色弱粘質土（鉄分・炭化物少量　灰色土塊中量）
14　暗灰黄色砂質土（灰色土塊・鉄分中量　炭化物微量）
15　黄灰～暗灰黄色砂質土
（灰色土塊中量　鉄分少量　1cm大礫微量）
16　灰～灰オリーブ色弱粘質土（鉄分・1cm大礫少量　炭化物微量）

遺物出土状況



0　2m

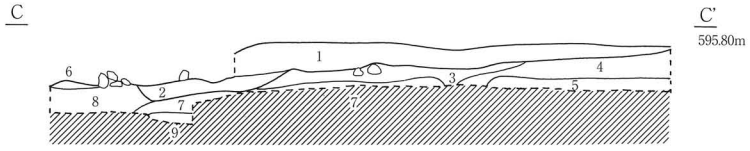
第11図　遺構（5）

石積１・石列１

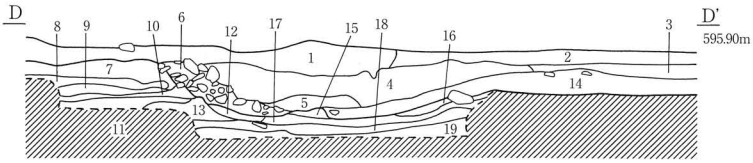
第12図　遺構（6）

石積１

1　暗オリーブ褐色粘質土（灰白色粘土多量）
2　黒褐～暗オリーブ褐色粘質土（鉄分多量）
3　暗オリーブ褐色砂質土

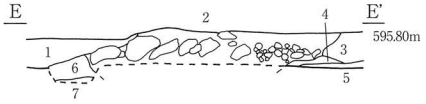


1　暗灰黄色粘質土（炭化物・1cm大礫微量）
2　砂礫層（青味おびる）
3　砂礫層（1～15cm大礫混入）
4　砂礫層（1～10cm大礫混入）
5　砂礫層（1～7cm大礫混入　砂多量）
6　灰オリーブ色砂質土
7　砂礫層
8　砂礫層（1～5cm大礫混入）
9　砂層（粗砂）



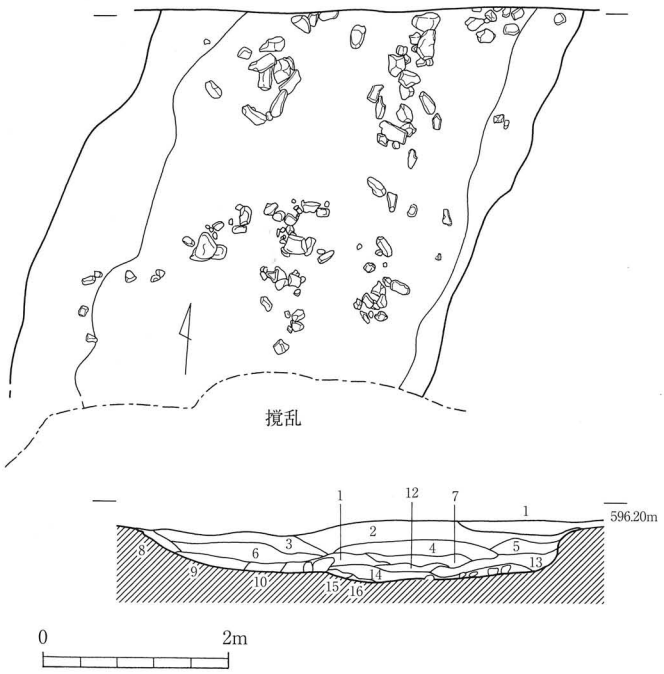
1　暗オリーブ褐色砂質土
2　暗灰黄色弱粘質土（灰色土塊中量　1～3cm大礫混入）
3　暗灰黄色砂質土（灰色土塊中量）
4　暗灰黄色粘質土（炭化物・～1cm大礫微量）
5　暗灰黄色弱粘質土（炭化物微量　2～5cm大礫少量）
6　石積層（10～20cm大礫・暗灰黄色弱粘質土混入）
7　暗灰黄色弱粘質土（灰色土塊少量）
8　暗灰黄色砂質土
9　灰オリーブ～オリーブ黒色砂質土
10　暗灰黄色弱粘質土
11　オリーブ黒色砂質土
12　砂礫層（灰オリーブ色砂質土）
13　灰色砂質土（鉄分多量）
14　砂礫層（青味おびる）
15　灰オリーブ色弱粘質土（2～4cm大礫中量）
16　灰色砂質土
17　灰オリーブ色砂質土（褐色土粒中量）
18　砂礫層
19　砂層（粗砂）

石列１

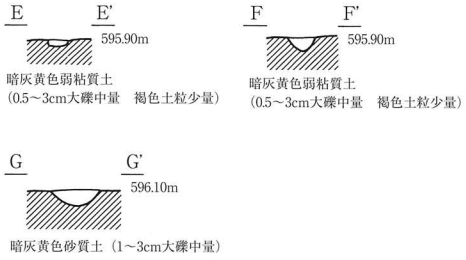


1　灰オリーブ色砂質土
（灰色土塊中量　1cm大礫少量）
2　灰～灰オリーブ色砂質土（礫混入）
3　暗灰黄色砂質土（1cm大礫中量）
4　暗灰黄色砂質土
（0.5cm大礫・灰色土粒少量）
5　黄灰～暗灰黄色弱粘質土
6　暗灰黄色砂質土
（灰色土塊多量　1cm大礫少量）
7　暗灰黄色弱粘質土

溝６

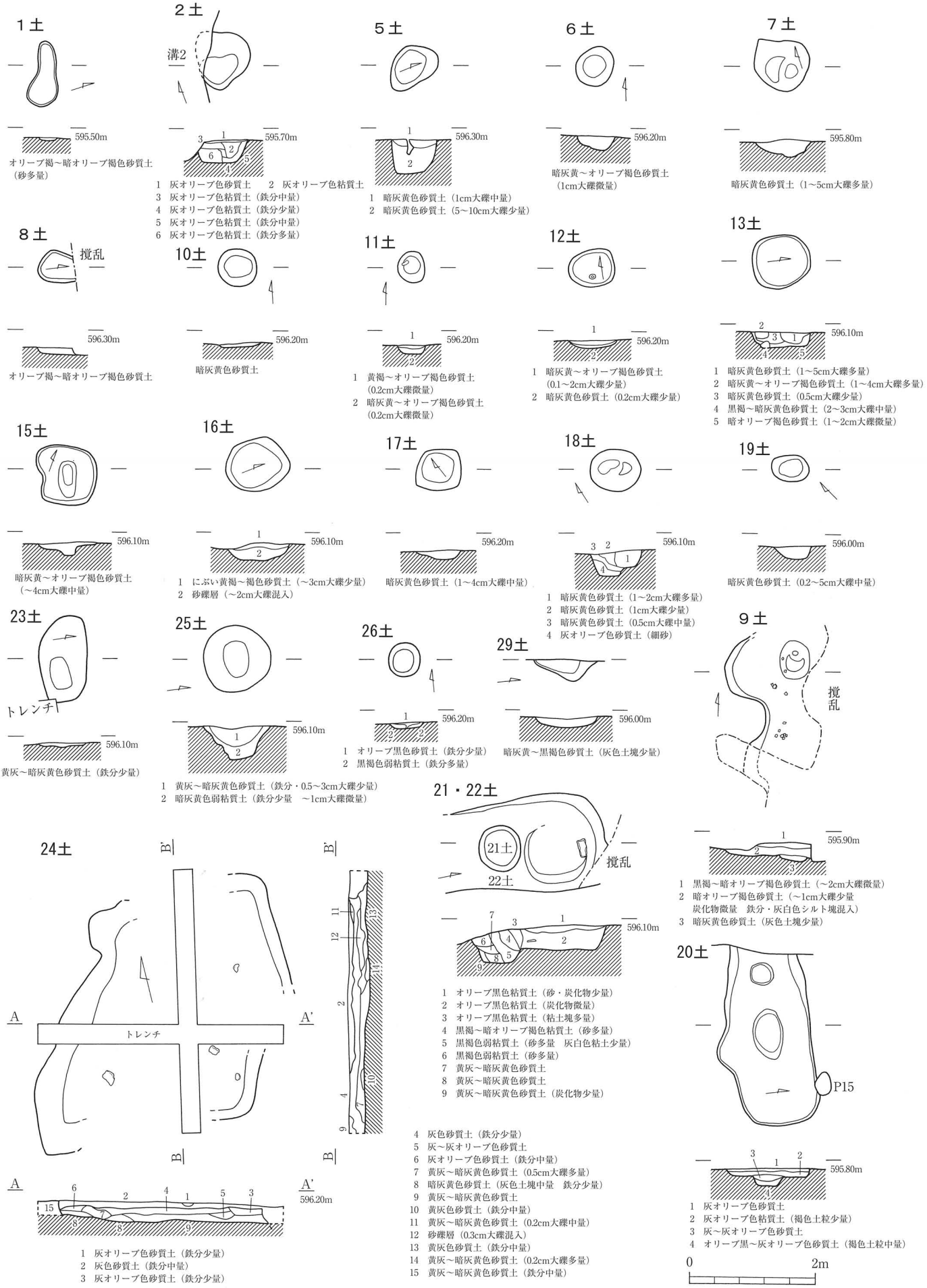


溝１



1　暗灰黄色砂質土（鉄分中量　黄褐色土粒少量）
2　暗灰黄色砂質土（鉄分多量）
3　灰オリーブ色砂質土（鉄分少量）
4　灰オリーブ色砂質土（灰色土塊中量）
5　灰オリーブ色砂質土（鉄分中量）
6　暗灰黄色砂質土（0.5～5cm大礫中量）
7　灰オリーブ色砂質土（鉄分少量）
8　黄灰～暗灰黄色砂質土（鉄分少量）
9　暗灰黄色弱粘質土（鉄分中量）
10　砂層
11　黄灰～暗灰黄色砂質土（灰色土塊中量　鉄分少量　10～20cm大礫多量）
12　灰オリーブ色砂質土（鉄分少量）
13　灰オリーブ色砂質土（鉄分中量）
14　砂礫層
15　灰オリーブ色弱粘質土（鉄分少量）
16　砂層

第13図　遺構（7）


1土
595.50m
オリーブ褐～暗オリーブ褐色砂質土
（砂多量）
2土
溝2
595.70m
1 灰オリーブ色砂質土　2 灰オリーブ色粘質土
3 灰オリーブ色粘質土（鉄分中量）
4 灰オリーブ色粘質土（鉄分少量）
5 灰オリーブ色粘質土（鉄分中量）
6 灰オリーブ色粘質土（鉄分多量）
5土
596.30m
1 暗灰黄色砂質土（1cm大礫中量）
2 暗灰黄色砂質土（5～10cm大礫少量）
6土
596.20m
暗灰黄～オリーブ褐色砂質土
（1cm大礫微量）
7土
595.80m
暗灰黄色砂質土（1～5cm大礫多量）
8土
撹乱
596.30m
オリーブ褐～暗オリーブ褐色砂質土
10土
596.20m
暗灰黄色砂質土
11土
596.20m
1 黄褐～オリーブ褐色砂質土
（0.2cm大礫微量）
2 暗灰黄～オリーブ褐色砂質土
（0.2cm大礫微量）
12土
596.20m
1 暗灰黄～オリーブ褐色砂質土
（0.1～2cm大礫少量）
2 暗灰黄色砂質土（0.2cm大礫少量）
13土
596.10m
1 暗灰黄色砂質土（1～5cm大礫多量）
2 暗灰黄～オリーブ褐色砂質土（1～4cm大礫多量）
3 暗灰黄色砂質土（0.5cm大礫少量）
4 黒褐～暗灰黄色砂質土（2～3cm大礫中量）
5 暗オリーブ褐色砂質土（1～2cm大礫微量）
15土
596.10m
暗灰黄～オリーブ褐色砂質土
（～4cm大礫中量）
16土
596.10m
1 にぶい黄褐～褐色砂質土（～3cm大礫少量）
2 砂礫層（～2cm大礫混入）
17土
596.20m
暗灰黄色砂質土（1～4cm大礫中量）
18土
596.10m
1 暗灰黄色砂質土（1～2cm大礫多量）
2 暗灰黄色砂質土（1cm大礫少量）
3 暗灰黄色砂質土（0.5cm大礫中量）
4 灰オリーブ色砂質土（細砂）
19土
596.00m
暗灰黄色砂質土（0.2～5cm大礫中量）
23土
トレンチ
596.10m
黄灰～暗灰黄色砂質土（鉄分少量）
25土
596.10m
1 黄灰～暗灰黄色砂質土（鉄分・0.5～3cm大礫少量）
2 暗灰黄色弱粘質土（鉄分少量　～1cm大礫微量）
26土
596.20m
1 オリーブ黒色砂質土（鉄分少量）
2 黒褐色弱粘質土（鉄分多量）
29土
596.00m
暗灰黄～黒褐色砂質土（灰色土塊少量）
9土
撹乱
595.90m
1 黒褐～暗オリーブ褐色砂質土（～2cm大礫微量）
2 暗オリーブ褐色砂質土（～1cm大礫少量
炭化物微量　鉄分・灰白色シルト塊混入）
3 暗灰黄色砂質土（灰色土塊少量）
21・22土
21土
22土
撹乱
596.10m
1 オリーブ黒色粘質土（砂・炭化物少量）
2 オリーブ黒色粘質土（炭化物微量）
3 オリーブ黒色粘質土（粘土塊多量）
4 黒褐～暗オリーブ褐色粘質土（砂多量）
5 黒褐色弱粘質土（砂多量　灰白色粘土少量）
6 黒褐色弱粘質土（砂多量）
7 黄灰～暗灰黄色砂質土
8 黄灰～暗灰黄色砂質土
9 黄灰～暗灰黄色砂質土（炭化物少量）
24土
トレンチ
A
A'
B
B'
596.20m
1 灰オリーブ色砂質土（鉄分少量）
2 灰色砂質土（鉄分中量）
3 灰オリーブ色砂質土（鉄分少量）
4 灰色砂質土（鉄分少量）
5 灰～灰オリーブ色砂質土
6 灰オリーブ色砂質土（鉄分中量）
7 黄灰～暗灰黄色砂質土（0.5cm大礫多量）
8 暗灰黄色砂質土（灰色土塊中量　鉄分少量）
9 黄灰～暗灰黄色砂質土
10 黄灰色砂質土（鉄分中量）
11 黄灰～暗灰黄色砂質土（0.2cm大礫中量）
12 砂礫層（0.3cm大礫混入）
13 黄灰色砂質土（鉄分中量）
14 黄灰～暗灰黄色砂質土（0.2cm大礫多量）
15 黄灰～暗灰黄色砂質土（鉄分中量）
20土
P15
595.80m
1 灰オリーブ色砂質土
2 灰オリーブ色粘質土（褐色土粒少量）
3 灰～灰オリーブ色砂質土
4 オリーブ黒～灰オリーブ色砂質土（褐色土粒中量）
0
2m

第14図　遺構（8）

第３節　遺物

１　土器

（１）　概要

土器は遺構内、検出面等から出土があり、明らかに近代の撹乱に伴う陶磁器類を除き全点を回収した。総量で85,691ｇとなる。

土器の整理は、洗浄の後、取り上げた単位毎に遺構順になるように固有の番号を振り、上段に遺跡・調査名である「出ガワ南15」を、下段に固有番号と帰属遺構等を注記した。接合は、まず帰属遺構内で、次いで周辺遺構、検出面等で、出土地点を跨いだ接合がないかを検討しながら行った。この段階で、遠距離にある遺構間での接合について見落とされている可能性はある。実測遺物の選別は、残存度が良いものを中心にしたが、甕類など大型の器種については大破片であっても図化不能で選別できなかったものも少なくない。また、この段階で遺構単位の土器群の特徴を示そうという選別傾向が生じている可能性は当然ある。実測は従来の考古学的手法によって、基本的に側面図に断面図を組み合わせる作図法で行い、底面図が必要と判断したものについてはこれを付した。最終的に本報告書へは 262 点を図化提示できた。実測図の断面が白抜きは土師器と黒色土器、黒塗りは須恵器と軟質須恵器を示している。軟質須恵器は土器番号の脇にＮの字を付した。

出土土器の記述は、個別の器種・器形の属性を探ることと、遺構等出土の土器群の時期・性格を把握することの２点に重点を置いた。出土土器群全体を掌握し客観化する作業は困難なものであり、様々な方法が試みられているが、今回はあくまでも調査地や遺跡の歴史的位置付けや評価に即応できることを主眼とした。本文中の番号は第15～22図の土器実測図の番号に一致する。「甕形土器」等の名称の「形土器」は省略した。

なお、器種・器形の分類と名称及び土器群の年代観は、古墳時代後期の杯類については文献１、奈良・平安時代の土器全般については文献２に準じた。

（２）種別、器種・器形

調査全体で出土した種別は土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器の４種がある。陶磁器類の出土はなかった。時期的には、すべてが古墳時代と奈良時代、平安時代前期に属する。

ア　古墳時代の土器

主に古墳時代後期の土師器と須恵器が出土している。土師器の中には内面または内外面黒色処理が行われているものがあるが、この時期には黒色処理技法が特定の器種に必ずしもすべて行われている訳ではないとの理解から、あえて黒色土器の語を避けた。

（ア）土師器

杯（142～147・239・240）

基本的に丸底で、口縁部に強いヨコナデが施された後、内面または内外面に横のミガキ、体部下半一帯に手持ケズリが行われるものである。文献１による古墳時代後期の土師器杯は杯Ａから杯Ｓまでの 19 器形に分類されているが、今回調査も同一遺跡内の別地点であるためこの分類を従う。すると杯Ａ3：144、杯Ｂ3：240、杯Ｅ：142、杯Ｊc：239、杯Ｍ：147、杯Ｐ：143・146、杯Ｏ：145 となる。いずれも丸底または丸底気味を呈すので底径は計測し得ない。145～147・240 は内面に、また 239 は内外面に黒色処理が行われている。

鉢（148・151・236）

定型的な鉢と呼ぶべき器種はなく、他の器種・器形に該当しないものをまとめた感が強い。148 は杯Ｊを大型化した形態で、杯Ｊと同機能と考えるが、寸法によって鉢に分類した。151 は小型の甕に似るが、内外面にミガキがあり、内面には黒色処理が行われているのでここに含めた。236 も同様に小型の甕に似るが、頸部にくびれがなく、内外面にミガキがある。

甕（140・141・150・237）

文献 2 の甕Aに相当する、古墳時代後期に伝統的な長胴形の甕である。口縁部を強くヨコナデされ、成形・調整ともに雑でナデや工具ナデが多用されている。底部は厚く、底面に木葉圧痕を残す。237 のような中型品には底部を丸底気味に仕上げるものもある。

壺（152～154）

丸く張る胴部に「く」の字の口縁部がつき、胴部にミガキが行われるものである。古墳時代に特徴的な器種で、奈良時代以降はわずかに胴張り甕として古い時期に残るのみである。

その他の器種（18・226・238・254）

古墳時代後期に属さないものをまとめた。18 は球形胴で「く」の字に外反する口縁を持つ壺と推定する。古墳時代中期に含めたい。226 は脚接合部で、弥生時代または古墳時代前期の台付甕の一部と考える。238 は４段成形の高杯の脚柱部で、内面上半に絞り痕、下半に横のケズリがあり、外面は縦のミガキがなされる。古墳時代中期に属する。254 は内湾気味に開く口縁部で、おそらく坩かヒサゴ壺の一部になるのではないかと考えている。口縁端部の内側に面が作られているのが特徴といえよう。古墳時代前期に遡る可能性を認めたい。

（イ） 須恵器

杯身（160）

蓋杯の杯身が１点図化できたが、口縁の立ち上がり部を欠き、全形は不明である。蓋受け部の最大径は 11.4 ㎝を測る。

杯蓋（149・158・159・235）

蓋杯の杯蓋は肩部に稜を持つ 158・159 と、天井部からなだらかに端部に至る 149・235 の２形態がある。一般に稜を持つ形態の方が古式と認識されているが、本例はいずれも古墳時代後期の中で収まるものと考える。159 には口縁端部内側に沈線状の窪みが一周しており、かつて面取りされていた形状の痕跡を残している。

高杯（246）

高杯脚端部と思われる破片が１点ある。ロクロナデの単純な端部となっており、面取り等がないので高杯ではない可能性もある。

甕（155）

数種類の胴部破片が出土しているが、口縁部から胴部までまとまった形で図化できたのは 155 の中型の甕１点のみである。口縁端部の肥厚部に沈線が巡らされ、胴部外面は平行線タタキ、内面には全面的に同心円紋当て具痕が明瞭に残る。

イ　奈良・平安時代の土器

土師器と黒色土器の関係は、特殊なものを除き、小型の食膳具を黒色土器、炊飯具を土師器で作り分けている。須恵器には食膳具と貯蔵具がある。軟質須恵器は須恵器に比べて胎土が粗く、一応、還元炎焼成だが軟質な土器で杯の存在のみが確認されている。

（ア） 土師器

杯（156）

１点のみ、畿内系の暗文杯が確認されている。橙色の特徴的な胎土を有し、体部に斜放射の暗文が付けられている。底面内部には円形螺旋の暗文が施されていた形跡が窺える。口径に対して器高が低く、畿内の編年では新しい方に位置づけられている。この器種は本市域では８世紀代にわずかに類例が認められるのみである。

椀（241・242）

本例はいずれも破片資料で全形を知りえないが、黒色土器Aの杯Aに近い形態を呈すと推定する。胎土が白色微細で焼成があまい。

盤（38）

大型の器種である盤Aの口縁部破片が１点のみ図化できている。盤Aが盛行するのは９世紀末以降であるが、本例のような古い時期には出土例が少なく、初期の消長や型式変化については未だ不明な点が多い。

小型甕

小型甕は多数出土しているが、ロクロナデが行われる小型甕Dと、ロクロナデが行われずハケメを有する小型甕Bが認められる。小型甕Dは胴部外面全面にカキメが施され、底面には回転糸切痕が残る。中にはハケメをかけた後にカキメを施した折衷的な技法が認められるもの（202）もある。小型甕Bは胴部外面に縦のハケメを持つのを特徴とするが、胴下部は横のハケメの場合もある。小型甕Dは土師器甕Bの出現に前後して登場することが知られており、先行する小型甕Bとの間の型式的断絶をどのように捉えるか、今後の課題となろう。

甕

古墳時代後期から伝統的な長胴形の甕Aとハケメを多用する長胴形の甕Bがあり、甕Bが圧倒的に多い。甕Bは松本盆地南部と天竜川水系に主体的に分布する土師器甕である。この他に東信型の甕である甕C（いわゆる武蔵甕：16・257）と北信型の甕（136）がわずかに出土している。

甕Bの基本形は、胴部外面に縦のハケメ、内面に縦長のユビナデ痕がのこり、口縁部はロクロ調整されて内面にカキメが施されている。しかしながら、今回報告の甕Bの中には口縁部内面がカキメではなく横のハケメのものが多数見られ、これらは胴部内面にもハケメや工具ナデを有するものが多い。一方、胴部外面上半のハケメの上にロクロナデの痕跡を留めるものもあり（105・135）、これには口縁内面にハケメやカキメが行われていない。文献２に基づけばロクロナデの行われるものは甕Dと分類されているが、甕Dは外面のハケメが顕著ではない。したがって、本例は甕Bと甕Dの折衷型と理解したい。ここでは便宜的に口縁内面がカキメのものを甕B1、ハケメのものを甕B2、さらに胴部内面に縦長のユビナデ痕を持つものにａ、ハケメや工具ナデのものにｂを付し、甕Dとの折衷型は甕B3と分類しておく。おそらく大きな流れは甕B2bから甕B1aへと型式変化をとげていったものと考える。

甕Cは東信地方で盛行する器形で、８世紀後半から９世紀代にかけて本市域でも散見される。小型甕Cとセットになっており、その型式変化は文献２や東信地方の報告に詳しく触れられているのでここでは省く。

北信型の甕は文献２では分類にないが、８世紀後半から10世紀代に北信地方で土師器甕の主体をなし、９世紀後半以降には同じ千曲川水系の東信地方にも進出する。その反面、北安曇郡以南の中南信地方では奈良・平安時代を通して皆無に近い。本出土例は非常に珍しいものと言える。胴部が砲弾型を呈し、内面全面にカキメを有するのが大きな特徴である。胴部外面は工具によるケズリに近い縦の調整痕で満たされ、わずかにタタキの痕跡が認められる。

鍋（83）

珍しい器種で１点が出土している。甕B1a の口径を広げ器高を下げた現代の擂鉢型形態で、胴部外面のハケメ、口縁部内面のカキメの存在なども一致し、製作技法は甕B1a と同様であったと考える。北信地方でも北信型の甕の製作技法と同様な鍋の存在が確認されており、数量的には少ないが、地域をまたいで一定の用途が付与されていた器種と考えたい。

（イ）黒色土器

杯

食膳具の主体を占める器種のひとつで多数の出土がある。器形は定型化した杯Aのみで、寸法によって杯ＡⅠと杯ＡⅡの２種があり、杯ＡⅡは口径13㎝、器高４㎝前後、杯ＡⅠは口径15～16㎝、器高５～６㎝を測る。いずれも体部外面は丁寧なロクロナデ、内面は細かい放射状のミガキが行われ、底面には回転糸切痕が残る。古い形態は内面のミガキが放射状ではなく細かく緻密で、底面の糸切痕を丁寧にケズリ落としている。次項で述べる黒色土

器Aの特殊な鉢（108）のようなものが祖形で、金属器の鋺か三彩・二彩の杯形のものを模倣して出現すると考える。出現直後からⅠ、Ⅱの寸法の分化がある。

鉢（35・108）

杯ＡⅠをさらに大型化したもので、口径は20㎝を超える。片口が付くものもあるが、今回の調査では片口付は確認できなかった。この他に特殊なものとして 108 を鉢に加えた。基本的には杯ＡⅠと同形態であるが、口縁外面に粗雑な沈線が一周し、佐波理鋺を模倣、あるいは佐波理鋺を模倣した須恵器を再模倣したものと捉えて鉢とした。ロクロナデで調整されるが、体部下端から底面一帯に丁寧な手持ケズリを行っている。杯Aの祖形にあたると考えている。

椀（217）

わずかだが出土がある。１点を図化提示でき、それ以外にも２個体ほどみられた。形態的には杯Aに高台が付されたもので、ロクロナデの後、体部内面に放射状に細かいミガキをかけ、焼成時に黒色処理を行っている。出現の契機は緑釉陶器、灰釉陶器、あるいは輸入磁器の椀の模倣であろう。黒色土器Aの椀は９世紀末以降に盛行するため、土器群の伴出関係に問題がなければ、本例は古相にあたるものとなる。

皿（36・37）

皿Ｂが少数出土している。２点を図化提示できた。ロクロナデの扁平な体部に高台を付したもので、内面は細かいミガキの後、黒色処理が行われ、底面には回転糸切痕が残る。出現の契機は、輸入磁器またはそれを模した緑釉陶器の更なる模倣という見解と、木製の漆皿を写したものとの見方もある。９世紀の後半に特徴的な器種である。

（ウ）須恵器

杯

高台を持たない杯Aと高台を有する杯Bの２者が認められ、いずれも多数が出土している。

杯Aはほとんどが平底だが、丸底気味のものが数点ある（233・234）。丸底気味の方が古い形態であろう。平底の中にも、底面がヘラ切・ヘラケズリのものと回転糸切のものがあり、時期差に起因すると考えられる。ここでは丸底気味のものを杯A1、平底で底面がヘラ切・ヘラケズリのものを杯A2、底面が糸切のものを杯A3と仮称する。概ね杯A1は７世紀末から８世紀第１四半期、杯A2は８世紀第２～３四半期、杯A3は８世紀第３四半期以降と把握している。

杯Bは口径に比して器高の低いものと高いものの２形態がある。底面は回転ケズリが行われるが、その中央部に回転糸切痕を残して、切り離しが糸によることが判るものと、全面的に回転ケズリが行われ、切り離し方法がにわかに判別できないものがあり、後者は底部の下部への膨らみ具合によってヘラによる切り離しか糸切かを推定している。杯Bの分類としては、ヘラによる切り離しと推定されるものを杯B1、糸切と推定されるものを杯B2、底面中央部に糸切痕をケズリ残すものを杯B3としておく。この３種の底面状態の違いも、時期差に起因すると考えられる。すなわち杯Aと同様に、杯B2の糸切が導入されるのは８世紀第３四半期以降で、さらに杯B3の底面中央部に糸切痕がケズリ残されるものは８世紀第４四半期以降と考える。

皿（219）

須恵器の中では珍しい器種で、黒色土器の皿と同じ形態を呈するが、内面にミガキはない。本調査では１点のみ認められた。底部一帯を欠くが、他遺跡の例から見ると付け高台を伴っているものと糸切底のままの２者があり、本例の全形を推定するのはむずかしい。

蓋

端部が短く屈曲し天井部に扁平な宝珠つまみを有する蓋Bがほとんどだが、例外的に天井部に回転糸切痕をそのまま残す190や、端部の屈曲が長い101などがある。いずれの蓋Bも反転して開口部を上にした状態で成形され、ロクロナデによって端部の屈曲も形成される。ヘラないしは糸によって切り離されて伏せられ、最後の工程で天井部

に回転ケズリが加えられて宝珠つまみが付せされる。切り離し方法は伴出する須恵器杯Aや杯Bに準じて時期差による変化があると考えるが、190のような特殊な例を除いて切り離し痕は全くケズリ消されているので確証はない。190は糸切部を底部に据えて皿形の器種とも考えたが、端部の屈曲が蓋Bに酷似するため蓋と分類した。101については上下反転して高台が付される盤または高盤になる可能性も考えたが、図上では高台径が小さくなりすぎるため蓋と分類した。口径の大きさなどから、通常の杯Bではなく金属器模倣の鉢や皿などと組み合わさるものと考える。

長頸壺

口縁端部がわずかに立ち上がり、胴部の肩が丸い長頸壺Aと、口縁端部がそのまま外反し、肩部に稜を有する長頸壺Bがある。今回は破片資料がわずかに出土しているのみである。時期的には長頸壺Bの登場が8世紀前半台と先行し、長頸壺Aは9世紀後半から10世紀代に主流となる。図示した19と56はいずれも長頸壺Aになると想定している。20は底部破片なのでA・Bの判別がつかない。

壺

明らかに短頸壺等の器種が弁別できないものを「壺」としてまとめてある。

甕

須恵器の大型貯蔵具の破片は多いが、その大きさ故に図化できたものは多くない。長めの口縁部が外反しながら大きく開く中型・大型の甕A、中型で甕Aに比べて口縁部が短く開く甕C、中型で肩部が張り、そこから頸部がわずかにくびれて短い口縁部が開く平底の甕Eの3器形が認められる。また甕Aの中型品には凸帯付四耳壺である甕Dが含まれている可能性もあるが、耳部の出土はない。いずれも胴部にタタキ、口縁部にロクロナデがおこなわれる。

不明器種（58・59）

相似形の2点が出土している。同一個体の可能性もある。大型の甕Aの口縁部状を呈して外開するが、端部近くで大きく屈曲して開く。端部が面取り状を呈すことから大型の台状の形態になると想定して脚部として図化したが、自然釉の飛び方からみると上下が逆転して口縁部である可能性も高い。口縁部とした場合も、どのような器種になるのかまったくわからない。

（エ）軟質須恵器

杯（11・77）

わずかな存在が確認されており、2点を図化した。食膳具の主体が黒色土器Aの杯Aと須恵器杯Aの底面に回転糸切痕を有す段階のものに占められる土器群の中に混じって存在する。前述したとおり、還元状態で焼成されて暗灰色を呈しているが焼きはあまく、胎土は粗雑で脆い。

（3）土器群

ア　東海系の須恵器

須恵器の中には灰白色硬質な胎土を持ち、明らかに他と異なる上質な焼成状態を示す一群がある。主な器種器形は杯A、杯B、蓋Bであるが甕A、甕Eにも類例がある。これらは在地の須恵器窯産ではなく東海地方西部の窯で焼成され、当地に搬入されたものと考える。特に注目されるのは美濃須衛窯製品であり、文献2でも当地域に多量に流入したことが触れられている。当該窯産と推定できる個体は、杯Aでは164・178、杯Bでは180～186・188・189、蓋Bでは191～193などであり、このほか図示できなかったが甕Eなどにも含まれていると考える。373号住居址出土品が大半を占めており、同住居址出土の土器群の時期的な問題と、器種器形の組み合わせ上の特性および同住居址そのものの性格が原因と考える。

イ　遺構出土の土器群

前述のように土器群をより客観的に把握し記述・提示しようという作業は、現場でも整理レベルでも時間と経費

を要するものであり、また細分に過ぎると最終目的であるべき歴史叙述に用をなさなくなる恐れもある。したがって、ここではまとまった出土量があり、図化提示できた個体数が多い遺構出土土器群について、図化提示できた土器を中心に遺構ごとに概観する手段を採りたい。

なお、遺構間接合のあった個体が10点ほど認められるが、最終的に残存度の多い方の遺構に帰属させた。接合の原因は遺構間の切り合いによる混入、上面の撹乱等による混入がほとんどと考えるが、正直なところ十分な検討ができなかったものが多い。観察表の注記の欄で確認をいただきたい。

（ア）第361号住居址出土土器群

15点を図化している。食膳具が黒色土器Aの杯Aと須恵器の杯A3で構成され、わずかに軟質須恵器の杯Aが混じる。土師器甕は甕B1が主体で甕Cが伴っている。黒色土器A杯Aと須恵器杯A3の比率がほぼ半々で、軟質須恵器が伴いながら黒色土器Aの椀がない点などから、本土器群は文献2に従えば6～7期、9世紀第2・3四半期に相当しよう。

（イ）第362号住居址出土土器群

39点を図化している。食膳具が黒色土器Aの杯Aと須恵器の杯A3で構成され、土師器甕は甕B1aが主体となっている。黒色土器A杯Aと須恵器杯A3の比率がほぼ半々で、これに黒色土器Aの椀と皿Bと土師器の小型甕Dが伴う構成は7期、9世紀第3四半期に相当しよう。

（ウ）第363号住居址出土土器群

11点を図化している。食膳具が須恵器の杯A2・杯A3と杯Bおよび黒色土器Aの杯Aで構成されている。土師器は甕B1aで小型甕Dが伴う。須恵器の甕Cがみられる。本土器群は時期的に2分され、古相は須恵器杯A2・B、須恵器蓋で、新相が黒色土器Aと土師器甕B1a、小型甕Dである。文献2に従えば古層は5～6期、9世紀前半期、新相は6～7期、9世紀第2・3四半期に相当する。本址に直接帰属する時期は新相をもってあてたい。

（エ）第364号住居址出土土器群

17点を図化している。食膳具が黒色土器Aの杯Aと須恵器の杯A3で構成され、わずかに軟質須恵器の杯Aが混じる。土師器は甕B1が主体で鍋、小型甕Dが伴っている。黒色土器A杯Aと須恵器杯A3の比率がほぼ半々で、軟質須恵器が伴いながら黒色土器Aの椀がない点などから、本土器群は361住土器群と同様に6～7期、9世紀第2・3四半期に相当しよう。

（オ）第367号住居址出土土器群

13点を図化している。食膳具は須恵器の杯A3が主体で、わずかに黒色土器Aの杯Aが混じる。煮炊具は土師器甕Bだが103のような異質なものや甕B3を含んでいる。須恵器杯Bが認められないが、5期に前後する時期の土器群と捉え、9世紀第1四半期に置きたい。

（カ）第368号住居址出土土器群

12点を図化している。食膳具は須恵器の杯B3と蓋Bで構成され、杯AかBの判別がつかないものが3点あるが、杯Aとすれば腰の張る比較的古い形態を呈するものと考えられる。また須恵器椀Aが1点認められた。黒色土器Aは佐波理鋺を模倣したと推定する特殊な鉢（108）が1点のみである。煮炊具は土師器の甕B2と小型甕Bである。4期に前後する時期の土器群と捉え、8世紀後半の時期を考えたい。

（キ）第369号住居址出土土器群

11点を図化している。食膳具は須恵器の杯A、杯B2・B3、蓋Bで構成され、煮炊具は土師器の甕Bである。4期を前後する時期の土器群と捉え、8世紀後半の時期を考えるが、土師器甕Aの存在や須恵器蓋Bの形態から、第368号住居址出土土器群に先行すると見たい。

（ク）第370号住居址出土土器群

9点を図化している。食膳具は須恵器の杯A2、蓋Bと黒色土器Aの杯Aであるが、須恵器蓋Bの存在から同杯

Ｂも伴っていたと考えてよいだろう。煮炊具は土師器の甕Ｂ３と北信型の甕である。北信型の甕の存在は特異な事例と扱っても甕Ｂ３の時期的評価がむずかしい。１点のみの黒色土器Ａの杯Ａが底面に糸切痕を残すものである点に疑義が生じるが、須恵器杯Ａ２や土師器甕Ｂ３を根拠にして、３～４期の土器群と捉え、８世紀中葉～後半の時期を想定したい。

（ケ）第 372 号住居址出土土器群

14 点を図化している。全体的に古墳時代後期の資料で、土師器の杯、鉢、甕、壺、須恵器の杯蓋、甕が出土している。土師器杯類の形態から７世紀代、須恵器の杯蓋から７世紀後半の時期が導けると考える。

（コ）第 373 号住居址出土土器群

60 点を図化している。食膳具は須恵器の杯Ａ２とＢ１が圧倒的多数を占め、蓋Ｂも伴っている。珍しいものとして天井部に糸切痕を残す須恵器の蓋（190）と土師器の畿内系暗紋杯（156）がある。煮炊具は土師器の甕Ａと甕Ｂ２で、甕Ｇに類似する破片も伴っている。また、小型甕Ｄがわずかに伴う。貯蔵具は須恵器の甕Ｃと甕Ｅがみられる。土師器や黒色土器の定型的な杯類を欠き、須恵器の杯類に糸切技法がほとんどない点から３期の良好な資料であり、８世紀中葉に位置づけられる。なお 158～160 の須恵器蓋杯の杯蓋と杯身は７世紀代以前のもので、混入品と判断した。

（サ）第 24 号土坑出土土器群

須恵器杯Ａを３点図化しているが、いずれも杯Ａ1 で８世紀初頭に位置づけられる一群であろう。

（シ）第 27 号土坑出土土器群

須恵器杯蓋と土師器の甕、鉢が図化されている。いずれも７世紀代の後半に遡る資料と考えられ、時期的には古墳時代後期の第 372 号住居址出土土器群に匹敵する内容と考える。

（ス）その他の土器群

少ない個体数から時期判別を行うのはかなり危険性が伴うが、敢えて想定すれば第 360 号住居址は４～６期、第 365 号住居址は３～５期、第 366 号住居址は４～６期、第 371 号住居址は古墳時代後期７世紀後半、第 374 号住居址は６～７期、第４号土坑が６～８期、第９号土坑が５～７期、溝６は７～８世紀代全般となろう。

参考文献

1 竹原学 1994「土器」『松本市文化財調査報告№115 出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会

2 小平和男 1990「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4－松本市その 1－総論編』長野県教育委員会

3 堤隆 1987「佐久地方における様相」『長野県考古学会誌－信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相－』55・56 長野県考古学会

4 原明芳 1996「甲信地域の 8・9 世紀の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東 4 煮炊具－』古代の土器研究会

5 直井雅尚 1996「信濃における奈良・平安時代の土師器甕について」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

２　石製品

４点の石器が出土した。内訳は、凹・磨石１点、砥石１点、剥片１点、不明１点（砂岩）である。このほかに人為・自然為が判然としない礫片４点（砂岩１点、硬砂岩２点、凝灰岩１点）と被熱した砂岩の破片１点が出土している。以下では定形的な石器２点、剥片１点について図化し、種類別に記載する。

凹・磨石（第 22 図 1）

凹み、磨面の両方を併せもつため凹・磨石とした。扁平な砂岩製で、平面形が不整な楕円形礫を素材とする。表裏両面には、礫の中央から少し外れた位置に敲打による凹みが１箇所ずつあり、表の凹みは長軸×短軸×深さが 36.6×24.5×5.8 ㎜、裏は 28.4×21.7×2.9 ㎜と違いがある。右側面に 107.5×18.9 ㎜の磨面がある。

砥石（第 22 図 2）

片側が折損しているが、やや扁平な角柱状の砂岩礫を素材にし、平面形は長方形を呈していたと考えられる。表裏両面と右側面（図での上）　の３面に砥面が観察された。右側面は下方でわずかに内湾しており、長辺と平行す

る線状痕がみられる。裏面には、金属製品の刃を斜めに立てて研いだと考えられる、幅・深さ共にmm以下の多数の線状痕が観察される。

剥片(第22図3)

灰色のチャートを素材とする。片面の下半に原石の表皮が認められる。360住北側の遺物包含層から出土した。

3　鉄製品（第22図1～3）

5点出土したうちの3点を図示した。1・2は刀子である。いずれも373住の床面直上から出土した。1はほぼ完形で、関は棟側に緩く設け、刃側は不明瞭である。身部の形態はほぼ直線的に伸び、切先付近で角を持つ。2は茎部が欠損するが、刃側に関を設け、棟側は不明瞭である。3はヤリガンナである。刃部に向かって幅が広くなり、緩やかに反っている。

第5表 土器観察表

No.	地点	種別	器種器形	寸法			残存度		成形・調整等		実測番号	注記
				口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面		
1	360住	須恵器	杯A	12.9	6.3	3.5	5/6	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	360住3	360住031
2	360住	須恵器	蓋B	13.6	―		1/8	―	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	360住4	360住003
3	360住	土師器	甕B	22.8			3/8		縦ハケメ、ヨコナデ	カキメのち縦工具ナデ	360住1	360住018、361住049
4	360住	土師器	甕B		6.8			1/6	縦ハケメ、底面ナデ	縦の工具ナデ	360住2	360住006
5	360住	須恵器	甕A				一部		ロクロナデ	ロクロナデ	360住5	360住012
6	361住	黒色A	杯AⅡ	13	5.6	3.7	完	完	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住1	361住069
7	361住	黒色A	杯AⅡ	14.2	6.6	3.8	1/4	1/5	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住3	361住047
8	361住	黒色A	杯AⅡ	12.6	5.4	4.3	1/4	1/4	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住2	361住074・079
9	361住	黒色A	杯AⅠ	16.6	7.2	5.3	1/2	一部	ロクロナデ、手持ちケズリ	ミガキのち黒色処理	361住5	361住060・072
10	361住	黒色A	杯AⅠ		7.4			1/4	ロクロナデ、回転糸切のちケズリ	ミガキのち黒色処理	361住4	361住076・079
11	361住	軟須恵	杯A	14	6.4	4	完	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	361住9	361住057
12	361住	須恵器	杯A	13.4	6	3.7	1/4	1/5	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	361住10	361住076
13	361住	須恵器	杯A	13			一部		ロクロナデ	ロクロナデ	361住11	361住073
14	361住	須恵器	杯A		6.2			1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	361住13	361住079
15	361住	須恵器	杯A		7.2			1/4	ロクロナデ、回転糸切、ヘラ記号	ロクロナデ	361住12	361住072
16	361住	土師器	甕C	23			1/5		ヨコナデ、横ケズリ、タタキメ状	ヨコナデ、工具ナデ	361住8	361住066・067
17	361住	土師器	甕B	20.2			1/5		ヨコナデ、縦ハケメ	カキメ、工具ナデ	361住7	361住059・072
18	361住	土師器	壺	17			1/10		ヨコナデ、ミガキ？	ヨコナデ、ミガキ	361住6	361住076
19	361住	須恵器	長頸壺A	4.2					ロクロナデ	ロクロナデ	361住14	361住079
20	361住	須恵器	長頸壺		5.2			2/3	ロクロナデ、回転ケズリ、付高台	ロクロナデ	361住15	361住076
21	362住	黒色A	杯AⅡ	13	5.6	4	1/2	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住1	362住096・117・172・183
22	362住	黒色A	杯AⅡ	13			1/4		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	362住5	362住178・179
23	362住	黒色A	杯AⅡ	13.2	6.8	3.8	4/5	完	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住2	362住101
24	362住	黒色A	杯AⅡ	13.1	5.4	3.85	1/5	完	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住3	362住173
25	362住	黒色A	杯AⅡ	13.6	6	3.9	1/3	7/8	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住9	362住093・179・196
26	362住	黒色A	杯AⅡ	12.4			1/4		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	362住6	362住179
27	362住	黒色A	杯AⅡ		5.4			1/4	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住7	362住179
28	362住	黒色A	杯AⅡ	12.35	5	3.95	1/8	完	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住4	362住174・187
29	362住	黒色A	杯AⅡ	12.9	6.2	4	1/2	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住8	362住110・178
30	362住	黒色A	杯AⅡ		6.4			1/4	ロクロナデ、回転糸切、墨書	ミガキのち黒色処理	362住24	362住183
31	362住	黒色A	杯AⅡ		5.8			1/4	ロクロナデ、墨書	ミガキのち黒色処理	362住26	362住186
32	362住	黒色A	杯AⅠ	16.2			1/4		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	362住11	362住098
33	362住	黒色A	杯AⅠ	16.2			1/6		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	362住10	362住164
34	362住	黒色A	杯AⅠ	19.6	8	5.5	3/8	1/12	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住12	362住142・178・183・233・240・279・281・286
35	362住	黒色A	鉢	22.4			1/6		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	362住15	362住178
36	362住	黒色A	皿B	13.05	7	2.95	5/8	完	ロクロナデ、回転糸切、付高台	ミガキのち黒色処理	362住13	362住092・104
37	362住	黒色A	皿B	13.1	6.4	2.55	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切、付高台、刻字	ミガキのち黒色処理	362住14	362住102
38	362住	土師器	盤A	32.2			1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	362住23	362住194
39	362住	須恵器	杯A	13.4	5.4	3.75	1/4	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	362住31	362住165・178・190・193
40	362住	須恵器	杯A	13	5.1	3.25	3/8	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	362住30	362住180
41	362住	須恵器	杯A	13.05	5.1	3.4	2/3	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	362住28	362住087
42	362住	須恵器	杯A	13.8	7.6	3.2	3/8	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	362住29	362住183・187
43	362住	須恵器	杯A	13	6.4	3.9	1/8	1/2	ロクロナデ、回転糸切、底面ハケメ工具ナデ？	ロクロナデ	362住32	362住144
44	362住	須恵器	杯A	12.8	6.6	3.85	1/10	1/4	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	362住33	362住180
45	362住	須恵器	杯A	12.8	6.8	3.9	僅	1/10	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	362住34	362住180

No.	地点	種別	器種 器形	寸法 口径	寸法 底径	寸法 器高	残存度 口縁	残存度 底部	成形・調整等 外面	成形・調整等 内面	実測番号	注記
46	362住	須恵器	杯A	13.7	6.4	4.1	3/4	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	362住35	362住100
47	362住	須恵器	杯A						ロクロナデ	ロクロナデ	362住27	362住183
48	362住	須恵器	蓋B	17.8			1/4		ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	362住36	362住182・183
49	362住	土師器	小型甕D	8.8	5.3	8.1	完	完	ロクロナデ、カキメ、回転糸切	口縁カキメ、ロクロナデ	362住16	362住127
50	362住	土師器	小型甕B	13.4	6.8	15.1	1/4	1/3	縦ハケメ、工具ナデ	横ハケ状工具ナデ	362住17	362住105・107・115・170・178・179・181
51	362住	土師器	甕B	22.4			1/3		縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ、縦指ナデ	362住22	362住088・091・094・163・172・193
52	362住	土師器	甕B	21.2			1/3		縦ハケメ	口縁横ハケメ、工具ナデ、縦指ナデ	362住20	362住149・168・179・193
53	362住	土師器	甕B	20.6			1/4		縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ	362住21	362住175・179
54	362住	土師器	甕B	15.9			1/2		縦ハケメ	口縁横ハケメ、工具ナデ、縦指ナデ	362住18	362住146・147・152・154・155・174・183
55	362住	土師器	甕B	21			僅		縦ハケメ	口縁横ハケメ、工具ナデ	362住19	362住113・129・130・149・151・168・178・179・187・365住299
56	362住	須恵器	長頸壺						ロクロナデ	ロクロナデ	362住38	362住089・111・121・160・167・177・178・186・191・193
57	362住	須恵器	甕D	18.3			1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	362住37	362住178・190・196
58	362住	須恵器	?		38			1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	362住40	362住179
59	362住	須恵器	?		44			1/16	ロクロナデ	ロクロナデ	362住39	362住168・178
60	363住	黒色A	杯AⅠ	16.25	6.6	5.75	1/3	5/6	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	363住1	362住181・193・363住206・219
61	363住	黒色A	杯AⅡ	13.7	6.5	4.2		完	ロクロナデ、回転糸切のち中央部工具ナデ	ミガキのち黒色処理	363住2	363住207・219・221・227
62	363住	須恵器	杯A	12.4	6	4.05	2/5	1/5	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	363住4	363住181・219・227
63	363住	須恵器	杯A	15	7.3	4	1/14	僅	ロクロナデ、手持ケズリ	ロクロナデ	363住5	363住224
64	363住	須恵器	杯B	12.6					ロクロナデ	ロクロナデ	363住3	363住221
65	363住	須恵器	杯B		9			1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	363住6	363住219・227
66	363住	須恵器	蓋B	14.2	—		1/13	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	363住7	363住223
67	363住	土師器	小型甕D	12.2					ロクロナデ、カキメ	口縁カキメ、ロクロナデ	363住8	363住181・202・219・227・229・843
68	363住	土師器	甕B	25			1/9		縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ、縦指ナデ	363住9	363住219・227・229・230
69	363住	須恵器	壺						ロクロナデ	ロクロナデ	363住10	363住200・215
70	363住	須恵器	甕C	16			1/10		ヨコナデ、タタキ	ナデ	363住11	363住198
71	364住	黒色A	杯AⅠ	16.8	7	4.7	5/8	完	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	364住1	364住256・267
72	364住	黒色A	杯AⅡ	12.2	5.8	3.4	1/6	3/8	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	364住3	364住232
73	364住	黒色A	杯AⅠ	15.4	7.2	4.4	1/3	2/3	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	364住2	364住243・253
74	364住	黒色A	杯AⅠ	15.8			1/12		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	364住5	364住281
75	364住	黒色A	杯AⅠ	17.6			1/8		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	364住4	364住277
76	364住	黒色A	杯AⅠ		7.8			1/4	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	364住6	364住273
77	364住	軟須恵	杯A	12.8			1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	364住11	364住286
78	364住	須恵器	杯A	13.6	6.2	3.3	1/4	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	364住13	364住244
79	364住	須恵器	杯A	13.1	6.2	3.8	1/2	4/5	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	364住12	362住178・364住247・278・4土719
80	364住	須恵器	杯A	14	7.2	4	僅	僅	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	364住14	364住272
81	364住	須恵器	杯A		6.2			1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	364住15	362住190・364住244
82	364住	須恵器	鉢	12.8			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	364住16	364住280
83	364住	土師器	鍋	32			1/10		縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ、縦指ナデ	364住8	364住236・275
84	364住	土師器	小型甕D		8			完	ロクロナデ、カキメ、回転糸切	ロクロナデ	364住7	364住250
85	364住	土師器	甕B	24.8			1/12		縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ	364住9	364住235・237・267・268
86	364住	土師器	甕B		11.4			1/12	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ	364住10	364住238・241・267
87	364住	須恵器	長頸壺	18.2			僅		ロクロナデ	ロクロナデ	364住17	364住276
88	365住	須恵器	杯B	13.8	9.8	3.5	1/6	1/5	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	365住2	365住290
89	365住	須恵器	蓋B	16	—		1/14	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	365住1	365住300・301
90	365住	須恵器	甕A	23.5			1/5		タタキのちロクロナデ	ロクロナデ	365住3	363住229・365住298
91	365住	須恵器	甕A	27			1/8		ロクロナデ、波状紋	ロクロナデ	365住5	365住300
92	365住	須恵器	甕A	26.9			1/5		ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ	365住4	365住293
93	366住	土師器	甕B	20.8			1/12		縦ハケメ	口縁ヨコナデ、横ハケメ	366住1	366住305
94	366住	土師器	甕B		8.4			1/3	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ	366住2	366住305
95	367住	黒色A	杯AⅠ	16.8	7.6	5.7	1/8	1/3	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	367住2	367住351
96	367住	須恵器	杯A	12.7	6	3.2	3/4	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	367住10	367住342・343・350・352
97	367住	須恵器	杯A	12.8			1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	367住1	367住351・358・361
98	367住	須恵器	杯A	13.2	6.2	3.1	1/4	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	367住11	367住355・363
99	367住	須恵器	杯A	12.9	5.6	3.6	2/3	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	367住8	367住339・340・352
100	367住	須恵器	杯A	14.4	6	4.1	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	367住9	367住324・328・335・346・347
101	367住	須恵器	蓋	15.6	—		僅	—	ロクロナデ	ロクロナデ	367住12	367住355
102	367住	土師器	小型甕D	10.4			1/3		ロクロナデ、カキメ	口縁カキメ、ロクロナデ	367住3	367住355
103	367住	土師器	甕B	21.6			1/12		ヨコナデ、斜ハケメ	繊維束状工具の横のナデ	367住5	367住337・338・353
104	367住	土師器	甕B		7.6			4/5	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ	367住6	367住335・359

No.	地点	種別	器種 器形	寸法 口径	寸法 底径	寸法 器高	残存度 口縁	残存度 底部	成形・調整等 外面	成形・調整等 内面	実測番号	注記
105	367住	土師器	甕	25.2			1/3		縦ハケメのちロクロナデ	縦ハケメ	367住4	367住315・325・329・333・336・346・347
106	367住	土師器	甕B		8.6			1/3	縦ハケメのち粘土塗布上工具ナデ	縦ハケメ	367住7	367住323・331・334・374住708
107	367住	須恵器	甕A	31			一部		ロクロナデ	ロクロナデ	367住13	367住351・検出面850
108	368住	黒色A	鉢	16.4	9.6	5.2	1/3	完	ロクロナデ、手持ケズリのちミガキ、口縁圏線	細かいミガキのち黒色処理	368住1	368住365・366・370・373・387・393・398
109	368住	須恵器	杯	11.8			1/10		ロクロナデ	ロクロナデ	368住9	368住410
110	368住	須恵器	杯	12			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	368住10	368住414
111	368住	須恵器	杯	12.4			1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	368住11	368住409
112	368住	須恵器	杯B	12	9.2	3.6	1/4	1/3	ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	368住6	368住372・404
113	368住	須恵器	杯B	14.4			1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	368住8	368住385
114	368住	須恵器	杯B	15.8	10.6	5.3	1/16	1/4	ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	368住7	368住368
115	368住	須恵器	椀A	13.8			1/10		ロクロナデ	ロクロナデ	368住12	368住418
116	368住	須恵器	蓋B	14	—		3/4	—	ロクロナデ、回転ケズリ、沈線	ロクロナデ	368住4	368住384・397・399・402・409
117	368住	須恵器	蓋B		—			—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	368住5	368住380・388・390・401・407・410・411
118	368住	土師器	小型甕B		6.4			1/3	横ハケメ	工具ナデ	368住3	368住420
119	368住	土師器	甕B	19.6			1/7		斜～縦ハケメ	口縁ハケメ、工具ナデ	368住2	368住382
120	369住	須恵器	杯A	13.8			1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	369住7	368住381・369住437
121	369住	須恵器	杯B	12.4			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	369住8	369住436
122	369住	須恵器	杯B		11.6			1/2	ロクロナデ、底面ナデ、線刻	ロクロナデ	369住10	369住436
123	369住	須恵器	杯B	10.6	7.2	4.2	7/8	完	ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	369住5	369住431
124	369住	須恵器	杯B	12.3	9.1	3.6	1/2	1/2	ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	369住11	369住428・430・440
125	369住	須恵器	杯B	12.8	9.6	3.9	1/4	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	369住6	369住432
126	369住	須恵器	蓋B	15.8	—		1/8	—	ロクロナデ	ロクロナデ	369住4	369住444
127	369住	土師器	甕A	18.2			1/8		ヨコナデ、ハケメ、工具ナデ	ハケメ	369住2	369住440
128	369住	土師器	甕B						縦ハケメ、工具ナデ	工具ナデ	369住3	369住427・433・436・440
129	369住	土師器	甕B		9			4/5	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ	369住1	369住424・425・440
130	369住	須恵器	壺		9.4			1/3	ロクロナデ、回転糸切、胴部回転ケズリ	ロクロナデ	369住9	369住429
131	370住	黒色A	杯AⅠ	15.9	7.6	4.3	1/18	1/8	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	370住1	370住467
132	370住	須恵器	杯A		8.3			2/5	ロクロナデ、回転ヘラ切	ロクロナデ	370住2	370住457・487
133	370住	須恵器	蓋B	15.4	—	3.6	1/8	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	370住3	370住463・492
134	370住	須恵器	蓋B	16.3	—	3.1	3/4	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	370住4	370住460・474・481・486
135	370住	土師器	甕	25			1/16		縦ハケメのちロクロナデ	斜ハケメのちナデ	370住8	370住461
136	370住	土師器	甕	22.8			1/8		口縁ヨコナデ、胴部タタキのち縦工具ナデ	全面的にカキメ	370住9	370住465・464・468・475・483・484・490
137	370住	須恵器	甕A	22.4			3/4		ロクロナデ、胴部タタキ	ロクロナデ、胴部当具痕	370住5	370住449・450・451・452・455・478
138	370住	須恵器	甕E	33.4			1/4		ロクロナデ、胴部タタキ	ロクロナデ	370住6	370住462・470
139	370住	須恵器	甕		14			1/21	タタキ	当具痕ナデ消、工具ナデ	370住7	370住482
140	371住	土師器	甕A	11.6			1/14		ヨコナデ、ナデ	工具ナデ	371住1	371住497
141	371住	土師器	甕A		9			1/3	ナデ、底面木葉圧痕	ナデ摩滅	371住2	371住500
142	372住	土師器	杯	11.6	—	4.8	5/6	5/6	ヨコナデ、手持ケズリ	ヨコナデ、ナデ	372住1	372住538・539
144	372住	土師器	杯	12.8	—		1/8	一部	ヨコナデ、手持ケズリ	ヨコナデ、ナデ	372住3	372住546
143	372住	土師器	杯	13.6	—	4.9	1/2	5/6	ヨコナデ、ミガキ、手持ケズリ	細かいミガキ	372住2	372住515・519・522
145	372住	土師器	杯	12.6	—		1/8		ヨコナデ、手持ケズリ	ミガキのち黒色処理	372住6	372住539・546
146	372住	土師器	杯	13.6	—		1/14		ヨコナデ、手持ケズリ	ミガキのち黒色処理	372住5	372住535
147	372住	土師器	杯	12.4	—		1/12		ヨコナデ、手持ケズリ	ミガキのち黒色処理	372住4	372住545
148	372住	土師器	鉢	25	—		1/4		ヨコナデ、工具ナデ、手持ケズリ	細かいミガキ	372住9	372住514
149	372住	須恵器	杯蓋	12.1	—	4.2	一部		ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	372住13	372住513
150	372住	土師器	甕	14.8			1/6		ヨコナデ、工具ナデ	工具ナデ	372住8	372住539・27土778
151	372住	土師器	鉢	19.6			1/4		ヨコナデ、ケズリのちミガキ	ミガキのち黒色処理	372住7	372住531・542・546
152	372住	土師器	壺	13.4			一部		ヨコナデ、縦ミガキ	横ミガキ	372住11	372住525・527・539・543・545
153	372住	土師器	壺	27.6			一部		ヨコナデ、工具ナデ、ミガキ	工具ナデ、横ミガキ	372住10	372住525
154	372住	土師器	壺	20			一部		ヨコナデ	横ミガキ	372住12	372住531・539
155	372住	須恵器	甕	22.2			1/8		ロクロナデ、胴部タタキ	ロクロナデ、同心円紋当具痕	372住14	372住525・530・534・537・27土764・765・767・769・770・771・781・783
156	373住	土師器	杯	17	12.6	2.6	5/12	1/2	ヨコナデ、底面手持ケズリ	ヨコナデ、斜放射暗文	373住1	372住531・373住650・654・666・669・679・681・690・691
157	373住	土師器	杯	12.2			一部		ヨコナデ	ミガキのち黒色処理	373住2	373住653
158	373住	須恵器	杯蓋	10.6	—		1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	373住28	373住658
159	373住	須恵器	杯蓋	12			1/6		ロクロナデ、天井回転ケズリ	ロクロナデ	373住27	373住561
160	373住	須恵器	杯身						ロクロナデ	ロクロナデ	373住26	373住667・668
161	373住	須恵器	杯A	14.6	7	4.7	2/3	完	ロクロナデ、ヘラ切のち手持ケズリ	ロクロナデ	373住32	373住605・655

No.	地点	種別	器種 器形	寸法			残存度		成形・調整等		実測 番号	注記
				口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面		
162	373住	須恵器	杯A	13.8	6.6	4.1	1/4	1/2	ロクロナデ、底部工具ナデ	ロクロナデ	373住39	373住663
163	373住	須恵器	杯A	12.4	7.2	3.7	1/8	1/2	ロクロナデ、底部手持ケズリ	ロクロナデ	373住31	373住684
164	373住	須恵器	杯A		10.8			1/5	ロクロナデ、底部工具ナデ	ロクロナデ	373住29	373住646
165	373住	須恵器	杯A	11.6	7.2	2.2	1/8	一部	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	373住46	373住669
166	373住	須恵器	杯A		9			1/4	ロクロナデ、底部工具ナデ、ヘラ記号	ロクロナデ	373住47	373住662
167	373住	須恵器	杯A	13.6	7.6	3.4	5/12	1/2	ロクロナデ、回転ヘラ切のちナデ	ロクロナデ	373住36	373住623
168	373住	須恵器	杯A	14.2			1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	373住44	373住662・671
169	373住	須恵器	杯A	13.6			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	373住42	373住653・663
170	373住	須恵器	杯A	14			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	373住41	373住684・685
171	373住	須恵器	杯A	13.6	6.2	3.6	1/8	1/3	ロクロナデ、回転ヘラ切のちナデ	ロクロナデ	373住37	373住608・657
172	373住	須恵器	杯A	13.8	8.6	4.1	完	完	ロクロナデ、ヘラ切のち工具ナデ	ロクロナデ	373住33	373住584・600・655
173	373住	須恵器	杯A	13.6	6.3	3.7	1/4	完	ロクロナデ、回転ヘラ切のちナデ	ロクロナデ	373住35	373住566・655・688・689
174	373住	須恵器	杯A	13.2	6.6	4.4	1/4	完	ロクロナデ、ヘラ切のち工具ナデ	ロクロナデ	373住34	373住557
175	373住	須恵器	杯A	12.6	6.4	4.2	1/5	1/3	ロクロナデ、底面工具ナデ	ロクロナデ	373住38	373住662
176	373住	須恵器	杯A	13.4			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	373住43	373住666
177	373住	須恵器	杯A	14	7.6	4.2	一部	1/5	ロクロナデ、底面工具ナデ	ロクロナデ	373住40	373住688
178	373住	須恵器	杯A		9			1/3	ロクロナデ、ヘラ切のち手持ケズリ	ロクロナデ	373住30	373住666
179	373住	須恵器	杯	14			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	373住45	373住689
180	373住	須恵器	杯B	17.6			1/10		ロクロナデ	ロクロナデ	373住55	373住690
181	373住	須恵器	杯B	17.4	12	6.8	2/5	2/3	ロクロナデ、底面回転ケズリ・ヘラ記号	ロクロナデ	373住50	373住553
182	373住	須恵器	杯B	11.6	8.6	3.25	一部	1/2	ロクロナデ、底面回転ケズリ	ロクロナデ	373住56	373住653・656・687
183	373住	須恵器	杯B	15.1	10.7	4.05	7/8	完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住48	373住615
184	373住	須恵器	杯B	15.6	11	3.9	一部	完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住52	373住577・666
185	373住	須恵器	杯B	14.8	11.0	4	1/8	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住54	373住658
186	373住	須恵器	杯B	14.4	10.6	3.9	1/2	1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住53	373住634・665
187	373住	須恵器	杯B	15.5	11.6	3.7	一部	7/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住57	373住662・671・672
188	373住	須恵器	杯B	15	10.8	4.1	1/3	完	ロクロナデ、回転ケズリのち工具ナデ	ロクロナデ	373住51	373住562・662・665
189	373住	須恵器	杯B	14.1	10.6	4.15	1/2	完	ロクロナデ、回転ケズリのち工具ナデ	ロクロナデ	373住49	373住564・647・655・662
190	373住	須恵器	蓋	17.4	6.4	2.5	1/3	—	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	373住22	373住560
191	373住	須恵器	蓋B	16.2	—	3.4	3/8	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住25	373住573・574・653
192	373住	須恵器	蓋B	16.2	—	3.8	5/8	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住23	373住587・602・626・643・648・653・654・663・680
193	373住	須恵器	蓋B	16.2	—	3.2	1/2	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住24	373住641
194	373住	須恵器	無頸壺	11			一部		ロクロナデ	ロクロナデ	373住58	373住567
195	373住	土師器	小型甕	10.2			1/6		ヨコナデ、横ケズリ	ヨコナデ、横ハケメ	373住4	373住607
196	373住	土師器	小型甕		8			1/3	ナデ摩滅	工具ナデ	373住7	373住662・665
197	373住	土師器	甕		8.6			4/5	ハケメ、底面ハケメ	ハケメ	373住16	373住688
198	373住	土師器	小型甕	14.6			1/10		ヨコナデ	ヨコナデ、カキメ？	373住5	373住655
199	373住	土師器	甕A	13.6			1/6		ヨコナデ、工具ナデ	指頭圧痕、工具ナデ	373住6	373住658・665
200	373住	土師器	甕A	15.4			1/6		ヨコナデ、縦横ハケメ	カキメ、工具ナデ	373住19	373住638
201	373住	土師器	小型甕D	14.6			1/4		ロクロナデ、カキメ	ハケメ	373住3	373住656
202	373住	土師器	小型甕D	18.2			1/2		ハケメのちカキメ	カキメ	373住8	373住660・662・665・680・681
203	373住	土師器	甕B	19.4			一部		ヨコナデ、縦ハケメ	口縁横ハケメ、工具ナデ	373住20	373住667
204	373住	土師器	甕A	23.4			1/6		ヨコナデ	ヨコナデ	373住21	373住647
205	373住	土師器	甕A	23.6			1/6		ヨコナデ、縦ハケメ	ヨコナデ、工具ナデ	373住17	373住678・691
206	373住	土師器	甕G	23.6			1/10		ヨコナデ、口縁端部に沈線	ヨコナデ、工具ナデ	373住18	373住609
207	373住	土師器	甕B	21.6			1/6		ヨコナデ、縦ハケメ	ヨコナデ、横工具ナデ	373住10	373住597
208	373住	土師器	甕B	20.2			1/5		ヨコナデ、縦ハケメ	ヨコナデ、横工具ナデ	373住11	373住596・644
209	373住	土師器	甕B	19.8			1/2		ヨコナデ、縦ハケメ	ヨコナデ、横工具ナデ、縦指ナデ	373住9	373住566・580・583・589・653・690
210	373住	土師器	甕B		7.4			1/3	縦ハケメ、下端部横ハケメ、底面ナデ	横～斜工具ナデ	373住14	373住548・554・556・613・652・660・661・677
211	373住	土師器	甕B		8.8			一部	縦ハケメ	横～斜工具ナデ	373住13	373住581・627・644
212	373住	土師器	甕G		11			1/2	縦ハケメ、底面ハケメ	縦ハケメ	373住15	373住655・665・681・690・691
213	373住	土師器	甕G		13.2			完	縦ハケメ、底面ナデ	縦ハケメ	373住12	373住547・580・592・606・612・614・619・648・650・665・669・679・680・691
214	373住	須恵器	甕C	31.6					ヨコナデ、タタキ	ヨコナデ、工具ナデ	373住60	373住621
215	373住	須恵器	甕E	31.8			1/6		ヨコナデ、タタキ	ヨコナデ、工具ナデ	373住59	373住595・647
216	374住	黒色A	杯A	12.4	6.2	3.6	1/6	1/8	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	374住1	374住693・714
217	374住	黒色A	椀		6.6			1/4	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	374住2	374住714
218	374住	須恵器	杯A	12.8			1/10		ロクロナデ	ロクロナデ	374住6	374住712
219	374住	須恵器	皿B？	12.2			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	374住7	374住712
220	374住	土師器	甕B	18.8			1/6		縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ	374住3	374住710・711
221	374住	土師器	甕B		9			1/4	縦ハケメ、底面ナデ	横ハケメ、工具ナデ	374住4	374住713
222	374住	土師器	甕B		9			1/4	縦ハケメ、底面ナデ	縦指ナデ、工具ナデ	374住5	374住712

No.	地点	種別	器種 器形	寸法			残存度		成形・調整等		実測番号	注記
				口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面		
223	4土	黒色A	杯AⅡ	11.7	4.7	3.45	1/5	1/4	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	4土1	4土718
224	4土	黒色A	杯AⅠ	15			1/6		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	4土2	4土717
225	4土	黒色A	杯AⅠ	15.5			1/8		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	4土3	4土720
226	4土	土師器	高杯						ナデ	脚内工具ナデ	4土5	4土717
227	4土	土師器	小型甕D		8.6			1/4	カキメ、回転糸切	ロクロナデ	4土4	4土722
228	9土	須恵器	杯A		4.9			完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	9土1	9土745
229	9土	須恵器	杯B	12.7	8.9	3.35		1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	9土2	9土746
230	9土	土師器	小型甕D	12.1			1/8		ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ	9土3	9土745
231	9土	土師器	甕B		10			1/12	縦ハケメ、底面ナデ	摩滅不明	9土4	9土727・733・735・745
232	24土	須恵器	杯A	12.6			1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	24土2	24土758
233	24土	須恵器	杯A	12.7	8.25	4.7	完	完	ロクロナデ、静止ヘラ切のち繊維状工具ナデ	ロクロナデ	24土1	24土754
234	24土	須恵器	杯A	14	8.55	3.75	2/3	5/6	ロクロナデ、回転ケズリ、ヘラ記号	ロクロナデ	24土3	24土755・757
235	27土	須恵器	杯蓋	11.7	—	3.7	1/3	—	ロクロナデ、ヘラ切未調整	ロクロナデ	27土3	372住536・27土774・779
236	27土	土師器	鉢	15	8.9	12.5	1/3	完	胴～底部ケズリ、胴下部縦ミガキ	工具ナデのち横ミガキ	27土1	27土780・782
237	27土	土師器	甕	14.55	11	15.5	1/2	完	ヨコナデ、縦ハケメ、底部ケズリ	横ハケメ、横工具ナデ	27土2	27土772・773
238	3溝	土師器	高杯						縦ミガキ	しぼり痕、横ケズリ	3溝1	3溝797
239	6溝	土師器	杯	10.5			2/3		横ミガキのち黒色処理	横ミガキのち黒色処理	6溝1	805・815・818
240	6溝	土師器	杯		5.5			9/10	ヨコナデ、工具ナデ	横ミガキのち黒色処理	6溝2	815
241	6溝	土師器	椀	10			1/10		ヨコナデ	ナデ	6溝4	810
242	6溝	土師器	椀	11.8			1/6		ヨコナデ	ナデ	6溝3	807
243	6溝	須恵器	杯B	14			一部		ロクロナデ	ロクロナデ	6溝9	813
244	6溝	須恵器	杯B	15.2			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	6溝10	813
245	6溝	須恵器	杯B	15.2			1/4		ロクロナデ	ロクロナデ	6溝11	807・812
246	6溝	須恵器	高杯		9.8			1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	6溝12	809
247	6溝	土師器	小型甕C	12.2			1/8		口縁折返、工具ナデ	工具ナデ	6溝7	803
248	6溝	土師器	甕G	22			1/6		ヨコナデ、化粧粘土塗布	ヨコナデ	6溝6	813
249	6溝	土師器	甕A	24			1/10		ヨコナデ、カキメ	ヨコナデ、カキメ	6溝8	810
250	6溝	土師器	甕G		15.4			1/4	工具ナデ	工具ナデ	6溝5	807
251	7溝	須恵器	甕E	11.3	5.6	4.8	7/8	完	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ	7溝1	821
252	8溝	須恵器	杯A	12			1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	8溝2	825
253	8溝	須恵器	鉢	12.8			1/5		ロクロナデ	ロクロナデ	8溝1	823
254	石積1	土師器	坩？	7.4			1/4		ヨコナデ、化粧粘土塗布	ヨコナデ、口縁端内削ぎ、化粧粘土塗布	石積1-1	828
255	東包含	須恵器	杯A	13.4	6.5	4.15	1/16	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	東包1	835
256	東検出	須恵器	杯A		9.6			1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	東検1	845
257	東検出	土師器	甕C	21			1/6		ヨコナデ、横ケズリ	ナデ	東検2	845
258	東検出	須恵器	甕A	43			1/14		ロクロナデ、タタキ、工具ナデ	ロクロナデ	東検3	843
259	西検出	土師器	杯	10.6			1/8		ヨコナデ、横ミガキ	ヨコナデ、横ミガキ	西検1	868
260	西検出	須恵器	杯B		11.5			1/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	西検2	861
261	西検出	須恵器	蓋B	18	—	3.4	1/4	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	西検3	867
262	西検出	須恵器	鉢A		10			1/4	ロクロナデ、胴部回転ケズリ、底面ナデ	ロクロナデ	西検4	864

※種別の略称は「黒色A」が黒色土器A、「軟須恵」が軟質須恵器を指す。

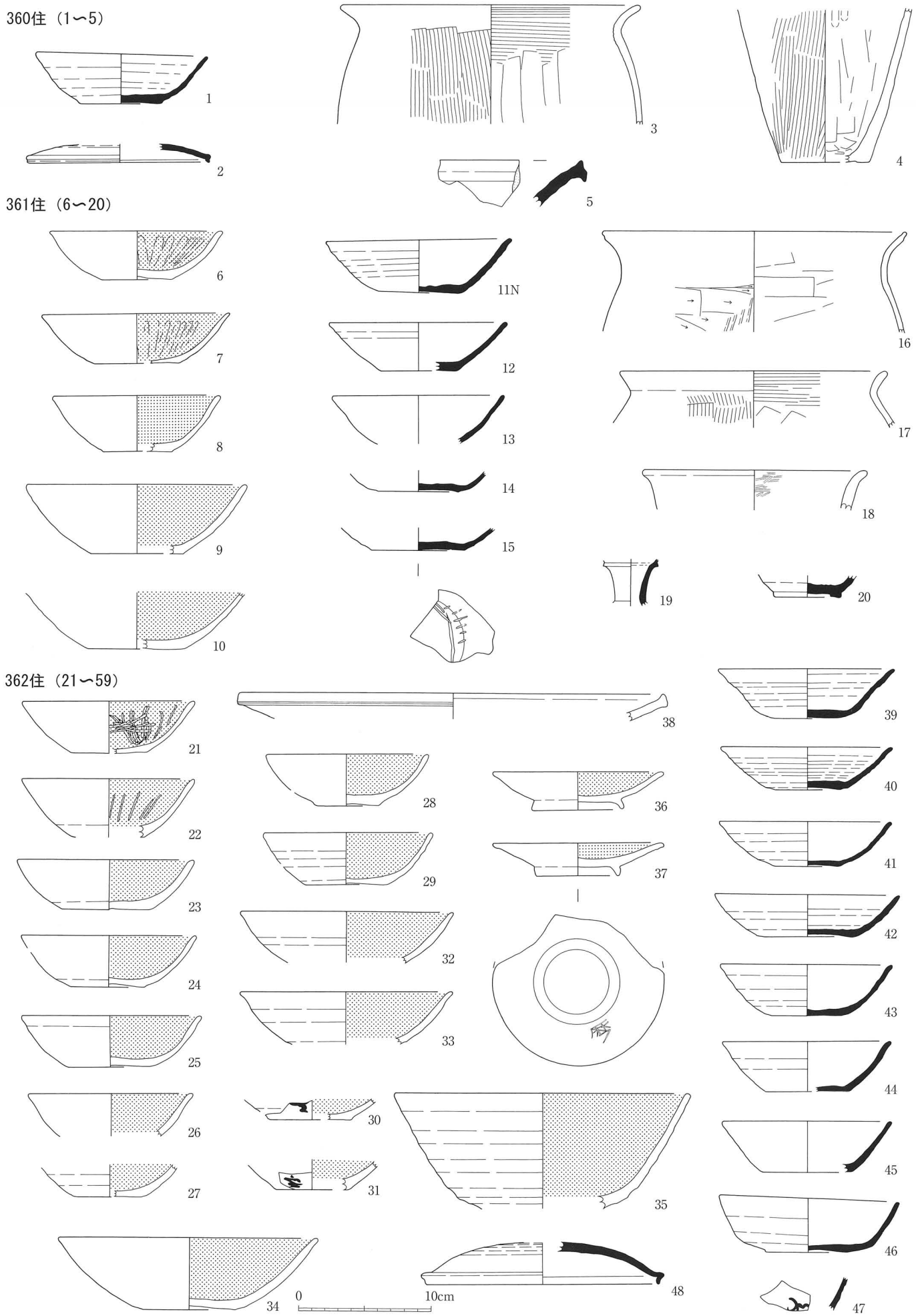
第6表 石製品観察表

No.	出土地点	器種	石材	寸法（mm）			重量(g)	欠損状況	備考
				長さ	幅	厚さ			
1	364住床面	凹・磨石	砂岩	154.5	78.0	29.5	(541.0)	ほぼ完形	両面に凹、右側面が研磨。
2	357住覆土	砥石	砂岩	(109.0)	63.0	26.0	(316.5)	下半折損	研磨面2面、裏面に線状痕あり。
3	包含層	剥片	チャート	17.2	9.4	3.3	0.5		

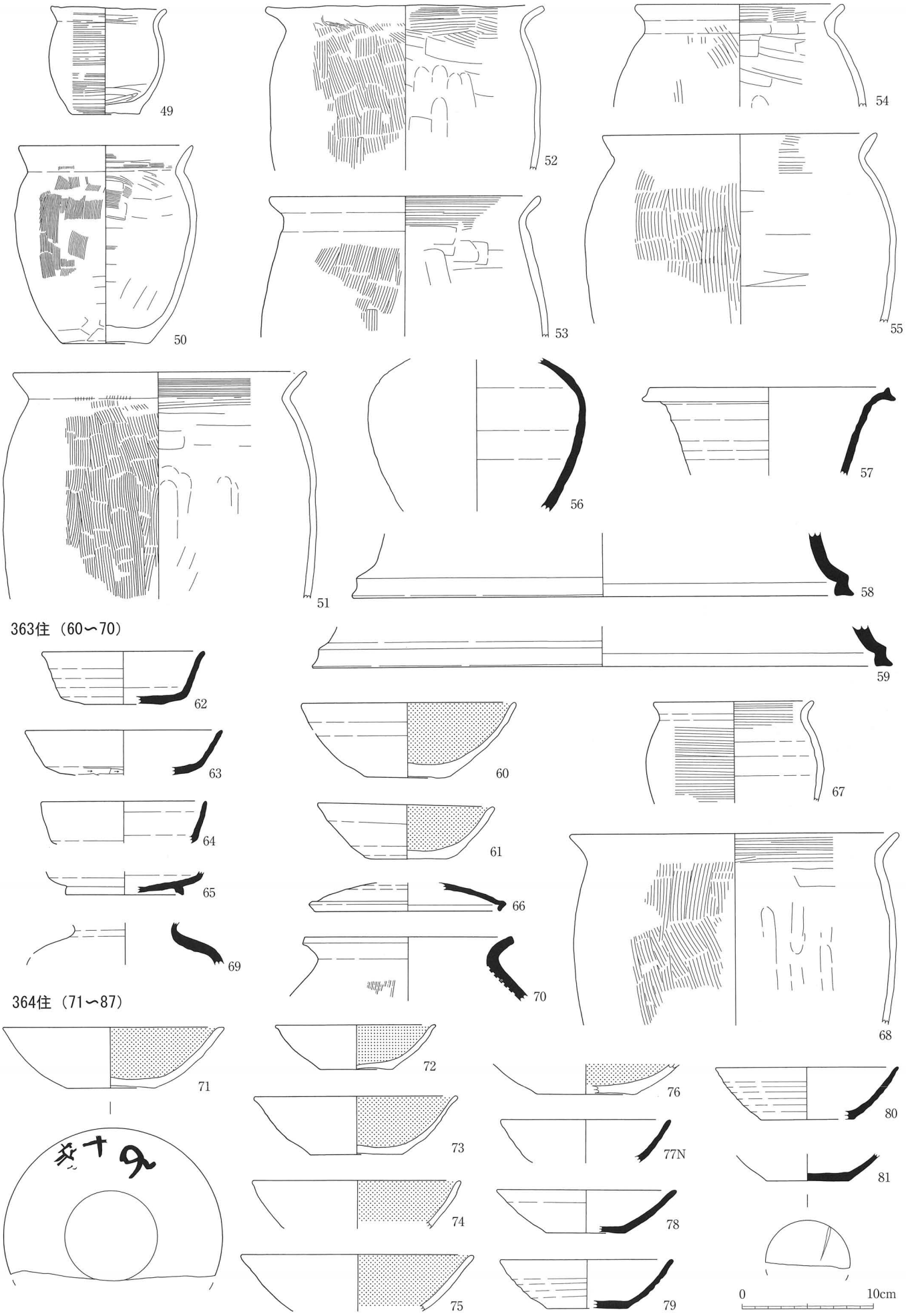
※寸法および重量で、欠損が認められるものを（）とし、残存値を表す。

第7表 鉄製品観察表

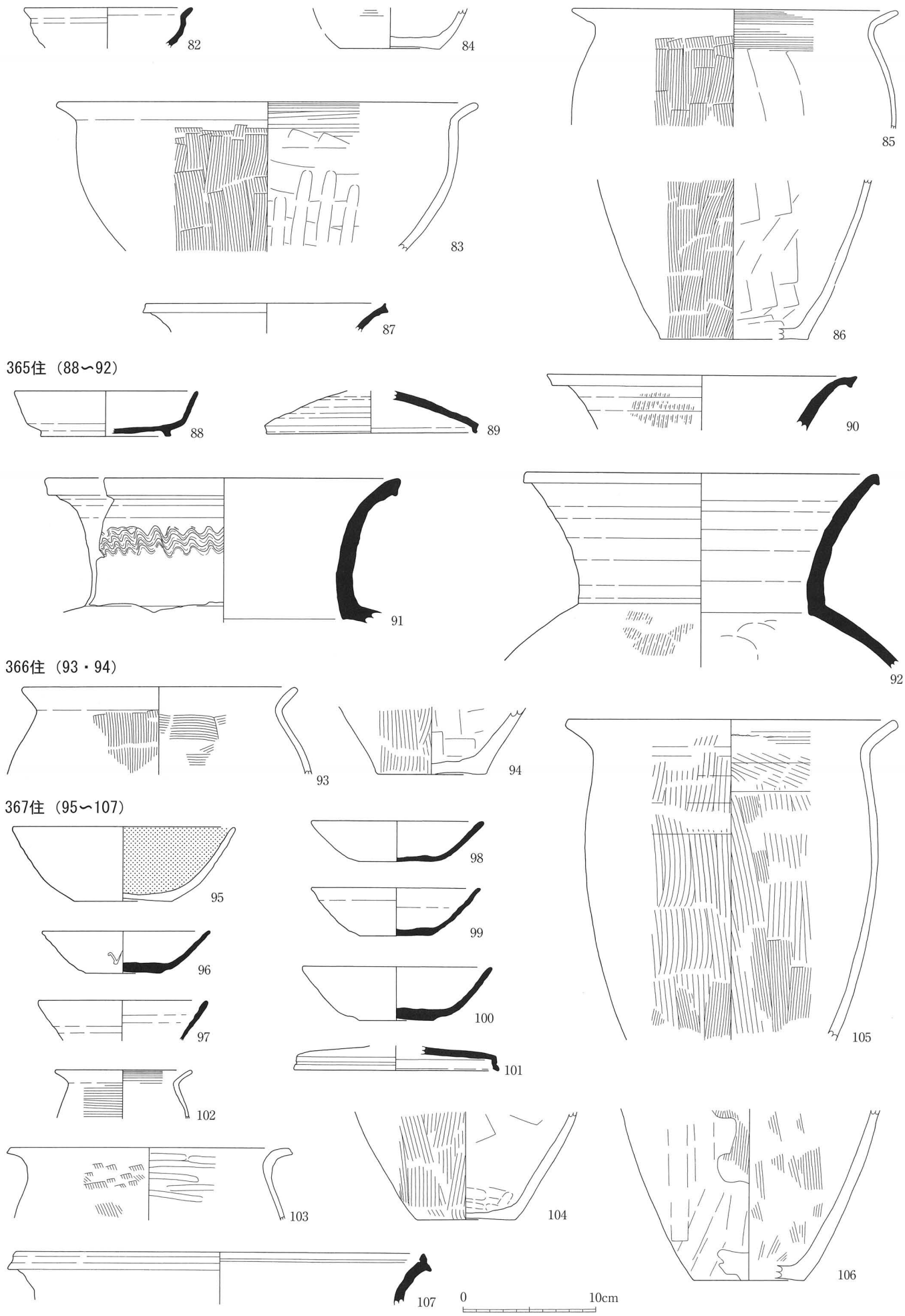
No.	出土地点	器種	寸法（mm）			重量(g)	備考	ID
			最大長	最大幅	最大厚			
1	373住	刀子	143.4	13.2	5.6	11.7	床面出土。	6
2	373住	刀子	94.8	12.4	5.7	7.2	床面出土。	5
3	362住か	ヤリガンナ	73.0	17.2	6.0	12.7	362住を切る撹乱出土。	2
	362住か	不明	22.0	10.2	9.5	2.4		3
	363住	鉄塊	38.8	36.9	31.2	92.2	覆土上層より出土。	4



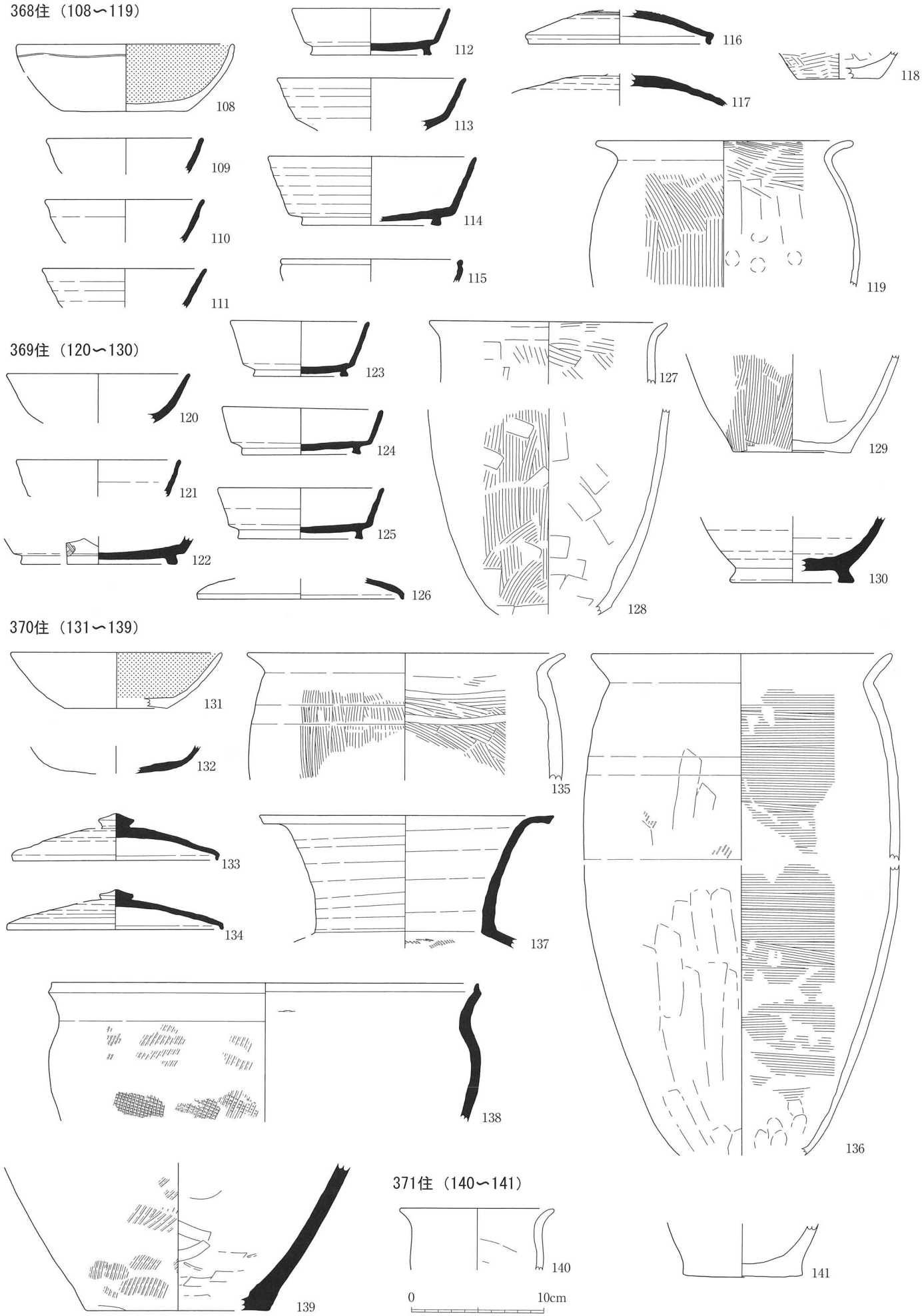
第15図　遺物（1）


49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
363住（60～70）
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
364住（71～87）
71
72
73
74
75
76
77N
78
79
80
81
0
10cm

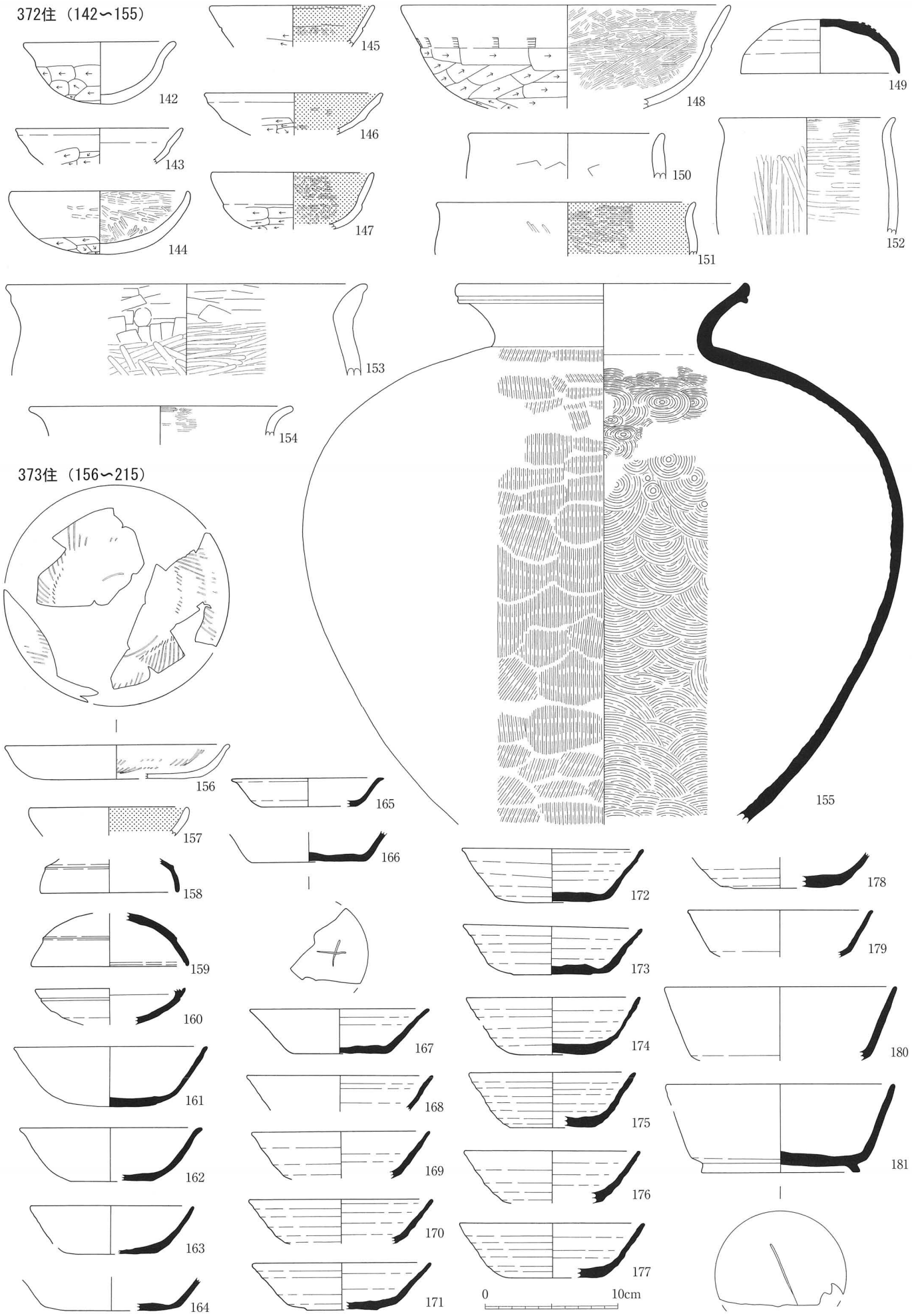
第16図　遺物（2）


82
84
85
83
87
86
365住（88〜92）
88
89
90
91
92
366住（93・94）
93
94
367住（95〜107）
95
98
96
99
97
100
101
105
102
103
104
106
107
0
10cm

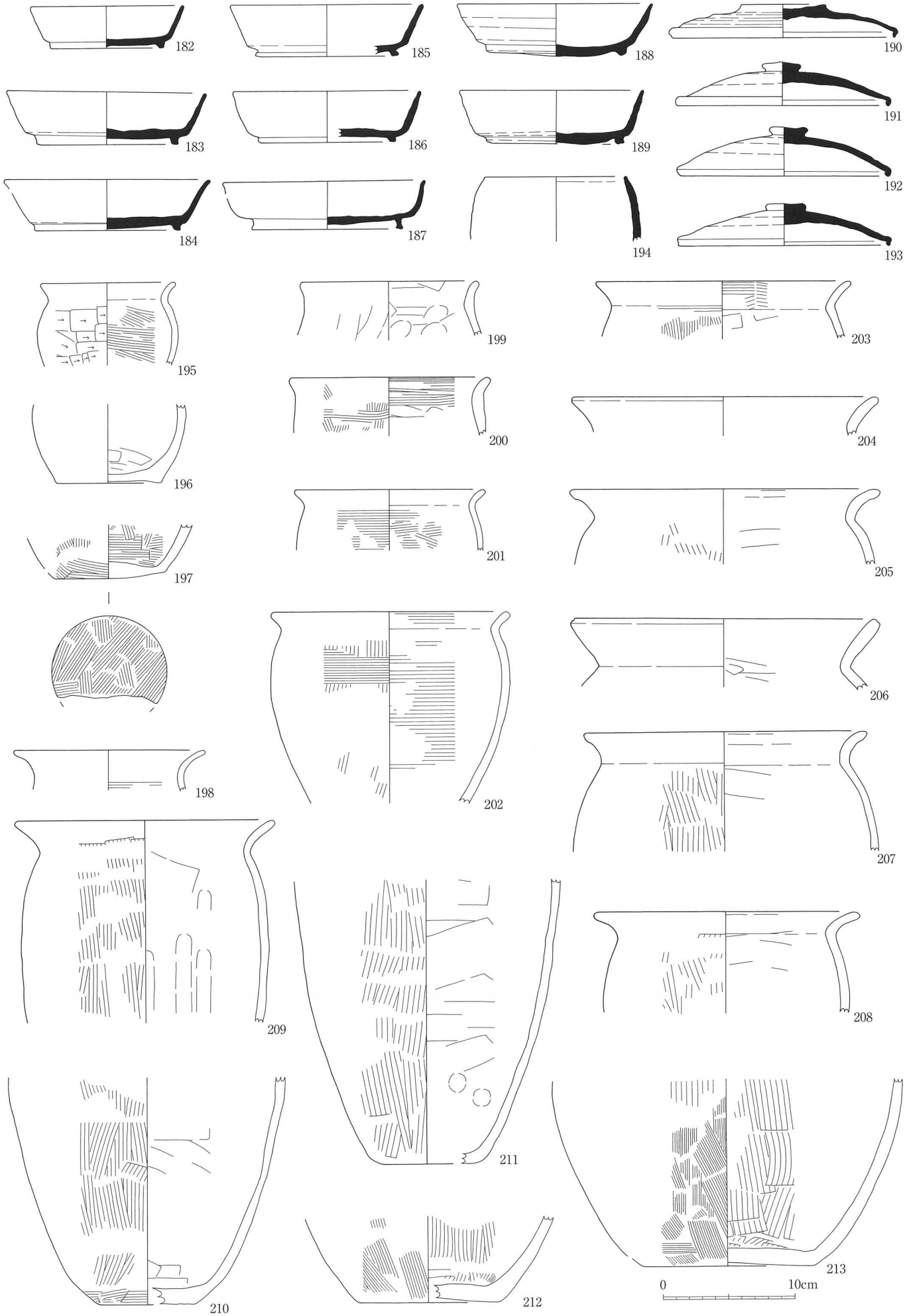
第17図　遺物（3）


368住（108～119）
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
369住（120～130）
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
370住（131～139）
131
132
133
134
135
136
137
138
139
371住（140～141）
140
141
0
10cm

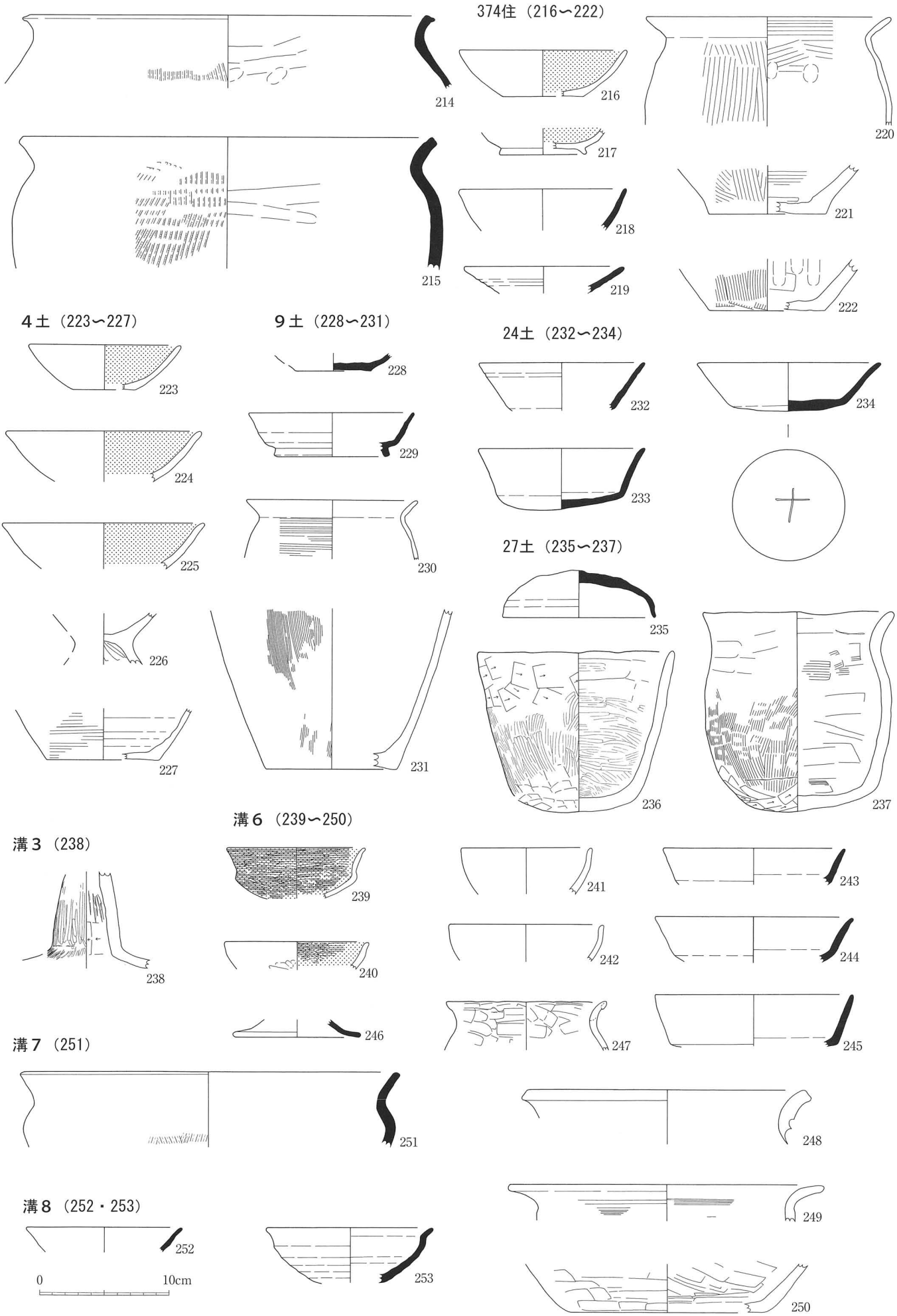
第18図　遺物（4）



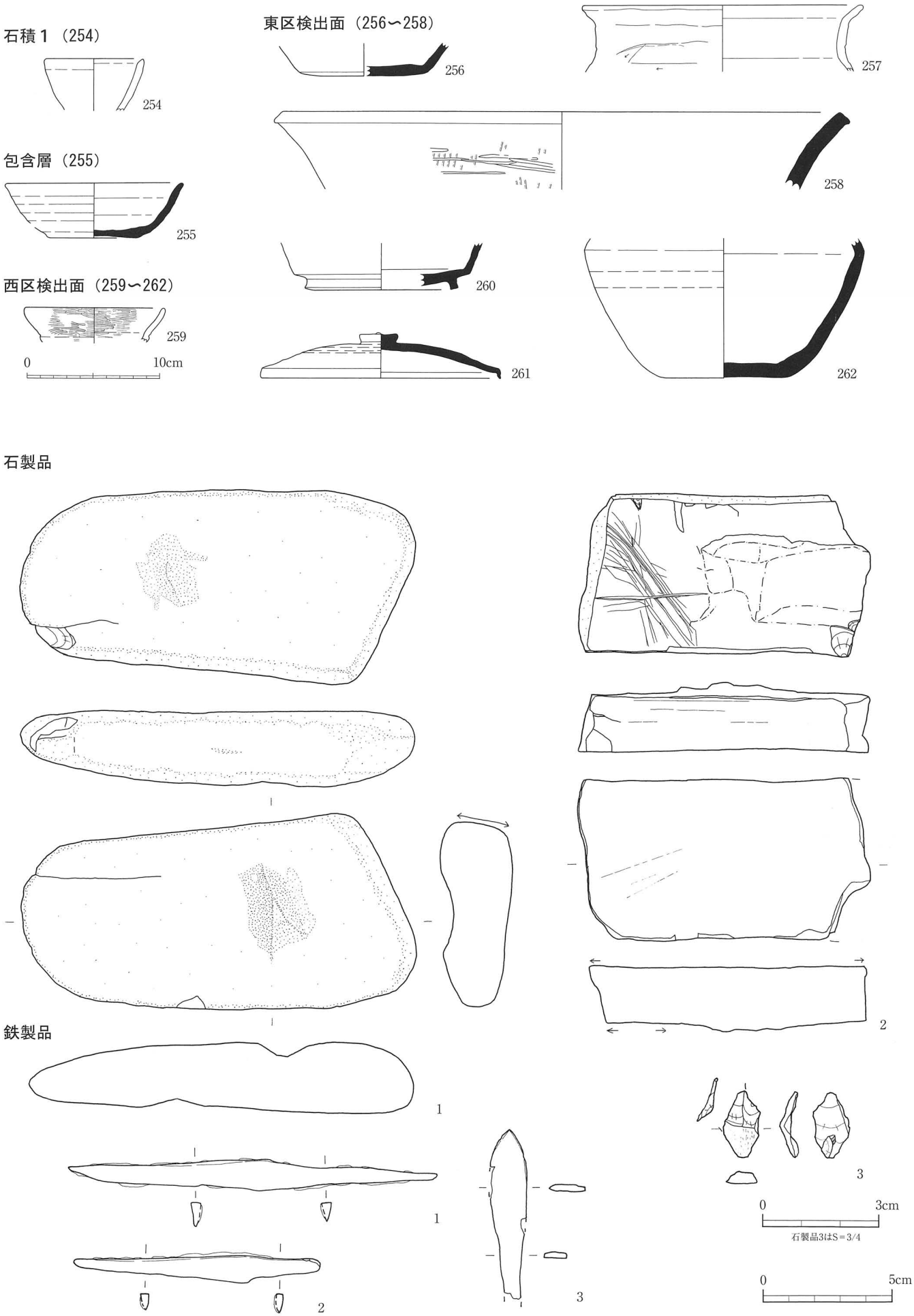
第19図　遺物（5）


182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
0
10cm

第20図　遺物（6）


374住（216〜222）
214
216
220
217
221
215
218
219
222
4土（223〜227）
9土（228〜231）
24土（232〜234）
223
228
232
234
229
224
233
225
230
27土（235〜237）
235
226
236
237
231
227
溝6（239〜250）
溝3（238）
239
241
243
238
240
242
244
246
247
245
溝7（251）
251
248
溝8（252・253）
249
252
0
10cm
253
250

第21図　遺物（7）


石積１（254）
254
包含層（255）
255
西区検出面（259～262）
259
0
10cm
東区検出面（256～258）
256
257
258
260
261
262
石製品
2
鉄製品
1
1
2
3
3
0
3cm
石製品3はS＝3/4
0
5cm

第22図　遺物（8）

第Ⅳ章　総括

1　集落の変遷

今回の調査地点では、古墳時代後期から平安時代前期の集落を確認した。現代の撹乱により遺跡の大部分が破壊を受けており往時の状況を必ずしも明らかにはできないが、周辺の調査地点での成果を加え、調査成果を簡単にまとめておきたい。

確認できた竪穴住居址は古墳時代後期が２軒、奈良時代が４軒、奈良時代末～平安時代前期が９軒の計15軒である。全体的な傾向として、古墳時代後期（７世紀後半）は東区の溝３より西側、奈良時代（３～４期）も東区の西半から西区にかけて分布する。大型住居址の373住は西区の北西隅に位置する。東海産の須恵器や畿内系暗文杯などの搬入品が多量に出土し、床面積も61㎡以上とその他の住居址とは異なり集落内でも中核的な位置を占めていたと推測される。周囲には同時期の住居址や掘立柱建物址も確認できず、７～８世紀代に機能していたと考えられる溝６・７がその他の住居址と区画していた可能性がある。平安時代前期の９軒は東区東半に分布し、遺構も重複しながら集中している。今回の調査地から北東にかけて集落が広がっていたことが明らかである。主に５～７期の８世紀末から９世紀後半が主体であるが、住居の構築場所に規制があったのかもしれない。

2　石積遺構１

東区北東隅から拡張区にかけて検出された石積遺構１は、現代の撹乱や自然流路である溝２により破壊され、調査区外に続き全形がわからないなど、明らかにできなかった点が多い。遺構としての問題点は、断ち割り断面で確認したところ石積が整然としていないこと、溝２のラインと一致する箇所が多いことがあげられる。また、北に位置する平安時代前期の374住との直接的な切り合い関係は判然としない。374住は石積１の推定範囲内に位置すると考えられるが、検出レベルでは石積１の最も遺存状態が良い地点より約0.6m低く、374住がつくられた時期に石積１が埋没していたものなのか、直前で角を持ち東に曲がるものなのかは現段階では判断できない。

付近一帯の自然流路は南から北に向かって流れており、自然堆積物と考えた場合、流路方向に直交するように東西方向に伸びる南辺が不自然であり、ほぼ直角に曲がることからも遺構として判断した。石積を覆うように粘質土層が堆積し、わずかであるが古墳時代前期の土器が出土することなどから、奈良・平安時代より古い遺構である可能性がある。

今後、類例の増加や周辺の調査によって性格・時期の特定をしていきたい。

3　出川南遺跡における集落の展開

本遺跡はこれまでに14次にわたる発掘調査が実施されている　。調査地点はＪＲ篠ノ井線より東側と遺跡の北側、さらに今回の調査地点を含む南西部の３群に大きく分けることができる。本書では最もまとまった調査が行われている南西部を中心に、竪穴住居址の分布から集落の展開を簡単にまとめておきたい。

南西部では遺物集中などで古墳時代前～中期の遺物も出土しているが、竪穴住居址や掘立柱建物址などの明確な遺構は確認されていない。そのため、第23～25図ではまとまった遺構が確認できている古墳時代後期から平安時代前期までの限られた時期を対象としている。

まず、本遺跡で確認されている最も古い時代は弥生時代後期前半である。１次で１軒、６次で３軒、11次で１軒の住居址が確認されている。いずれもＪＲ篠ノ井線より東の調査地で、地質学的な所見によれば、この一帯は田川の形成した基盤上にのっているようである。１次では、方形周溝墓の可能性もある土坑も確認されている。

古墳時代前期は、１次で住居址が１軒、９次で遺物集中出土地点が２カ所、４次の東半部でも遺物が少量確認されている。古墳時代中期は４次で平田里１～３号古墳、７・８次では遺物集中出土地点が確認されているが、同時期の住居址は確認されていない。

古墳後期（第23図）になると１・10・11次を除く、ほぼ調査地点全域において住居址が確認されるようになり、出

川南遺跡に本格的な集落が展開する時期である。中でも４次では113軒の住居址が確認され、一帯に大規模な集落が展開していることが明らかになっている。これらの調査成果から６世紀後半から７世紀後半までの４段階に分けることができる。１段階である６世紀後半は住居数も少なく、４次では古墳群の西・南側に４軒、５次で１軒確認されている。２段階である６世紀末～７世紀前半になると13軒以上と集落規模が拡大する。４次では流路によって区画された中央に集中し、西側にも広がる。分布の集中は中央北東寄りにある。３段階の７世紀中葉は前段階と同じ分布であるが、再び東側にも住居址が分布する。住居軒数が18軒以上と増加傾向にあり、大型住居の周囲に小型住居が分布している。南側の調査区でも、12次で１軒、14次で１軒が確認されている。４段階の７世紀後半は４次で20軒以上と住居数が最も多く、調査区全域に広がる。また、５次で１軒、８次で３軒、12次で１軒、15次で２軒と南側の調査区にも住居址が一定数分布する。

古墳時代後期を通して分布の中心は４次調査区にあるが、２段階から集落が発展し始め、４段階以降は南側に集落域が拡大している。

奈良時代（第24図）になると８次で８軒、12次で８軒、15次で４軒確認されており、７次でも住居址が確認されている。４次調査地点では該期の住居址はなく、南に集落域が移動している。本遺跡の南側に位置する平田北遺跡でも該期の住居址がまとまって確認されており、これらが出川南遺跡の該期集落と一連のものであった可能性もある。

平安時代前期（第25図）は１次で１軒、４次で２軒、５次で５軒、７次で39軒、８次で14軒、10次で４軒、12次で２軒、15次で９軒が調査されている。奈良時代に比べると住居数は増加し、東側に移動しているようである。平田北遺跡でも住居址が６軒確認されているが、前時代ほどの遺構の集中はしていない。部分的な調査ではあるが、出川南遺跡同様に集落域の移動が推測される。中期は11次で１軒確認されているのみで様相は不明である。後期も１次で２軒、４次で１軒、11次で１軒が確認されているが、集落の中心は北東に移動していると推測される。中世は１次・11次の東側の調査地点で遺物が出土しているが、11次のものは溝出土である。また、11次では火葬施設が確認されており、ＪＲ 篠ノ井線より東側には集落が広がる可能性がある。

以上のように、古墳時代後期から平安時代前期までを中心に集落の展開を竪穴住居址の分布から推測した。本遺跡は洪水などの影響を受けやすかった土地であったことはこれまでの調査成果から明らかであり、集落域の移動と何らかの関係があったと考えられる。

また、本書作成中に第17次調査が実施されており、発掘調査・整理作業が進むにつれて集落の展開が明らかになっていくだろう。

最後に本調査の実施に際して多大なるご協力を頂いた長野県住宅部の皆様、並びに県営住宅南松本団地をはじめ地元関係者の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

関連報告書

1 松本市教育委員会 1987『松本市文化財調査報告№53 松本市出川南遺跡』

2 松本市教育委員会 1989『松本市文化財調査報告№75 松本市出川南Ｂ遺跡』

3 松本市教育委員会 1999『松本市文化財調査報告№139 長野県松本市 出川南遺跡Ⅴ』

4 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告№147 長野県松本市 出川南遺跡Ⅵ』

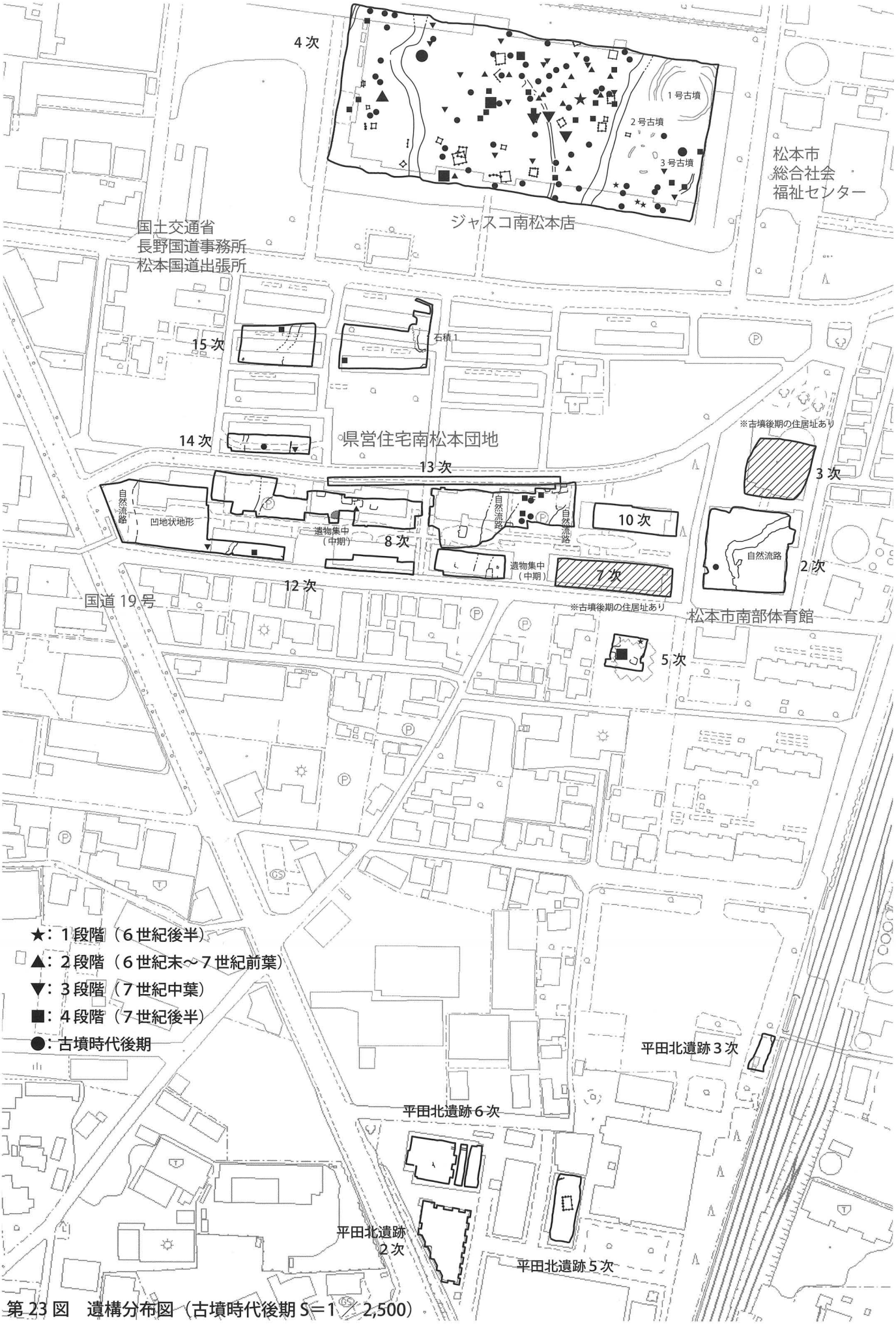
5 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告№157 長野県松本市 出川南遺跡Ⅷ』

6 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告№148 長野県松本市 出川南遺跡Ⅸ』

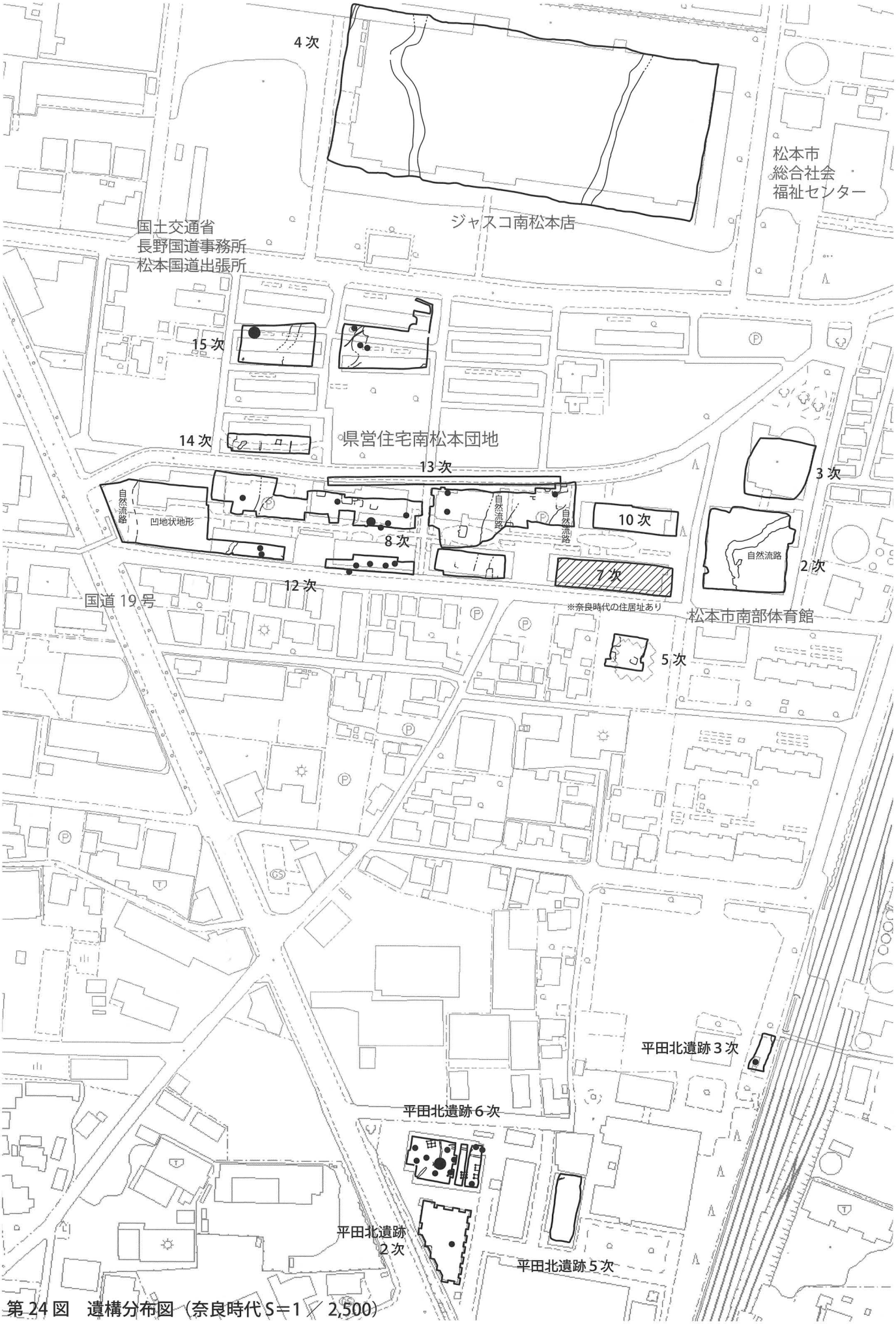
7 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告№161 長野県松本市 出川南遺跡 11』

8 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告№158 長野県松本市 出川南遺跡 12』

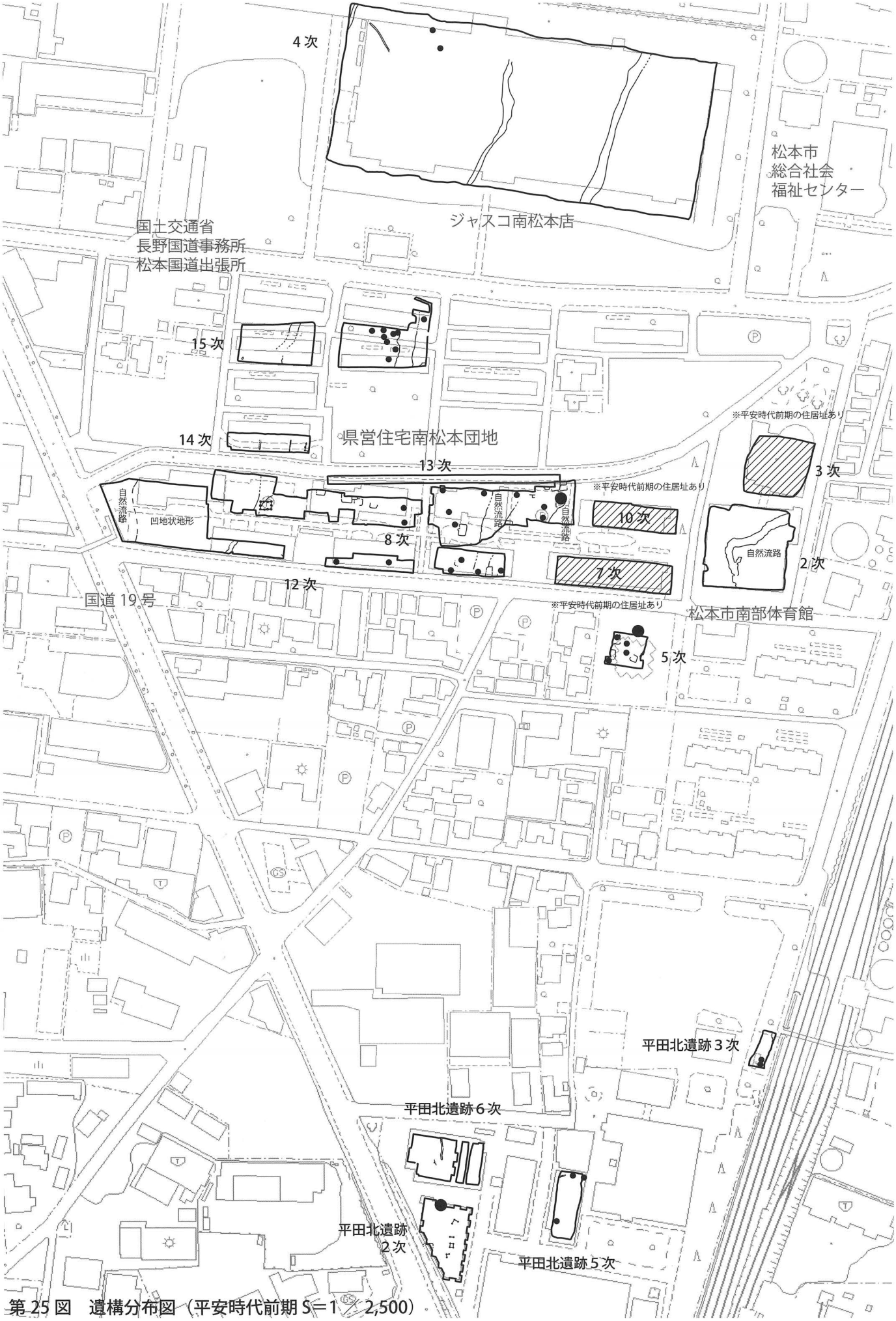
9 松本市教育委員会 2009『松本市文化財調査報告№198 長野県松本市 出川南遺跡 －第14次発掘調査報告書－』



第23図　遺構分布図（古墳時代後期 S＝1／2,500）



第24図　遺構分布図（奈良時代S＝1／2,500）



第25図　遺構分布図（平安時代前期 S＝1／2,500）

東区全景 完掘状況（西から）

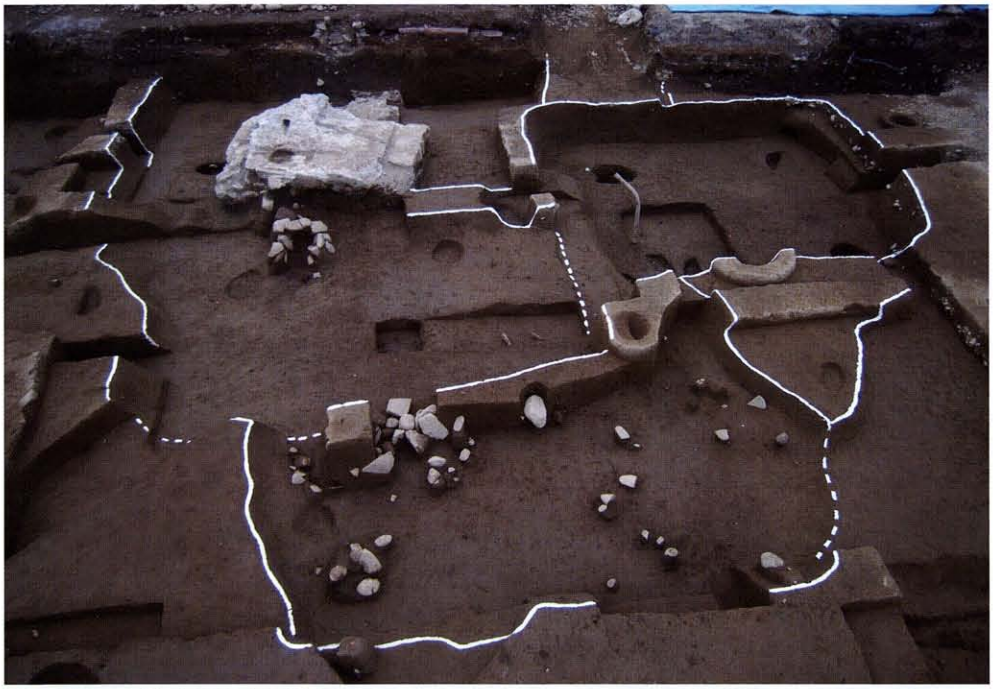
東区 竪穴住居址分布状況（北東から）

写真図版 2

西区全景 完掘状況
（東から）

西区南半 完掘状況
（北東から）

西区北半 完掘状況
（南東から）



東区 竪穴住居址重複状況
（南から）

362 住 遺物出土状況
（北から）

373 住 遺物出土状況
（南から）

361 住 カマド 遺物出土状況（西から）

362 住 カマド 遺物出土状況（東から）

362 住 カマド 検出状況（南から）

同左（東から）

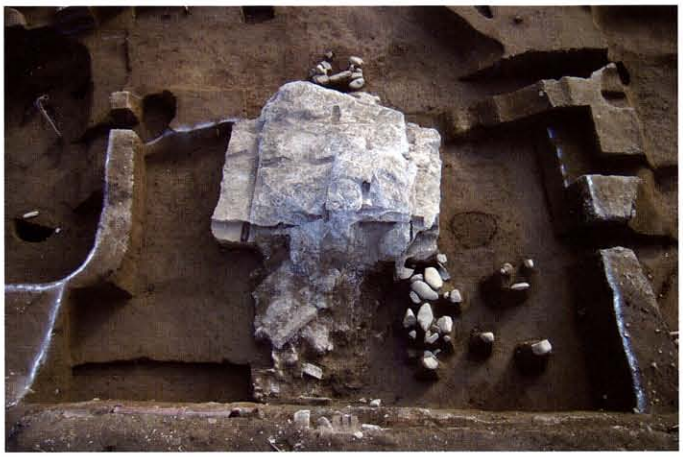
363 住 遺物出土状況（南から）

363 住 カマド・P 3 礫出土状況（西から）

364 住 遺物出土状況（東から）

364 住 カマド 検出状況（北から）

364 住 東カマド 完掘状況（西から）



365 住 礫検出状況（北から）

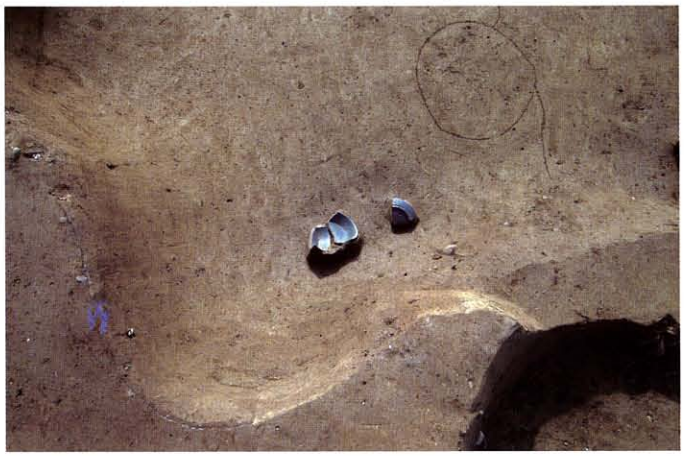
367 住 完掘状況（北から）

367 住 カマド 遺物出土状況（西から）

368 住 掘削状況（北西から）

368 住 カマド 遺物出土状況（南西から）

369 住 完掘状況（東から）



369 住 遺物出土状況（北から）

369 住 カマド 遺物出土状況（南から）

369 住 カマド 半掘 土層断面（東から）

370 住 遺物出土状況（西から）

370 住 土層断面 東区北壁

370 住 カマド 遺物出土状況（北から）

370 住 カマド 完掘状況（西から）

371 住 遺物出土状況（東から）

372 住 カマド 検出状況（西から）

372 住 カマド 掘削状況（西から）

372 住 カマド 煙道 掘削状況（西から）

372 住 カマド 煙道 礫検出状況（北から）

373 住 遺物出土状況（東から）

373 住 遺物出土状況（北東から）

373 住 174 出土状況（北から）

373 住 189 出土状況（東から）

373 住 183 出土状況（西から）

373 住 190 出土状況（南から）

373 住 193 出土状況（北から）

373 住 完掘状況（西から）

374 住 カマド 遺物出土状況（東から）

24 土 233 出土状況（南東から）

27 土 上層 遺物出土状況（西から）

27 土 237 出土状況（北から）

溝3 238 出土状況（南から）

溝1 完掘状況
（北東から）

溝6 礫出土状況
（南から）

溝6 土層断面 西区北壁

石積 検出状況（南西から）

石積 検出状況（北西から）

石積 検出状況（北から）

石積 基底面状況（北から）

石積 基底面 石列か（北から）

石積 断ち割り 石積状況（北から）

石積 下層 土器出土状況（南西から）

石積 断ち割り 土層断面（北から）

石積 石列 検出状況（東から）

石積 石列 立面（西から）

写真図版 12

東区北壁 土層断面

東区東壁 土層断面

石積・溝2 土層断面
（北から）

373 住 出土遺物

6

21

23

24

25

29

61

71

71 墨書

73

95

108

36

37

71 刻字

48

116

133

134

190

191

192

193

88

112

123

124

125

181

183

186

188

189

1

11

12

39

40

41

42

46

78

79

96

99

100

161

163

167

172

173

174

175

233

234

56

130

137

106

49

50

149

142

236

237

52
83
85
54
119
68
105
135
220
153
257
102
67
103
152
148
91
92
215
138
258
90
58
70
107
57
214
59

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし いでがわみなみいせき だい15じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市 出川南遺跡 第15次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№207
編著者名	石井佑樹、直井雅尚、福沢佳典
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-0874 長野県松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管:松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)
発行年月日	2011(平成23)年3月31日 (平成22年度)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いでがわみなみ 出川南	ながのけんまつもとし 長野県松本市 よしの ばん 芳野179番 126、127、128	20202	177	36度 12分 26秒	137度 57分 52秒	H21.8.27 ～ H22.1.28	1838.8㎡	県営住宅 南松本団地 建設事業 (12号棟)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出川南	集落跡	古墳 奈良 平安	・竪穴住居址 15軒 古墳時代後期:2軒 奈良時代:4軒 奈良末～平安時代前期:9軒 ・土坑 29基 ・ピット 39基 ・溝 8条 うち自然流路5条 ・石積遺構 1基	〔土器〕 土師器 (古墳～平安) 黒色土器 須恵器 軟質須恵器 〔石製品〕 凹・磨石 砥石 剥片 〔鉄製品〕 刀子 ヤリガンナ	・古墳時代後期～平安時代前期の集落址の一部を調査した。竪穴住居址が集中して分布し、掘立柱建物址は存在しない。また、1辺約8mの奈良時代の大型住居址を検出し、東海系の須恵器を多量に出土するなど、特異な性格が想定される。 ・石積遺構は性格を明らかにすることができなかったが、古墳時代前期の土師器が出土するなど、集落址とは異なる特殊な遺構の可能性がある。

要約

・出川南遺跡は松本市街地南部の奈良井川と田川・牛伏川に挟まれた合流扇状地上に位置する。過去に14次にわたる発掘調査が行われており、古墳時代後期から平安時代にかけての比較的規模の大きな集落が営まれていたことがわかっている。また、遺跡範囲内には古墳時代中期後半の埴輪が伴う円墳３基がある。

・今回の調査は県営住宅南松本団地12号棟建設工事に伴う緊急発掘として実施された。発見された遺構の中心は竪穴住居址で、古墳時代後期２軒、奈良時代４軒、平安時代前期９軒の計15軒が、一部に重複を伴って存在した。古墳時代後期の住居址は７世紀後半と考えられ、北に近接する第４次調査地点でも住居数が最も多く、居住域も拡大する時期である。

・奈良時代の住居址は東区の西半から西区にかけて分布する。中でも第373号住居址は大型住居址で、東海系の須恵器も含め多量の遺物が出土している。調査区内では周辺に同時期の住居址がなく、集落内での立地・性格は今後の周辺の調査を待ちたい。

・平安時代前期は９軒と最も住居址が多く、集落が拡大する時期である。東区に重複するように集中し、居住域は東に移動するようである。

・石積遺構はほぼ東西方向から南北方向に直角に曲がり、東西幅約8.8m以上、南北幅約13.0m以上である。東側は調査区外に続いているが、北側は撹乱されており全形は不明である。上部も撹乱・削平されていると考えられ、遺構の性格・時期を決定できる遺物などは発見できなかった。今後の周辺調査および・類似資料の増加によって解明していく必要があろう。

松本市文化財調査報告No.207
長野県松本市
出川南遺跡
－第15次発掘調査報告書－

発行日　平成23年3月31日
発　行　松本市教育委員会
〒390-0874
長野県松本市丸の内3番7号
印刷　株式会社 二光印刷